
日韓大戦 第二部 遅滞の章

独楽犬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日韓大戦 第二部 遅滞の章

【Nコード】

N2521H

【作者名】

独楽犬

【あらすじ】

経済危機打開のために日本侵攻を決意した高麗連邦共和国。彼らの作戦の第一段階は成功し、福岡と北九州を占領する。日本政府と自衛隊は戦局の打開を狙うも、野党の激しい妨害に遭う。一方、高麗の背後には内戦に苦しむ中国の気配が。そしてアメリカ、ロシアも動き始める。未曾有の危機に日本は、自衛隊はいかに立ち向かうのか？

序 ユギオ（前書き）

これは小説“日韓大戦”の続編です。本小説を読む前に、第一部である“日韓大戦”をお読みになることをオススメします。

序 ユギオ

いつになったら、あれほど統治者によく服従するでしょう、彼らは統治者を侮ることに得意を感じているのです。

またいつになったら、あれほど協調の精神を得るでしょう、いまの彼らはお互いの利益のために協力するどころか、よその人間に対するよりも、もっと横柄に侮辱しあい、嫉妬しあい、中でもとくに私のあるいは公の集会では意義ばかり唱え、そしてまことに頻繁に訴訟を起しあい、互いに助けあつて利益を得るよりも、こうしてお互いをいためて儲けることを好み、公の要務を他人事のように扱いながら、しかもそれを得ようとしてせりあい、そうした競争をする能力があるのを何よりも喜ぶのです。

そのために、幾多の弊害と禍根が国家に根を下ろし、敵意と憎悪とはおびただしく国民相互の間に生じました。それで私は、いまに堪えることのできないような大災厄が国家に降って来はしないかと、いつもすこぶる憂慮しているのです。

『ソークラテースの思い出』（著：クセノフォン／訳：佐々木理）より抜粋

高麗連邦標準時 6月25日午前8時 高麗陸軍士官学校

鄭宇中大統領は校庭に並ぶ士官候補生たちとマスコミ関係者を前に壇上に立っていた。今日は6月25日である。韓国語では6をユック、2をイ、5をオと読み、6月25日をユギオと現す。それは1950年に北朝鮮が韓国に侵攻し、朝鮮戦争が始まった日を示す。

「諸君、今から65年前のことだ。我々は日帝36年の植民地支配から光復を果たしたのもつかの間、アメリカとソ連の超大国の都合により2つの国家に分断された。そして遂には同胞同士で銃を向け

て、戦争をする事態までに発展したのである」

壇上で演説を続ける大統領を国軍の明日を担う若者達は何の疑いも抱かずに見つめていた。

「なぜそのような事態に至ったのか。それは我らに十分な力が無く、大国に翻弄されるしか無かったからだ。だがもはや高麗連邦はかつてのような脆弱な国家では無い。民族の祈願である祖国統一を果たして世界に名だたる大国となったのだ！もはや我々は他国に屈する事はありはしない！」

大統領の力強い宣言に皆が息を呑んだ。

「今、高麗連邦は日本と戦争をしている。日本が高麗連邦を貶めるべく進めている計略を打ち砕く自衛戦争であるとともに、我が民族の団結と意志を世界に見せつけ、我が高麗連邦を大国として認めさせるための戦いだ。我々はこの戦いに必ず勝利にしくはないからな

いのである！」

聴衆は大統領の演説に呑み込まれていた。その内容は一方的で、ただ彼らに都合の良い代物であったが、その場に居た全員がそれを信じ、この戦争における高麗連邦の勝利を確信していた。

「高麗連邦万歳！」

「祖国統一万歳！」

「韓民族万歳！」

「忠誠！忠誠！忠誠！」

「万歳！万歳！万歳！」

絶頂に達した士官候補生たちは大統領を称え、万歳を繰り返した。

彼らは別に愚かであったわけではないし、無能であったわけでもない。ただ純粹なだけであった。

序 ユギオ（後書き）

というわけで、早速ですが日韓大戦第二部の連載がはじまりました。

本当はもつと話を練り込んで執筆を進めてから連載を開始しようとも思ったのですが、現実の日付も劇中の日付も折角、六月二五日ユギオを迎えるのですから、この期を逃すわけにはいかないと。劇中日付が丁度6月25日になってしまったのは、意図したものではありません。まったくの偶然でビックリしています。

ということで第一部以上に政治パートに重点が置かれる予定の第二部ですが、読者の皆様、どうか御付きあいしていただきたい。

一・情勢は些か悪し

2015年6月25日 午前5時 九州上空

航空自衛隊は百里基地に唯一の偵察飛行隊を配置している。装備機種は近代化改修に対応していない初期型のF-15Jを戦術偵察機に転用したRF-15Jである。

百里基地を飛び立ったRF-15Jは翼の下には通常載せられる外装式戦術偵察ポッドではなく巨大な飛行機のようにも見える物体を2機も吊り下げていた。それこそ航空自衛隊が偵察能力を向上させるために導入した新型の無人偵察機TACOM-Rである。その特徴は航空機の翼に吊るされていることから分かるように他の航空によって空中に運ばれてから発進することである。

冷戦中に開発された戦略偵察機U-2/TR-1、それに冷戦後に配備された無人偵察機のプレデターやグローバルホーク。これらの機体は高高度で長時間滞空できるように設計されている。だからこそ機体に比して巨大な直線翼が使い、莫大な揚力を発生させて僅かな推進力のみでの浮遊を可能とするのだ。しかしそれは滞空能力を高める代わりに空気抵抗を生み出して加速力を失わせることになった。つまり急上昇ができないのである。これは日本の航空自衛隊が配備するうえで重大な障害となった。

なぜかと言えば日本周辺には多くの航空路があり、日夜旅客機が飛び交っているからだ。戦略偵察機が偵察活動する高度そのものは民間航路と重ならないが、そこまで上昇するには途中で旅客機の飛ぶ高度を通過する必要がある。戦闘機など上昇能力が高い機体なら短時間で突破することが可能であるが、急上昇ができない戦略偵察機は多くの時間をかけなくてはならず危険も増大する。有人機なら人の手で補うこともできるが、完全自律飛行能力まで求められる無人機ではそうはいかない。

というわけで自衛隊が編み出した解決策が空中発射方式であった。

上昇の段階の問題を有人機に搭載されることでクリアしたのである。TACOM、正式には多用途小型無人機と呼ばれる無人飛翔隊はその名の通り標的の曳航、各種訓練支援など様々な任務に対応することが可能で偵察もその1つなのだ。偵察型であるTACOM-Rの下部には偵察用カメラが装備されているのだ。

しかし問題が無いわけではない。なにしろ他の航空機に搭載するものであるから、あんまり重かったり大きかったりしてはいけない。翼も小さく生み出せる揚力は小さいし、燃料もそれほど多く載せられない。偵察に不可欠な滞空能力が劣っているのである。というわけでTACOM-Rは平時の監視活動よりも主に非常時の戦術偵察任務に使われる。今回もそれが任務であった。

RF-15Jは上空を監視しているAWACSと緊密に連絡を取り合いながら北を目指していた。一応、福岡からは距離をとってTACOM-Rを射出する手筈になっているが、高麗空軍による攻撃の可能性はいくらでもあった。なにしろ今は戦時中である。

航法装置がRF-15Jのパイロットに射出地点に到達したことを知らせた。岩国近くの瀬戸内海上空、ここから射出されたTACOM-Rは1機が北九州、もう1機が福岡を空から偵察する。撮影した画像はリアルタイムに送信され、地上の自衛隊機地で受信される。そして偵察を終えたTACOM-Rは佐世保沖まで飛行して着水し、第2護衛隊群の残存部隊に洋上で回収される手筈であった。

パイロットがTACOM-Rは軌道修正なしに目的地に向かえるように針路を修正して1機のTACOM-Rのシステムを起動させた。

「TACOM-R-1、射出！」

パイロットが射出ボタンを押すとRF-15JのパイロンからTACOM-Rが切り離された。それと同時にTACOM-Rのエンジンが遠隔操作で点火された。

「TACOM-R-1、オペレーション、スタート」

小型のジェットエンジンに点火され、TACOM-Rはぐんぐんと加速してRF-15Jの前を飛んでいった。後は自律飛行するの
でRF-15Jの乗員にすることはなにもない。成功を祈るだけ
ある。

RF-15Jの乗員は2機目のTACOM-R射出の準備を始めた。
た。

午前11時 防衛省会議室

防衛省には統合幕僚長を筆頭とする制服組と防衛省事務次官を筆頭とする文官の背広組が集まり現状の報告と今後の方針を定める会議を開いていた。議長は防衛大臣である中山である。最初に報告をしたのは航空幕僚長の斉藤空将であった。

「今朝、我が航空自衛隊の無人偵察機TACOM-Rが福岡と北九州に対する強行偵察を実行しました。偵察は成功し、高麗軍の展開状況を知ることができました」

「損害は？」

中山が尋ねた。

「1機が高麗軍のミサイルに撃沈されました。しかもう1機は回収に成功しています」

無人機は高価だが無人なので惜しくは無かった。

「得られた写真情報から推測するに、高麗軍は合計2個師団ほどの戦力を上陸させています」

北九州有事は3日目をかえ、高麗軍は第11師団の全部隊の揚陸を終えた。一方、海兵隊も2個目の連隊を揚陸させた。これまでの兵力と併せて高麗軍は九州に2個師団ほどの兵力を送り込んだことになる。

斉藤が自分の説明を終えると席に座った。次に情報本部長の真田陸将が立ち上がった。

「我々の無線傍受アンテナが捉えた情報によりますと、上陸した高麗軍部隊は<千里馬>^{チヨンリマ}任務部隊と呼ばれているようです」
「チヨンリマ？」

背広組の1人は知らない言葉に戸惑っていた。

「千里の馬と書きます。韓国の神話に登場する馬で、翼を持ち千里を1日で駆けるんだそうです」

真田は無線傍受で得られた情報の詳細をさらに説明した。

<千里馬>任務部隊はチェ・チョンヒ陸軍大将を最高司令官として、その主力となるのは韓国軍の第11機械化歩兵師団である。

「第11機械化歩兵師団というのは強力な部隊なのかね？」

背広組の1人からの質問に剣持陸上幕僚長が答えた。

「はい。最近、装甲化が進められた師団の1つです。高麗軍の精鋭部隊である首都師団や第26機甲師団に比べれば幾分戦力は劣りませんが、近代化が遅れている陸上自衛隊には十分な脅威です」

剣持の声はこれまで陸上兵力の近代化に力を入れなかった現状への不満を背広組や防衛大臣にぶつけているかのようでもあった。

第11機械化師団は指揮官のキム・ジェフン少将の下、3つの旅団から成る。第9旅団と第13旅団、第20旅団である。各旅団は1個戦車大隊と2個の歩兵大隊、砲兵大隊より編成される。それらの部隊は完全に機械化、装甲化されていて、戦車大隊にはK1A1戦車、歩兵大隊にはK200装甲車、砲兵大隊にはK55自走砲が配備されている。

ペク・キョクイル大佐率いる第9旅団は師団の中では最初に九州に上陸し、福岡一番乗りを果たした。現在は自衛隊の大宰府防衛線を前に春日市に布陣している。

それに続くキム・ピョンクン大佐の第13旅団の主力は粕屋町に配置され、1個大隊を福岡空港の占領に派遣している。第13旅団は自衛隊が居座る飯塚に対しても大宰府防衛線に対しても必要に応じて即座に部隊を進める位置にあるわけである。

最後にイ・ピョントク大佐の第20旅団は直方市に布陣し、北から飯塚へと進撃しようとしている。

一方、高麗海兵隊は疲弊した第1海兵連隊を第5海兵連隊と交替させた。1個中隊の戦車とともに上陸した第5海兵連隊は前原市南部に集結し、西の陸上自衛隊第16普通化連隊戦闘団に対する防衛線を構築しつつ、斥候隊を県道56号線に沿って南下させ、県境になっっている筑紫山地のいくつかの峠を偵察させていた。彼らは然るべき時に山地を突破して、自衛隊の大宰府防衛線の後方へ浸透することを任務としているのだ。第1海兵連隊は前原市北部に主力を集めて第16普通科連隊戦闘団正面を守っていた。また予備の大隊を福岡市内に派遣し、占領行政部隊の増援にしていた。彼らは多くの装甲車輛を失い、いまや軽歩兵部隊になっていた。しかし高麗海兵隊は依然として20輜ほどのK1A1戦車とやはり20輜ていどのK55自走砲を有しており、侮りがたい戦力である。

「さらに敵軍は対馬、吉岐を占領して航空部隊を前進させています。情報収集衛星による観測と電波情報収集の結果を総合しますと、K F-16とF-15Eをそれぞれ1個飛行隊ずつ、計40機ほどが展開しているようです。また高麗南部に高麗空軍の主力が集結していますし、北九州、福岡の両空港も制圧しておりますから、今後はさらなる増援がありつると考えられます」

斉藤空将が付け加えた。

「敵の海上部隊の動向は？通商破壊でもはじめたらやっかいなこと
に…」

防衛大臣の言葉に笹山海将は首を横に振った。

「通商破壊については杞憂でしょう。それをやったら周辺海域を航行するあらゆる船の母国、世界各国を相手にすることになってしまふ。それにそうした作戦が十分な影響を与えるには時間がかかります。今、通商が断たれても日本なら備蓄で1ヶ月から2ヶ月はもちます。それほど長期間の戦争は向こうも望みません」

「つまりこの戦争は1ヶ月以内に決着がつくと？」

「おそらく。我々は高麗海軍の【クワンゲト・デワン】型駆逐艦1隻に損傷を与え、揚陸艦1隻を撃破しましたが主力は健在です。高麗海軍部隊は今、陸軍部隊と物資の輸送に精を出しているでしょう。ただ制空権はいまのところ高麗側が握っていますし、まだ多数航行している中立船舶への被害も考えれば、現状では海上自衛隊としても迂闊な行動はできません」

「自衛隊の方はどのような防御体制を築いている？」

防衛大臣の質問に剣持が引き続き説明を行なった。

陸上自衛隊は大宰府防衛線を固めつつあった。

高麗軍の侵攻が予想される大宰府正面を任されたのは北上してきた第8師団であった。最後に都城から第43普通科連隊が到着したことで第8師団の集結が完了した。

大宰府防衛線は福岡市と小都市との間を大宰府、筑紫野を通って繋ぐ縦深5kmほどの隘路で、その最前線は大宰府跡に近い都府楼地区を挟んで北の岩屋山（二八一高地）と南の天拝山（二五七高地）の間に引かれていた。高麗軍の侵攻経路は国道3号線と県道31号線が予想されるので、その周辺に主力部隊が集められている。鷺田川を境に北側に第24普通科連隊、南側に第42普通科連隊が配置されている。そしてその背後、筑紫野市中心部に第12普通科連隊が配備されて二重の防衛線を用意したのである。さらに最後に到着した第43連隊が大宰府と宇美町の境界線、県道35号線付近に展開して防衛線の北を固めた。

一方、第4師団は高麗軍との戦闘で多くの戦力を失い、しかも部隊が分散していた。第4師団司令部は飯塚を守る第41普通科連隊戦闘団を第1空挺団に預ける代わりに西部方面普通科連隊が配属され、大宰府の西側、福岡・前原の南側の防衛を託されることになった。その一帯は背振山地の山々が連なり、侵攻ルートは幾つかの山道に限られていた。

第一のルートは坂本峠を通る国道385号線である。このルートの防備は桜井らの属する第19普通科連隊の担当となった。

第二のルートは三瀬ルートを通る国道263号線で、ここの防備は西部方面普通科連隊の担当である。

そして海沿いに進むルートは引き続き第16普通科連隊戦闘団が防衛する。彼らは高麗海兵隊が陣取る前原市と隣接する二丈町の境に防御ラインを引き、小さな山々と河川を巧みに利用して防御陣地を築いていた。また各種重装備も配属され、大きな被害も受けていないことから、必要に応じて前原、そして福岡に側面より突入するという重要な任務が与えられた。

第一空挺団は飯塚の防備を担当することとなった。飯塚は北九州と筑紫野を結ぶ国道200号線と福岡・周防灘を結ぶ国道201号線が交差する街で、ここを高麗が押さえれば占領地である北九州と福岡の連絡を確固たるものとするとともに、大宰府防衛線を側面から攻撃する策源地になる。一方、自衛隊が押さえれば高麗側の支配地域を沿岸地域に押さえ込み、占領地に対して圧力を加える事ができる。まさに戦略的な要所であった。飯塚の防衛には第41普通科連隊戦闘団が担っていたが、彼らは臨時に第1空挺団に配属されることになった。

飯塚市は山に囲まれた盆地で、進撃路は限られている。高麗軍の攻撃が予想されるのは国道200号線に沿って北側からか国道201号線を使って西側からの二通りである。空挺団の2個普通科大隊が市の北と西に配備され防備を固めた。一方、第41普通科連隊は街の東側に配置され、火消し部隊として敵が攻撃した場所に増援として派遣されることになる。そして空挺団最後の大隊は特別な任務を与えられて山の中に消えていった。さらに西部方面隊はこの防備を重視しているらしく第19普通科連隊とともに福岡防衛線を守っていた10式戦車中隊の生き残りが増援として派遣されることになった。

周防灘に面する苅田町には中央即応連隊が防衛線を張っていた。連隊には第40普通科連隊の最後の生き残りである第2中隊が編入され増強されていた。

これが2015年6月25日朝現在の陸上自衛隊の配備状況であった。このように一応の防衛態勢を整えたものの、東京では北九州有事対処基本方針が国会の承認を得ておらず積極的な攻勢は不可能な状況であった。ただ、陸上自衛隊の地方張り付け部隊は軽装備の部隊で、十分に装甲化された高麗軍部隊とまともに戦うのは難しい。どちらにしろ北海道から陸上自衛隊唯一の機動打撃部隊である第7師団の到着を待たなくてはならない。

剣持に続き斉藤空将が航空自衛隊の状況を説明した。

築城より退避したF-2装備の第6飛行隊とF-15J装備の第304飛行隊であったが、退避先の新田原は結果として大変混雑した状況になっていた。新田原には元々F-4EJ改装機の第301飛行隊と教育飛行隊が配置されていて、それに2個飛行隊が加わったのであるから当然である。この事態を打開するために西部航空方面隊司令部は教育飛行隊と第6飛行隊を沖縄の那覇基地に退避させ、新田原基地は防空に専念することとなった。さらに小松、百里、千歳からF-15飛行隊を1個ずつと三沢からF-2飛行隊2個を増援として派遣することを検討していた。

最後に笹山が海上自衛隊の動向を伝えた。

高麗軍の攻撃を受けた第2護衛隊群の残存艦艇は佐世保に退避した。舞鶴から第3護衛隊群が隠岐諸島の沖に展開して、高麗軍の東進を防ぎ山陰地方への奇襲上陸作戦を阻止する位置を占めた。地方隊の稼動艦と航空集団が総力を結して高麗軍の更なる侵攻を防ぐべく行動中である。一方、第1護衛隊群は沖縄沖を北上中である。オーバーホール中の第4護衛隊群も出撃準備中である。

「なるほど。よく分かった」

防衛大臣は居並ぶ将星たちの顔を目配せしながら言った。

「それで今後の対処方針は？」

「遅滞^{ちたい}作戦です」

剣持が答えた。

「遅滞作戦というのは、つまり時間稼ぎです。我々は高麗軍を包囲する部隊を使って、侵攻してきた高麗軍に対して小規模な戦闘を繰

り返して、その速度を弱めます。その隙に反撃のための戦力を集めるのです」

「そして戦力が整った時に一気に反撃をすると？」

「そうです。ですからその時までには国会の承認が必要です」

防衛大臣はその言葉に頷いて同意を示した。一刻も早く国政を動かさなくてはならない。それが防衛大臣である彼の使命であった。

二・新たな日の始まり

首相官邸 正午

烏丸総理は参議院への出席を終えて官邸に戻った。衆議院において“北九州有事に対する政府基本方針”が可決されなかつたため参議院としてはなにもすることができず、有事の真っ只中であるにも関わらず平凡な法案の審議に終始した。

烏丸が自分の執務室に入ると、後ろから菅井官房長官がついてきた。烏丸は自分の椅子に座ると執務机を挟んで前に立つ菅井に言った。

「まさかこのまま廃案になる、ということは無いやな？」

「さすがのような目つきで聞いてくる首相に菅井は何時もと変わらぬ口調で答えた。

「さすがにそこまでは民主党もできないのでは無いでしょうか？世論は自衛隊の出勤に対する支持が上がっています。あのショックキングな映像が引き金になったようです」

ショックキングな映像とは、烏丸も目撃したテレビ報道で、アナウンサーや一般市民が高麗兵に無残に射殺されたあの衝撃的なシーンである。

「それに自衛隊出動反対では党内右派が騒ぎますしね」

口ではこのように言う菅井であるが、実のところ民主党右派の影響力については特に期待はしていなかった。民主党右派勢力は自由民権党の主な支持層である保守層の票を割るための餌に過ぎない。

「とにかく何時ぞやのように“迅速採決”なんてしませんでしょうね。一昨日に、事は慎重に進めなくてはならない、と言ったばかりですから」

迅速採決とは民主党が2008年12月に参議院厚生労働委員会で自党が提出した法案を碌な審議もせずに採決を強行した事例を正当化する方便として使ったものである。民主党は与党の強行採決を「審議を尽くしていない」「強行採決だ」「数の暴力だ」と批判しておきながら、自分が参議院で数的優位を確保するとこの有様である。それに衆院委員会で審議が尽くされない原因の一つに民主党が審議拒否を繰り返すことが挙げられることも指摘しなくてはならない。

「それでは不信任案を出すってことも無いかな」

「おそらく無いでしょうね」

菅井はそうは言ったものの、あまり自信を持てなかった。社会民生党はともかく、彼らは彼らなりに筋を通す。民生党の方はどのような行動にでるか予測しきれない。なにぶん自由民主党を倒すという事を唯一の目的にした選挙互助組織だ。党員の考えがまるでまとまっておらず、“黒”と言ったことを次の日に“白”だと言つことを平気で行なう。予測などできるわけがない。

菅井は話を続けた。

「こんな時に“自分達が国を守る責任を負おう”と考えるような連中じゃありませんよ。とにかく我々の足を引っ張って邪魔して被害を拡大させて、そうなれば政府の支持率が下がります。それで有事が終わった後に自分達のことを棚にあげて“政府の不始末”を散々非難してから解散に持ち込んで政権交代、という魂胆でしょう」

「そうだな。とにかく策を考えてみないと。基本方針可決のために民主党右派をこちら側にひきつけることはできないのかな？」

「どうでしょうか？右派勢力はあまり大きくありません。社会民主党と民主党が連合を結んだ以上、民主党右派だけでは打開は難しい。となると…」

菅井は1つの可能性を思い浮かべた。

「何とかなるかもしれません」

烏丸はそれを聞いて嬉しそうであった。

「策があるなら嬉しいね」

烏丸はそう言いながら机の上のリモコンを手にとってテレビの電源を入れた。

テレビでは相変わらず北九州有事関連の報道が流されていた。避難警報が出されている区域が示され、福岡や北九州から逃れてくる避難民の様子や彼らへのインタビューが流された。そしてスタジオに戻ると、アナウンサーが評論家と名乗る人々に今後の政治の動きについて尋ねた。

菅井と今後の方針を巡り意見を交わしながら、テレビの報道に耳を傾けていた。そしてテレビから流れてきた次の言葉を聞いて烏丸は言いかけていた言葉を飲み込んでしまった。

<烏丸首相は高麗連邦共和国の要求を呑むのではという事も言われていますが>

「なんだそれは？」

烏丸と菅井は会話を止めて、テレビから流れる声に神経を集中し

た。その報道が言うには、烏丸首相は自らの党を離れることはできないので高麗の要求を呑んで武力解決を避ける道を選ぶであろうという。さらに与党関係者なる者の言葉として「首相は武力解決の撤回を決めている」という情報が紹介された。与党関係者なる人物の詳細はもちろん語られない。

「いったいどうなっているんだ？与党関係者ってのは誰だ？」

たじろぐ烏丸に対して菅井はいたって冷静であった。彼は前内閣の大臣として前首相を支えていた時代にこのような謀略を何度も経験している。

「後で、武力による解決を進める、と発表した時に『ブレた』と貴方を批判するための仕込みですよ。前の総理を批判した時と同じ手です」

「しかし彼は、前総理は……」

「実際にブレていた、とでも言うのですか？具体的にどこなところですか？“郵政民営化から3年経ったので3年間の実績から不具合を見つけて改善しよう”と言ったら、マスコミが民営化の構想を始めて聞いた時の印象が“反対”であったという事を持ち出して、まるで前総理が民営化そのものを見直そうとしていると決め付けて総理を批判した時のことですか？」

それを聞いた烏丸は驚きの表情を現した。

「それとも、どこから出てきたのか分からない与太話や噂話を持ち出して、前総理が大規模な内閣改造やら党役員人事刷新やらをしようとしていると決め付けて、最初の方針通りに退任した閣僚の後任を決めただけなのに『ブレた』『ブレた』と叩かれたこと？」

「そんな話だったのか？」

「ええそんな話です」

それがいわゆる典型的な前政権批判の文句『ブレる総理』とやらの実態である。マスコミや野党はこんな下らないことで前の総理を批判していた癖に野党の“ブレ”を無視するどころか賞賛さえしている。例えばこんなことがあった。民主党は前々回、2009年の衆院選のことである。民主党はそれまで国会でインド洋への多国籍軍支援のための自衛艦派遣、ソマリア沖への海賊対処のための自衛艦派遣に反対の立場をとってきた。前者では野党の反対のために多国籍軍への支援を一ヶ月ほど中断せざるえなくなり、日本の国際的な信用は大きく傷ついた。また後者はそもそも発案者は民主党の議員であるにも関わらずこの体たらくである。それが選挙前になって一転して容認するといひ始めたのである。総理とは違い重要な政策に対する明らか変節、まさに“ブレた”のであるが、これをマスコミは“現実路線”と逆に持ち上げた。

なるほど、確かにインド洋やソマリアへの自衛隊派遣を容認するのは良いことかもしれない。だが、民主党のそれまでの反対で多くの混乱が生じたことを忘れてはならない。とくにインド洋沖の多国籍軍支援任務は中断をせざるえなくなり関係国に多大な迷惑をかけたのである。容認姿勢に転じたことを“現実路線”であると言うのなら、それまでの民主党の政策を“非現実的”であると認めているも同然である。ならば、それまでの非現実路線で国勢を騒がし日本の威信を傷つけたことをまず批判すべきではないのだろうか？それとも野党ならば非現実的な政策を主張しても問題ないというのであろうか？与党と同じように投票権を持ち、インド洋派遣の有様を示すように実際に影響力を行使できる立場にあるにも関わらず。まさに無責任としか言いようのない行動が許されるといのであろうか？それを許しているのが今の日本のマスコミなのである。

前々回の衆院選ではさらにこんな話がある。民主党はある日、わざわざホテルに会見場を特設してマスコミを招きマニフェストを発

表し、さらにマニフェストの完成が遅れていた与党である自由民権党の批判した。しかし、その内容が批判を受けると2日後には一転して「発表したのは政権政策集であってマニフェストでは無い。だから今後の修正も可能だ」と言い張ったのである。あれだけ盛大に発表しておきながら。

そして、それで終わったと思っていいたらその翌日には今度は「マニフェストは3日前に公開した」と言い張る。昨日は「あれはマニフェストではない」と言っていたにも関わらず。もうブレるとかそういうレベルの話ではあるまい。

背振山地

国境の長いトンネルを抜けると雪国であった、とはノーベル賞作家川端康成の代表作『雪国』の書き出しであるが、桜井雄一はそれを唐突に思い出して苦笑した。今回の場合は“国境の長いトンネルを抜けると戦場であった”だがね、と思いつながら。

“さざんかロード”の愛称で知られる東背振トンネルは福岡県と佐賀県の県境、標高1055メートルを誇る最高峰の背振山をはじめとする背振山地の山々を貫く全長1.4キロのトンネルである。大型車が通行困難で冬季には交通規制が布かれる坂本峠の不便を解決するために建造されたこのトンネルは、今や自衛隊の補給路と化している。有料道路だが、有事法制により自衛隊は無料で利用できる。阪神大震災の時のように隊員が自腹で交通費を払うことを免れたのである。

桜井は筑紫野の避難所を出た後、黒部とすぐに分かれ 彼は熊本に向かったが、それを桜井は知らない 桜井は原隊に復帰すべく坂本峠までやってきた。トンネルの手前にある道の駅に設置された第19普通科連隊本部に出頭してから、彼の所属する第一中隊の担当する防御線を目指して連絡系の73式小型トラックに便乗した。

トンネルを抜けると、真っ青な空が姿を現した。久々の青空に桜井は見とれていた。なにぶん雨空の下であんなに酷い目にあつたので、青空を見ていると彼も晴れ晴れとして気分になつたのである。

「晴れましたね」

「晴れちゃつたな」

ハンドルを握る2等陸曹は晴れるのを嫌がっているようであった。桜井は不思議に思ったが、すぐにその理由に気づいて自分の迂闊さにまた苦笑いした。晴れるということは高麗軍にとって絶好の攻撃日和ということである。

青空への思いが薄れると、今度は暑さが気になり始めた。山々を背にしているので直射日光は避けられたが、一昨日・昨日の雨のために湿度が高くなっていた。幌が外され、風にあたれる車中と言えども無視できる暑さではない。首筋にはすでに汗が浮かんでいた。

「こりや地獄だな」

やがて交差点が見えた。博多から坂本峠、もしくは東脊振トンネルを越えて佐賀県神埼市を通り、最後は有明海に面する福岡県柳川市に通じる国道385号線と県道136号線の交差点で、連隊の最終防衛ラインと考えられている。ここを突破されそうになつた場合は峠の南側に撤退して作戦を立て直さなくてはならない。

73式小型トラックは桜井を乗せたまま交差点からさらに国道385号線を北に進む。川に沿つた道を進んでいくと何軒かの家や畑が見えた。そして畑で農作業に勤しむ老人の姿も。

「避難命令が出ただけだな。どうしても家を離れたくないって奴が何人か居るんだよ」

2曹が説明した。

やがて湖が見えた。南畑ダムのダム湖である。桜井たちはダム湖畔の道を進み、高圧線の下を潜って、ダムの横まで来た。ダム上では何人かの隊員が高麗軍の進んでくるであろう北に視線を向けている。

「特科連隊や対戦車隊の観測班だよ。連隊の作戦方針ではダムの手前で敵を阻止するつもりらしい」

ダムを通り過ぎると73式は川から離れて話の中に入っていた。そして急カーブをまわると停車した。停まると待っていたらしい古谷小隊長が駆けつけた。

「聞いたぞ。大活躍だったな。英雄だな」

降りようとする桜井に手を貸しつつ古谷が言った。

「もうあんなのはご免ですよ」

桜井は73式小型トラックから飛び降りた。

「ダムの手前は急なS字カーブになっているんだ。ここで敵を迎え撃つ計画になってる。案内するぞ」

古谷は林の中を指差した。

道から逸れて斜面を降りると、小隊の守る陣地に辿り着いた。木々の中に設けられた塹壕で、目の前には川が流れ、その向こうには、陣地から50メートルほど先であるうか、道が見える。先ほど桜井

らが走っていた国道385号線が川の向こうの道に繋がっているらしい。

「敵はおそらく385号線に沿って南下してくる。そこでここから敵の側面を狙う」

すると桜井の姿に気づいた小隊の隊員たちが集まってきた。

「おお生きてたか」

最初に声をかけたのは小隊陸曹の砺波であった。それを皮切りに隊員たちが次々としゃべり始める。

「いやあ、やっぱりお前がいないとなあ」

「頼りにしてるんだぞ。狙撃レンジャー」

「今は猫の手も借りたいくらいさ」

桜井は仲間たちとの再会に喜びつつ、仲間の人数が昨日より減っているのに気づいた。桜井はそれについて尋ねないことにした。

二・新たな日の始まり（後書き）

というわけで私には珍しく2日連投です。それで気づいたら民主党批判が半分を占めてました。いいんだろうか。まあいいか。

しかし、おそらくこの小説をお読みの皆さんならば、少なからず民主党の政策、特に安全保障政策については疑念を抱いている方が多いでしょう。実際、例のマニフェストなのか、それとも政権政策集なのかはつきりしないものを見てみますと安保政策についてはほとんど触れられていない。唯一触れられているのは北朝鮮の核問題に対する対応くらいですね。「核武装を容認しない」「断固とした措置をとる」と言いつつ具体策は「貨物検査の実施」だけでなにをするのかはほとんど書かれていない。まさに口だけという感じですよ。どだい、北朝鮮船舶貨物検査法を審議拒否で廃案に追い込んだのはどこの党だ！という話なのですが。

私は昨年、二十歳を迎え今回の衆院選が初めの投票となります。勿論、麻生太郎首相を応援します。

私の意見、主張とは異なる意見をお持ちの方もいるでしょう。ですが、今回の衆院選が日本の運命、行く末を決める選挙であるという点については一致するものだと思います。ですから選挙権をお持ちの方は必ず選挙に行きましょう。それが国家の主権者の義務だと思います。

三・ステルス艦カニンガム出撃！

東シナ海 アメリカ海軍【エセックス】遠征打撃群 駆逐艦【カニンガム】

ズムウォルト級駆逐艦はアメリカ海軍の区分では駆逐艦に分類されているが、かなり奇妙な軍艦であった。外見を見て、まず気づくのは船首の特殊な形状である。ズムウォルトの船首は下方向に傾斜して先端は水面下にある。通常の船とは逆である。波浪貫通型^{ウェーブリア}船首と呼ばれるこの形状は高速でも安定して航行できる特性があるが、レーダーの電波を上空に反射してステルス性を向上する効果もある。乾舷も普通とは逆に内側に傾いているタンブルホーム船型も同様だ。艦橋構造物も内側に傾斜した平面の壁で構成され、アンテナや各種機器は壁の中に埋め込まれ、手摺さえ外からは見つけることが出来ない。つまりこの軍艦は極めてステルス性が重視された艦であるということがわかる。

そもそも船体そのものが巨大だ。満載排水量は1万5000t弱で、アメリカ海軍の現存する唯一の“巡洋艦”^{クラス}タイコンデロガ級よりも巨大な“駆逐艦”なのだ。そして甲板には2つの砲塔らしきものが見えるが、なぜか砲身が見えない。それはレーダーに捕捉されないように格納されているからだ。もし射撃状態のズムウォルト級が貴方の目の前にあったとすれば、貴方は駆逐艦には不相応な巨大な大砲を見ることが出来るだろう。それこそがズムウォルト級駆逐艦を象徴する兵器である62口径155ミリ単装砲AGSだ。AGSとは先進砲システム^{アドバンス・ガン}の略で、長射程誘導弾を使った場合にその射程は185kmに達する。

ズムウォルトはつまるところ旧来の砲艦の再来である。冷戦後にアメリカ海軍が掲げた新戦略“海からの（フロム・ザ・シー）”を体現する艦であり、洋上から陸上に対して火力を提供し、それによって国益を守るのが最大の任務なのだ。アメリカ海軍の戦略は敵艦

隊の撃滅という日露戦争後に日本を相手に始まって冷戦の終わりとソ連崩壊によって事実上終焉した目標から、大航海時代から始まる本来の海軍的任務に移行したのである。

そしてズムウォルト級の4番艦として第7艦隊に配属されたのがDD1003【カニンガム】なのだ。その艦長を任されたのがアメリカ海軍初の女性戦闘艦艦長であるポーリー・レントン中佐だ。彼女はCICで部下たちとともに中国軍の動向に注意を払っていた。

そこへ通信士が受信した命令文を持ってやってきた。レントンは受けとって黙読した。発進元はハワイの太平洋軍司令部であった。レントンは読み終わると、主要な士官は艦長室に集まるように命じた。

東シナ海 アメリカ海軍空母【ジョージ・ワシントン】

アダムス艦長が艦内を歩いているとパイロット同士が言い争っているのが見えた。パイロットの1人が飛行隊長になにかを言い寄っていて、もう1人のパイロット たぶんウイングマン がそれを抑えている。

「何事だね？」

アダムスが飛行隊長に尋ねた。

「バーネット大尉が日本に出撃させる、とつるさいんです」

するとバーネットは、今度はアダムスに言い寄ってきた。

「それが我々のやるべき任務でしょう。同盟国が侵略を受けているんですよ？それなのに俺達はそれを目の前にして中国と戦争ごっこをしている。こんな状況が許されるわけがない」

「バーネット大尉。戦争ごっこだと？これも立派な任務だ。軍の職務をバカにするようなマネは許さんぞ」

そこへ任務群司令であるフランク・スチュワート少将が姿を現した。

「艦長。君の飛行隊を借りたいんだが」

アダムスはスチュワートのところへ駆け寄って幾つか言葉を交わした。それからバーネットの方に目を向けた。

「よし。だったらお前を日本に出撃させてやる」

強襲揚陸艦【エセックス】

第31海兵遠征隊はこの時点でアメリカ軍が日本に投入可能な陸上戦力の全てであった。

海兵遠征隊は各種部隊で増強された海兵大隊を基幹として編制される小規模な遠征部隊で、その規模のために僅か揚陸艦3隻でも展開して自前の物資だけで独立して2週間作戦行動が可能であるという機動性の高さを誇る。海兵遠征隊の任務は紛争が発生した地域にまっさきに出撃し、その拡大を抑えて後続部隊の到着する時間稼ぎをすることである。

アメリカは日本と韓国の戦争に介入するかどうかはまだ不透明な状況であるが、アメリカ太平洋軍は戦争行為にならない範囲で行動を行なう決断をした。第31海兵遠征隊から増強1個中隊を基地の警備増強を名目に佐世保に派遣するというのもその1つであった。というわけで第31海兵遠征隊の大隊上陸チームC中隊が【エセックス】の甲板に集結していた。彼らは5機のMV-22オスプレイに搭乗して佐世保を目指すのである。

MV-22はCH-46シーナイトやCH-53シースタリオンといったそれまでの大型輸送ヘリコプターを代替する目的で開発されたヘリコプターと飛行機の子的な航空機、テイルローター機で、離着陸時にはプロペラを上に向けてヘリコプターのように垂直に飛行し、上空ではプロペラを前に向けて飛行機のように高速飛

行できるのである。

C中隊の指揮官、ウィンターズ大尉は大隊長のアフマド中佐から指示を受けていた。アフマド中佐はアラブ系の将校である。9・11同時多発テロ以来、アメリカにおけるアラブ人の立場は芳しくないが、アフマド中佐は祖国への献身を一層示して、その状況を何とかしようと考えた者の1人であった。その立ち位置は第二次世界大戦時の日系人部隊に通じるものがある。

「名目はあくまでも警備の増強だが、君がやるべき任務は情報収集だ。日本側の了解もとってあるから、必要に応じて偵察班を派遣しろ」

C中隊は大隊司令部直轄の武器小隊から迫撃砲1門を、STA小隊つまり観測及び目標要求小隊から数個の偵察班を配属されていた。実のところ、派遣部隊の主力はSTA小隊偵察班なのだ。

「よし。出撃だ」

C中隊の海兵たちはそれぞれ割り当てられたオスプレイに乗り込んだ。ウィンターズ大尉は先頭のオスプレイに乗った。まず護衛のAH-1Zヴァイパー攻撃ヘリコプター2機が発進し、それに続いてオスプレイが1機ずつ飛び立った。彼らは上空で護衛の戦闘機と会合する手筈であった。

空母【ジョージ・ワシントン】

2機の戦闘機がカタパルトに接続されていた。戦闘機はかつて連合艦隊司令長官山本五十六の搭乗する一式陸攻を撃墜したことで知られるP-38戦闘機に由来してライトニングIIの愛称が与えられている。形式番号はF-35C。それはアメリカ軍が空海軍及び海兵隊の主力となるべく開発した統合打撃戦闘機であった。ジョイント・ストライク・ファイター

F-35は空軍向けのA型、垂直離着陸機であるB型、そして空母艦載機であるC型の3タイプが存在するが、C型は海軍において敵に第一撃を与える機体と位置付けられていて、そのためステルス性が一番高く、しかも燃料搭載量がもつとも多いという特徴を持つ。

2機のF-35Cには長崎へ向かう海兵隊部隊の護衛が命じられた。護衛機が存在をアピールして敵の攻撃を抑止するためか、本来ならステルス性を維持するためにレーダー波を遮断できる機内の武器格納庫に収められるのが通例のミサイルを翼の下に吊るしている。そのコクピットに収まっているのはバーネット大尉であった。

<たく。お前がゴネたせいで俺までとばっちりじゃないか>
ウイングマンが無線越しにぼやいている。

「いいじゃないか。これが軍人の任務つてもんさ」

戦闘機の背後でジェット・ブラスト・デフレクターが立ちあがった。甲板作業員や他の航空機をジェットの排気から防護するための壁であるJBDのお陰でバーネットはエンジンの出力を上げる事ができる。F-35に搭載されるF135ターボファンエンジンは推力が双発機に近い17t以上になる化け物のようなエンジンである。その排気は凄まじいものになる。

その頃、甲板では戦闘機を飛び立たせるべく甲板要員たちが忙しく働いている。彼らは仕事ごとに色分けされているジャケットとヘルメットを身につけていて、バーネット大尉はその中でも緑色のジャケットを身につけたカタパルト要員たちである。彼らはF-35とカタパルトの固縛を確認すると、コクピットのパイロットとカタパルト管制装置に座るカタパルト士官に小さな黒板を見せた。そこにはF-35Cの現在の重量 正確には現在そうなっている予定の重量 が書かれている。

それを確認するとカタパルト士官は原子炉から供給される蒸気を調節した。カタパルトの蒸気圧は機体の重量や天候、気候に応じて

細かく調節される。もしこれを誤れば、戦闘機は海面に突入したり、逆に固縛されている前輪だけが機体から外れて飛んでいくことになったりするのだから、その責任は重大である。カタパルト士官がG Oサインを出した。

それを見たバーネットはエンジンの出力をアフターバーナーなしでの最大出力まで上げた。それとともにカタパルト士官が発進ボタンを押した。

蒸気圧により一気に機体を飛行速度まで加速させ、空中に押し出した。2機のF-35Cは一瞬落下した後、急上昇していった。

佐世保基地

2機のF-35CライトニングIIと2機のAH-1Zヴァイパーに護衛されて10機のオスプレイがヘリポートに交代で着陸して兵士たちを次々と吐き出していく。ウィンターズ大尉が真っ先に降り立ち、部下達を誘導していく。

一時間して200名弱の兵士たちが全員降り立った。これが北九州有事におけるアメリカ地上軍の最初の展開であった。

駆逐艦【カニングム】艦長室

集まった指揮官たちにレントン艦長は早速任務を説明した。

「つまり、対馬海峡の偵察任務を行なえ、ということですか？」

副長のウェブスター少佐が艦長の説明を端的にまとめた。

「そうなります」

艦長はウェブスターの言葉を肯定すると、集まった指揮官たちはそれぞれに思考を巡らせ、任務の達成が可能か考えた。

「レモラ大尉。対馬海峡における高麗軍の状況で分かっていることは？」

副長は艦付の情報将校に尋ねた。

「情報はあまり多くありません。ただ艦隊は分散して、上陸部隊を輸送する艦艇の護衛を行なっているようです。我々が最も警戒すべきは高麗空軍のE-737早期警戒機で、一定の水上搜索能力を持つと考えられます。ただ、なんにしる高麗海軍が我々を攻撃しようとはあまり思わないでしょうね」

「それはなぜだ？」

【カニングム】のステルスシステムに全責任を持つストレイヤー大尉がいささか毒のある口調で尋ねた。彼とレモラは犬猿の仲であるとして有名であった。

「高麗軍は【カニングム】のレーダーエコーやスクリューキャビテーションに関する十分なデータを持っていません。我が艦を確実に識別することが不可能なのですよ」

「だからと言って攻撃をしないと限らないぞ！」

それを聞いてレモラは嘲笑しながら言葉を返した。

「対馬海峡は中立船舶で溢れているのですよ。そんなところで識別不明の艦船を攻撃するなんてマネできますか？」

「そこまで！」

いい加減にケンカになりそうなところを艦長が止めた。

「レモラ大尉の意見は十分な説得力がありますが、しかし、戦場なのは間違いありません。ストレイヤー大尉の懸念するような事態も当然、想定して行動しなくてはなりません。他に意見のあるものは？」

誰も居なかった。

「よろしい。【カニングム】出撃！」

「アイアイ、サー」

三・ステルス艦カニングラム出撃！（後書き）

というわけで某海戦モノ小説をパクってみました。まあ単艦で高麗海軍とやりあうようなマネはさせませんがね（笑）てゆーか、題名に反して中身の3分の2はカニングラムとは関係ないんですが。

しかし現実のズムウォルト級は2隻だけで建造中止とか言われていますが、どうなるのでしょうか？これに限らずF-35とP-8は順調にデスマーチ中だし、LCSは文字通り炎上してるし、F-22は生産中止だし、次期偵察ヘリはコマンチはさすがにしようがないにしても、代替の廉価版まで中止しちゃったし、20年後のアメリカ軍は大丈夫なんだろうかと思う今日この頃であります。

余談ながら、仮にズムウォルト級の調達が続けられたとしてもカニングラムとは命名されないでしょうね。名前の由来はベトナム戦争におけるアメリカ海軍のエース、ランディ・“ドゥーク”・カニングラム少将（退役時）なのですが、彼は退役に議員にまでなったのですが、横領で捕まって2009年現在でも収監中の筈ですから。

四・動き出す大國

モスクワ標準時6月25日午前8時 クレムリン

東京が午後1時を過ぎ、アメリカ海軍が行動を開始した頃、モスクワは朝を迎えていた。

ロシア対外情報庁SVRに所属するドミトリー・ウスチノフは上官に呼び出されてクレムリンの一室を訪問していた。そこには1人の人物が待っていて、ドミトリーはその正体を知って驚いた。

「同志ウラジーミル。驚かさないで下さいよ」

ドミトリーは相手をソ連時代の呼び方で呼んだ。

「同志ドミトリー。君が私の大統領再任になんの祝いの言葉も遣さないからだよ」

大統領は普段、マスコミには絶対に見せない笑顔で応じた。

「二回目ですからね。同じ事を繰り返すのは芸がないと思ひまして」

ドミトリーは弁明した。目の前の男は、一度大統領の座を譲り渡した後、その相手の任期が終わると再び立候補して大統領の地位に返り咲いたのである。

「お孫さんも柔術を始めたそうだな。上達しているのかね？」

「はい。大統領閣下が製作なされたDVDをしょっちゅう見えていますよ」

2人は声を出して笑った。それからすぐに2人とも真剣な顔にな

った。

「それでご用件は？大統領閣下」

「日本と高麗の戦争についてだ。背後に居る中国についてもな」

そう言ってウラジーミルはドミトリーを来客用ソファに座るように促した。

「結論を言いますと、中国と高麗は協定を結んでいることは明らかです。中国は台湾で騒動を起こす事でアメリカを釘付けにして高麗の日本に対する攻撃を支援するとともに、戦後に高麗が国際復帰する際の後ろ盾となる。そういうものです」

「それで中国は対価として何を得る」

「各種情報を総合して検討しますと、おそらく次のようなものになるでしょう。まず高麗が戦争によって得る利権の一部。そして朝鮮半島北部の水源の一部」

「やはり水か」

大統領が唸った。実のところ、中国にとって最も重要でかつ貴重な資源が水なのだ。莫大な人口を抱える中国にとって水はなにをするにも大量に必要な資源である。しかし20世紀末から21世紀初頭にかけての急激な経済成長の反動として水質汚染が中国各地に広がり、水源は枯渇していった。今、中国周辺において中国の莫大な人口を支えられる水源は非常に限られている。

「中国はその全てを確保するつもりです。ですから、まず高麗の戦争を支援することで、内戦を戦うための軍資金を確保しつつ水源も確保。そして戦力を整えて内戦を制圧。チベット周辺の水源の確保」

中国が国土の分裂を極端に怖れるのは“領土を失うことに対する

恐怖”とか“中華の栄光を傷つける”とかそういう理由だけでなく、極めて実際的な理由を含んでいる。つまりチベット周辺には水源が存在するのだ。それ故に中国はチベットの分離独立、さらにはそれに繋がりがねない中国の分裂という事態を絶対に許そうとはしないのである。

「そして内戦を終えれば狙うのは…」

ドミトリーの推測が得られる結論は実に明確であった。朝鮮、チベットに並ぶ、いやそれ以上に巨大な水源がもう1つ存在するのだ。そしてそれはロシア領内にある。

「バイカル湖か」

大統領の答えにドミトリーは頷いて無言で肯定を示した。

バイカル湖。それはシベリアに存在する巨大な淡水湖である。面積でこそ世界で7番目であるが、水深は1637mと世界で最も深い湖で、ここに世界の淡水の20%が集中すると言われている。おまけに湖底には次世代のエネルギー資源と言われるメタンハイドレートまで存在している。ロシアの未来には絶対に必要な湖なのである。

「我らが母国ロジューナを救う方法は何かな？同志ドミトリー」

「奴らを徹底的に邪魔してやりましょう。とことん弱らせて立ち上がれないようにするのです」

ドミトリーはそう断言し、そして遠慮がちに一言付け加えた。

「でも、そうすると多くの中国人が悲惨なことになりますね」

「君は私がそれを気にすると思っていたのかね？」

「全然思いません」

東部標準時 6月25日午前8時 ホワイトハウス

モスクワから8時間遅れてワシントンDCも朝を迎えていた。

初の黒人大統領に続き女性大統領となった第45代合衆国大統領は夫を仕事に送り出して 大統領の夫をなんと呼ぶべきかは今でも議論がなされている から、自らのその日の職務を開始した。最初の仕事は日例報告を聞くことである。大統領執務室には報告者である 國務長官、国防長官、国家情報長官、大統領首席補佐官、国家安全保障担当特別補佐官が集まっていた。代表して首席補佐官が口を切った。

「マダム・プレジデント」

すると大統領は補佐官を指差した。

「ビリー。サラと呼んでは言っただでしょ？」

「失礼。サラ、それでは本日の報告を始めます」

最初の話題はやはり日本の北九州有事についてであった。

「日本は今、午後の9時です。今のところ昨日の夜から大きな変化はありません」

国防長官が報告した。

「おそらく作戦を終えて、日本側の反応を待っている状況なのでし
よう」

それに国家安全保障担当特別補佐官が一言付け足した。

「それに今日はユギオですし」

「ユギオ？」

大統領が聞き返した。

「韓国語で6月25日を意味します。転じて朝鮮戦争を示します。ですから、彼らにとって特別な日です。それ故に攻撃を控えているのかも」

大統領はその答えにあまり興味を示さなかった。

「そう。で、日本の方はどういう状況なの？」

それには国務長官が答えた。

「特に変化がありません。衆議院の方では自衛隊出動の是非を巡って論争が続いていますが膠着状態です。まったく自分の国が攻められている時になにをやっているのだから」

国務長官は同盟国に対する侮蔑を隠さなかったし、それを注意する者も1人もいなかった。

「OK。で、我々はどのようなオプションが採れるの？」

「日本が動かない状況では軍事オプションは難しいですね」

国務長官は首を横に振りながら言った。

こんな会話は続いている中、シークレットサービスの警護官が大

統領に駆け寄ってきて耳元で何かを囁いた。

「ハリーが？」

大統領は商務長官の名前を口走った。

「通して」

すぐに執務室に商務長官が入ってきた。

「おはよう諸君。で、君たちはアメリカ国民をあの手長者の日本のために死地に送り込む話をしているのかな」

突然の訪問に驚く大統領以下の面々を前に商務長官がにやけ顔で叫んだ。おまけに目は充血していて酒の匂いもした。とても正常な状態には見えなかった。

「同盟国を救援する話よ。それで？ 商務長官から報告があるとは聞いていないけど。とりあえず酔いを覚ましてきなさい」

「報告では無い。アメリカ合衆国国民として意見を表明しに来た」

商務長官は息を吸い込んで腹に力をこめた。

「いいか！ 奴らはアメリカの市場を食い物にして、アメリカ人労働者の犠牲の上に立って儲けているんだ」

それは一方的で偏見に満ちた意見であつたかもしれないが、多くのアメリカ人が共有する日本に対する憤りであつた。

「しかも連中はそうやって世界第二位の経済大国に成り上がったと

いうのに、それを維持する努力まで我々にさせようとしやがる。自分たちで使う石油の輸送ルートを守ることさえ惜しみ、インド洋に補給艦1隻浮かべることまで渋るんだ」

國務長官は商務長官の言葉に無言で頷いた。彼は政府入りする前は大学で外交を研究していたのだが、その時に彼の同輩が駐日大使を務めていた。そして彼がインド洋上における補給活動を巡って日本から受けた屈辱を忘れてはいなかったのだ。

時の駐日大使はインド洋への自衛隊派遣に反対する野党党首である小宮次郎に給油の重要性を示して継続に賛成するように説得するため二者会談を要請した。小宮はそれに民主党本部で報道関係者に公開して行なう事で応じた。かくして民主党本部を訪問した小宮への対応は信じがたいものであった。彼は説得をへらへら顔で一蹴し、大使をマスコミの前で晒し者にしてみせたのである。対テロリズムという全世界共通の課題に対していかに取り組むかという重要な問題も小宮にとっては自分の権威を示すための道具にすぎなかったのだ。アメリカ國務省はその恥辱を決して忘れてはいない。

「おまけに我々は奴らのために軍隊をわざわざ派遣して日本に駐屯させているつてのに、その費用を払うことを嫌がって、安保条約が片務的で不平等だと言うのさ。自分達は俺達のために血を流すつもりなんて無いくせにだぜ。それで自分たちは努力をしないことを平和憲法がどうだとか言っつて自画自賛するんだ」

商務長官は溜めていた物を吐き出しきったようで、そこで一息ついた。次にしゃべりはじめた時には随分トーンダウンしていた。

「サラ。あんたはそんな奴らのために今度は合衆国国民に“血を流せ!”と言うのかい?なあ。いつからアメリカは日本の犬に成り下がっちゃまったんだ?」

この闖入者にオーバルオフィスは静寂に包まれた。閣僚達は黙り込んで沈黙してしまっている。見かねた大統領が一息ついてから切り出した。

「ハリー。日本は重要な同盟国よ。見捨てるわけにはいかないわ」

商務長官はそれを聞くと首を横に振った。

「OK、OK。マダム・プレジデント。素晴らしい話だね。連中が金を払って俺達が血を流すという素晴らしい条約を履行するためにアメリカの若者たちに死んで来いと命じるわけだね。最高にヒューマニズムに満ちた話じゃないか！なあ！日本の犬どもめ！」

それだけ言うと商務長官はオーバルオフィスを出て行った。大統領と閣僚達はその背中を黙って見送るしかなかった。

商務長官が出て行くと、会議が再開された。

「それで我々が用いることができる資源は？」

大統領の問いに国防長官が答える。

「近傍にいる第7艦隊の空母<ワシントン>だが、台湾の問題もあり動かすには慎重な判断が必要だ。もちろん、これは海軍に限る問題ではないが」

それがアメリカ海軍の直面している現実であった。中国が軍部隊を台湾の対岸に動かし、今にも台湾に侵攻しそうな状況である。そのため周辺の米軍部隊を日本に集中させることができないのである。

「ともかく可能な範囲で動いているよ」

国防長官は海兵遠征隊の一部を佐世保に派遣したことを説明した。

「他に投入可能な空母はないの？」

「太平洋艦隊には5隻の空母があるが、＜ワシントン＞以外には＜ニミッツ＞と＜ジョージ・ブッシュ＞はインド洋で作戦中だし、＜ロナルド・レーガン＞は定期メンテナンスのためにサンディエゴでドック入りしている。そして＜エンタープライズ＞は新鋭の＜ジェネラル・R・フォード＞と交代するためにサンディエゴに向けて最後の航海の最中だ。とても戦闘に投入できる状態じゃない。台湾の問題に対処するために大西洋艦隊から＜ジョン・C・ステニス＞を太平洋に向けて出撃させたが、まだブラジル沖だ」

「インド洋から1隻を出せないの？」

「無理だ。今、中東は危険な状態だ。イランがいつイラクに侵攻するとも限らない。地中海に1隻、インド洋に2隻。この編成は変えられないね。だが今、空母を1隻新たに地中海に送り込むところだ。これが到着したら1隻を極東に向けられるが。どちらにしる到着までには2週間はかかる」

「そこまで言われては大統領も空母の迅速な増強を諦めざるをえなかった。」

「ほかに何を投入できるの？敵はもう日本に上陸した以上、空母だけというわけにはいかないでしょう？」

「ハワイの第25師団を投入しようと思う。軽歩兵旅団とストライカー旅団を1個ずつ。これが先遣部隊だ。物資は日本にあるから、将兵だけを送ればいい。命令があり次第、出撃できる。それを援護する空軍部隊もある。緊急展開部隊だ」

国防長官は空母の時とは違って自身に溢れていた。

「顔色が良くなっているわよ？どの部隊？」

「当たり前だ。私が前にいた部隊だかね。第366航空団、ガンフ
アイターズ！」

四・動き出す大国（後書き）

＜大統領閣下が製作なされたDVD

「ウラジミール・プーチンと柔道を学ぼう」で検索すると詳細が分かりますよ（笑）やっぱり好きだな、プーチン皇帝は（激笑）

それでこの話を書いていて気づいたのですが、私はプーチン大統領の名前は「ウラジミール」だと思っていたのですが、「ウラジミール」だったんですね（笑）

五・出撃！ガンファイターズ

アイダホ州 マウンテンホーム 峠の我が家空軍基地

アメリカ空軍には第366戦闘航空団なる部隊が存在する。その歴史は第二次世界大戦時まで遡れるが、冷戦末期にはEF-111レイヴン電子戦機を装備する電子戦部隊であつてパナマ侵攻や湾岸戦争にも部隊を派遣した。その後、冷戦の終結にともない部隊の解散が計画されたが、湾岸戦争の教訓から誕生した新たな部隊である混成航空団へと改変されることになった。

通常の航空団は戦闘機ないし爆撃機、輸送機など単一の種類の航空機で編成されるものであるが混成航空団は独自に戦闘機や爆撃機、空中給油機まで保有する小さな空軍で、紛争が発生した地域に素早く展開できる利点がある。陸軍の第18空挺軍団や海兵隊の海兵遠征隊のような緊急展開部隊の空軍版なのである。

その後、情勢や戦略の変化により、編成が変更されて366航空団は戦闘航空団に改変されたが、今でも紛争地域に一番乗りする遠征部隊という性格は変わっていない。確かに爆撃機や空中給油機が編制から外されてしまったが、それは泥沼に陥りつつあつた対テロ戦争に少しでも多くの戦力を提供するためであり、必要に応じて何時でも戻すことができるし、第366航空団に残つた者たちもその準備と訓練を怠つてはいない。

装備している機種は次の2機種である。

まずはF-15Cイーグルである。F-15はベトナム戦争においてミサイル戦に特化した当時の戦闘機が旧式ながら軽快なベトナム空軍のソ連製ミグ戦闘機に空中戦で苦戦した経験から、ミサイル戦においても格闘戦においても敵戦闘機を圧倒できる戦闘機として開発されたものである。実際、F-15は空中戦で百機を超える敵

機撃墜を成し遂げつつ、この日韓戦争まで敵戦闘機に一度も撃墜されることはなかったという史上空前の大戦果を収めたのである。

第366航空団の装備しているF-15Cは近代化改修が施されていて、最新のアクティブ・フェイズド・アレイレーダーであるAN/APG-63(V)4を装備している。

APAR、つまりアクティブ・フェイズド・アレイレーダー。もしくはAESA、つまりアクティブ・エレクトリック・スキャンド・アレイレーダーとも呼ばれる新型レーダーは21世紀中頃の対空レーダーの主流になると見られている、正に次世代の航空機搭載レーダーである。イージス艦に搭載されるレーダーとして名を馳せたフェイズド・アレイレーダーであるが、その能力はどのようなものなのであるのか？

フェイズド・アレイレーダーはそのアンテナが素子と呼ばれる小さなアンテナの集合体であるという特徴を持っている。アレイアンテナと呼ばれるこの種のアンテナは、第二次大戦中に使用された八木アンテナ、大戦後に出現したパラボラアンテナに次ぐ第三世代のレーダーアンテナであり、それまでのレーダーに比べると電波の指向性が高く精度が向上している。1960年代に登場したこのアレイレーダーは70年代には戦闘機搭載レーダーの主力となった。しかし、これが21世紀の主力となる最新鋭レーダーとなるには更なる技術革新を必要とした。

それがアレイレーダーにレーダー波の位相を変換する装置を組み込んだフェイズド・アレイレーダーの出現である。レーダー波の周波を変換することで、アンテナを動かすことなくレーダー波を直接捻じ曲げ、広範囲を瞬時に搜索することが可能であるし、複数の目標を同時に追跡・攻撃することも可能になる。また空中にある目標と地上目標を同時に捕捉するということも可能なのである。

最新鋭のAPARであるAN/APG-63(V)4はそうした能力に加え、そのアンテナの素子の一部を味方との情報交信に利用したり、敵のレーダーやアンテナに向けて偽の情報を流して妨害し

たりすることもできる。まさに万能のレーダーなのだ。

F-15は今となっては古典的な戦闘機となってしまったが、このような新技術を駆使したアヴィオニクスのために現在でも第一線の戦闘機として他の多くの戦闘機を圧倒するだけの性能を維持しているのである。そして第366航空団が自由に活動できるように制空権を確保するという重要な役割が与えられている。

そして主力として366航空団の打撃力となるのがF-15Eストライクイーグル戦闘爆撃機だ。これは名前からも分かるとおりF-15イーグル戦闘機の派生型の1つであるが、制空戦闘機である原型に対して戦闘爆撃機であるストライクイーグルはまったく別の航空機と言ってもよく、制空型のイーグルと同じものであると考えるのは明らかに間違っている。

機体構造からして全体の60%が再設計され、過酷な爆撃任務に耐えられるように各部分が強化されていし、さらにアヴィオニクスも一新され、レーダーには地上の地形の詳細を正確に捉えることが可能な合成開口レーダーであるAN/APG-70や赤外線センサーランタールにより夜間でも鮮明な画像を得る事ができるLANTIRNシステムを装備し、昼夜天候を問わない超低空侵入飛行や精密爆撃能力を可能にしている。これらの改造により重量が増したため、エンジンもイーグルに比べてより強力なものに換装されている。

しかし実際に動かすパイロットにとって制空型イーグルとの違いを一番感じる事ができるのはコクピットであろう。まず複座型で、2人の搭乗員によって動かされる点が通常1人乗りのイーグルとは異なる。ストライクイーグルの様々な機能を持つ各種センサーはパイロットが1人ではとても対応し切れないのである。また朝鮮戦争で戦ったF-86の頃と何も変わらないアナログ計器ばかりのイーグルとは異なり、ストライクイーグルは前述のセンサー類を使いこなせるようにグラスコクピット化されている。つまりアナログ計器

に代わってボタン1つで様々な情報を映したり切り替えたりすることが出来る液晶モニターが載せられたのである。これにより操作効率が大きく向上したのは言うまでも無い。

かくしてF-15Eストライクイーグルは純粋な制空戦闘機であったF-15イーグルとはまったく別の機体に生まれ変わったのである。もしこの事実をまだ信じられないという人が居るのなら、手近な書店で軍事系書籍を漁るなり、インターネットの検索サービスなりで調べればよい。大抵の場合、F-15Eストライクイーグルは制空型のF-15とは独立した項目が用意されて、別の航空機として紹介されている筈である。F-15イーグルという優れた制空戦闘機は優秀なメカニックマンたちによって新たな機体に生まれ変わったのである。史上最強の戦闘爆撃機F-15Eストライクイーグルとして。

このような強力な装備を持つ366航空団が増援部隊第一陣となるのは至極当然の事である。

マウンテンホーム空軍基地 ガンファイターズ通り366番地 航空団本部

航空団司令ジョニー・マクラウド准将 航空団司令は大佐が務めるのが通例であるが重要度の高い部隊は准将が指揮官となる は隼下の飛行隊の指揮官達を本部に呼び出していた。既に台湾有事を想定して極東展開の準備をしていたので、いつでも行動できる態勢であった。

「我々は嘉手納に移動する。名目は基地の防空能力の強化だ」

マクラウドが計画を説明した。それはほとんど台湾有事に備えて事前に説明されたものと同じであった。

「それで司令。我々はどう介入するのですか？」

F-15Eを装備する第391戦闘飛行隊ボウルド・タイガースの指揮官、フランク・ヘツァー中佐が尋ねた。

「問題は日本自身が侵略者にどう立ち向かうべきかを決めていないということだ。向こうの方針が決まるまでは、米軍の基地・施設を狙う敵に対する自衛行動のみ許される」

マクラウドの説明にヘツァーは面食らった。

「なんてこった。自分の国が攻め込まれているのになにを考えているんだ！」

「それで、本格介入が決まった場合は？」

隣に立つF-15E装備の第389戦闘飛行隊のシンシア・スペンシア中佐が言った。第366航空団で唯一の女性飛行隊長である。

「我々が攻めを、嘉手納の第18航空団が守りを担当することになっている」

マクラウドの説明にF-15C装備の第390戦闘飛行隊ワイルドボアーズの指揮官ダニエル・リーランド中佐が疑問を覚えた。

「三沢やアラスカの連中は？」

「ロシアの動きが騒がしくなってるな。それに備えるために待機だとなさ。必要なら増援部隊を送り込んでくるらしいが。ただし三沢から

F-16が1個飛行隊配属されてSEAD（敵防空網制圧）能力を提供してくれる」

それに指揮官たちは安堵した。敵の対空ミサイルやレーダー網を破壊するSEAD任務は空軍が行なうあらゆる任務の中で最も危険であるとされ、その実施には専門の器材を持ち訓練を受けた特定の部隊が受け持つことになっている。かつて366航空団ではシンシアの第389飛行隊が専用の装備を搭載したF-16を使って行なっていたが、F-15Eへの機種改変によってSEAD能力が失われてしまったのだ。

「さらに別の部隊が配属されることになっている。第34爆撃飛行隊と、1個空中給油飛行隊が配属される予定だ。これらの部隊は介入が決まるまでグアムで待機する予定だ」

その言葉を聞いてヘツツァーが顔を緩めた。

「すげえや！混成航空団の復活だ！」

「よし。他に質問がないなら出撃だ」

一時間後

マクラウドと彼の幕僚達は基地の駐機場に待機するKC-10エクステンダー空中給油輸送機に乗り込んだ。大抵の空中給油機と同様にKC-10も機体の貨物スペースを全て燃料タンクにすると重すぎて離陸できなくなってしまうので、燃料タンクは機体の一部に止めて、残りの部分を通常の貨物を搭載するスペースとしている。それゆえに空中給油“輸送”機なのであるが、今日はその貨物スペースには物資の代わりに座席が並べられていた。この日のKC-1

0は第366航空団を日本に送り届けるための空中ガソリンスタンドであるとともに366航空団の空中司令部も兼ねているのだ。この機体の中で司令と幕僚達が作戦計画を練るのである。

というわけで第366航空団の出撃が始まった。無論、いきなり航空団の飛行機全てを派遣することはできないので、その一部である30機ほどが先遣部隊として嘉手納に送り込まれるのである。そして、その先頭に行くのはマクラウドの乗るKC-10であった。

バージニア州ラングレー空軍基地

マウンテンホームから第366航空団が出撃しようとしている頃、ラングレーでも別の部隊が出撃しようとしていた。

攻めの部隊である第366航空団に様々な部隊が配属されるのと同様に、守りを担当することになった嘉手納の第18航空団にも別の部隊がアメリカ本土から増援として配属されることになったのである。その部隊は第27戦闘飛行隊ファイティング・イーグルスである。

駐機場では第一陣となる2機の戦闘機が控えていて、出撃の準備をしている。パイロットは27飛行隊最高のエースとされる2人である。2人は整備員とともに愛機の最終チェックを終えるとコクピットに乗り込んだ。

コクピットはストライクイーグルと同様にグラス化されていて、この機体の前任者であるF-15Cとは雲泥の差がある。パイロットが席に座るとキャノピーが閉じられる。ステルス性向上のために金でコーティングされた特殊キャノピーの中から見る景色は、それ

までの戦闘機とも違って見えた。

搭載されている2基のF119ターボファンエンジンが始動した。1基あたりの推力が最大16t程度にまでなるこのエンジンは、間違いなく世界最高クラスの戦闘機用エンジンである。この戦闘機は一般的にはステルス能力を生かして暗殺者であると思われるが、あるが、この強力なエンジンとそのジェット排気の変化させることができる推力偏向ノズルにより格闘戦においても無類の強さを発揮することができるのだ。

滑走路までタキシングして、いよいよ離陸の準備が整った。パイロットは管制塔のゴーサインとともにエンジン出力を最大まで高め、一気に離陸した。同盟国を助け、アメリカ空軍の能力の高さを世界に見せつけるために。

発進した2機の戦闘機、名をF-22Aラプターと言う。

五・出撃！ガンファイターズ（後書き）

というわけで、三回連続してアメリカ（+ロシア）話です。しかも戦闘なし（苦笑）次回からは舞台を日本に移して、戦闘もいくらか書きたいように思います。まあメインは烏丸総理・自由民権党と民生党の対決なのですが…

今回の話を書いた理由はいろいろとあります。1つはトム・クランシーの戦闘航空団解剖を呼んで366航空団に一目惚れしてしまったため（笑）、もう1つはある人への当てつけ（爆笑）です。見てるかあ、ある人。

さて感想欄で話題になりましたケネディジープの扱いですが、決定しました。設定上は配備が続いておりますが、劇中には登場しません。代わりに、その後継として出したい車輛がありますので。

さて、今日は8月15日…日付が変わっちゃいましたが、ともかく終戦記念日です。しかし私は今日を終戦記念日と呼ぶことに疑問があるのです。敗戦したのに記念も糞もあるかとかそういうことじゃなくて日にちについて。

実のところ、8月15日は昭和天皇がポツダム宣言受託を国民に宣言した日に過ぎません。確かに象徴的な日ではありますが、日本が降伏したのは正式には9月2日です。玉音放送の後もソ連との戦闘は続きましたし、坂井三郎氏が第二次大戦最後の空中戦に出撃したのは8月17日です。本当に終戦は8月15日で良いのでしょうか？

六・巡航ミサイルの脅威

高麗連邦共和国 青瓦台

日本が自衛隊出動を巡って悶着している頃、高麗側は見当外れの状況に悩んでいた。彼らの最初の計画では、既に日本は高麗に屈している筈であったのだ。しかし日本では今、自衛隊を出動させるべきか論争が繰り広げられている。

「長期戦になるのは拙いです。我が国の経済が持ちません」

ソン・ペクイル外交通商部長が指摘した。経済は危険な状況にあるとは言え、外国との交易が完全に途絶えたわけではないし、資源も輸入しなくてはならない。しかし高麗が交易に利用すべき海域は戦場になっている。対日侵攻作戦は日本を追い詰めるとともに自らも危険にする諸刃の刃なのだ。

「我々は負けたのかもしれないな」

キム・ユリヨン情報院長が指摘した。

「日本が我々の要求を受け入れないと言うのなら、失敗ですよ。負け方を考えた方がいいかもしれないよ？」

「そんなわけがあるか！」

イ・セチャン国防部長が怒鳴った。

「我々は日本軍に大きな損害を与えたのだ。負けてなどいない」

「ナチスドイツは自軍が受けたより多くの損害をソ連に与えましたが、勝ちましたか？」

キム・ユリヨンは嘲笑が混じった声で反論した。

「もしくはノモンハンの日本軍は？ どんだけ相手に損害を与えても作戦目標を達成できなければ敗北ですよ」

「いや、さらに圧力をかければ日本は屈服する筈だ」

国防部長は情報院長の意見を退けた。

「何とか日本に圧力をかける手段はないのかな？」

大統領が国防部長に尋ねた。

「巡航ミサイルです。陸軍は射程1500kmの【玄武】ミサイルがあります。海軍には李舜臣級と世宗大王級に搭載可能な射程500kmの【天竜】ミサイルがあります。空軍には射程1500kmの【若鷹】ミサイルがあります。これらのミサイルを日本の軍事施設に発射して圧力をかけるのです」

「よし。その作戦を了承しよう」

翌日 6月26日未明

対馬海峡 高麗海軍駆逐艦【王建】ワン・ゴン

かつての高麗国の始祖にあやかって【王建】と命名された駆逐艦は、【忠武公李舜臣】チュンムゴン・イスンシンの第4番艦で、6隻建造された同艦型では後期型に分類される。前期型の区別される点はVLSの増設である。前期型がアメリカ製のスタンダードSM2対空ミサイルを装填するMK41VLSを32セルのみ搭載しているのに対し、後期型には国産の新型VLSがMK41とは別に32セル搭載されている。

この国産VLSは旧韓国軍が開発した韓国型アスロック【赤鯨】が巡航ミサイル【天竜】を装備している。このときは、それぞれ16発ずつを搭載していた。

護衛していた船団から離れると【王建】は攻撃態勢に入った。VLSのカバーが開き4発のミサイルが解き放たれた。【天竜】は慣性誘導とGPSに従って南を目指した。

日本側でそれを最初に探知したのは日本海上空で哨戒中のE-2Cホークアイ早期警戒機であった。導入から30年近く経つホークアイであるが、ホークアイ2000と呼ばれる仕様に近代化改修が行なわれていて現在でも現役で通用する警戒機となっている。

「海上を飛行する小型物体を確認。巡航ミサイルと思われる」

それを発見したオペレーターは然るべき部署へ報告を行なったが、この時の自衛隊に対処できる者はいなかった。対馬海峡上空の制空権はいまだに高麗のものであるし、陸の高射部隊も防衛線の撤退にあわせて南下している。

やがて4発の巡航ミサイルは陸地の上空に入り、クラッターの中に消えてE-2Cの追跡から逃れた。

次に捉えたのは新田原上空で警戒中のE-767AWACSであった。地面のクラッターに隠れた巡航ミサイルを見つけ出すのは困難な仕事であるが、配備から絶え間ない改良が続けられているE-767のリーダーはなんとか捉えることができた。

E-767からの一報を受けたのは陸上自衛隊の第2高射特科団

に属する03式中距離地对空誘導弾であった。航空自衛隊の保有するパトリオットに比べれば射程こそ短い、日本の最新鋭テクノロジーによって高い電子戦能力が与えられた03式は低空で飛んでリーダーの追撃を逃れようとする巡航ミサイル迎撃にはむしろ最適であると言える。空自高射隊が対弾道ミサイル防衛部隊としての特化してゆく中、既存の航空機や巡航ミサイル対処は陸自高射特科の領分であるという新たな線引きまで事実上成立している。

巡航ミサイルの目標は新田原の空自基地であった。九州における空自の拠点となっている新田原が狙われるのは当然であるし、自衛隊側もそれを予測して基地周辺に重点的に各種防空兵器を配置していたのである。

各巡航ミサイルに2発ずつ、計8発の03式中SAMが空中に放たれた。

中央指揮所

太陽が東から姿を現した頃、中央指揮所には高麗軍の新たな行動に関する情報が次々と入ってきていた。指揮所後方の会議室には幕僚長たちと主要なスタッフたちが集まっている。

「これが確定情報です。高麗軍は海上の艦艇から巡航ミサイル8発を発射し、それを洋上哨戒中のE-2Cが探知、しかし陸地のクラッターに紛れたためロスト。各地の陸自及び空自の移動式レーダーに断続的に捉われつつ、10分後にE-767AWACSに探知されました。そしてAWACSの誘導により陸自の高射特科が03式中距離対空誘導弾8発を発射し、巡航ミサイル3発の撃墜に成功したが1発をロスト。その後、新田原基地防空隊の81式短距離対空誘導弾のリーダーが目標を探知、81式で迎撃に成功しました」

情報担当1佐がプロらしく冷静に淡々と事実を報告した。

「巡航ミサイル攻撃か。怖れていたことが1つ現実になったな」

剣持が指摘した。

「おそらく日本に圧力をかけるための攻撃でしょう。それで日本の出方を探るための予備的攻撃が今朝の攻撃であると思われます」

真田情報本部長が付け加えた。つまるところ今朝の攻撃はまったく本気では無かったのだ。もし本気であったなら、陸海空のあらゆるプラットフォームを利用し、日本の防空網を飽和させようとした筈である。今朝の攻撃は一種の様子見のようなものなのだ

「本格的な攻撃を開始されたら現在の防空態勢ではどこまで耐えられるか」

斎藤航空幕僚長が率直な気持ちを述べた。

「陸海空自衛隊の総力をもって巡航ミサイル対処に臨まなければ。笹山さん。X E P - 1 C。信頼性に難ありと言いますが、やはり使えるものは使いたい」

「分かりました。X E P - 1 Cを提供しましょう」

笹山海幕長が約束した。

「今回の事態では海上自衛隊は盾としてあまり役に立てませんでしたからね。やれることはやらねば」

そこへ別の佐官がやってきた。

「至急、テレビをご覧ください」

会議室備え付けのテレビの電源を入れると小宮次郎の姿が映っている。

「このような事態を招いた責任は全て烏丸政権が背負うべきである。にも関わらず自衛隊を出動させ自衛官に流血を強いる一方で、高麗の要求を受け入れる動きを見せている。このようなブレた態度を許せるであろうか？今、この瞬間にもまた1人の日本人が血を流し、死んでいるかもしれないというのに。我々、民生党は烏丸政権が自らの責任を明確にし、清算することを求めて一切の審議を拒否する！>

名古屋市内のアパート

深海兄弟も同じテレビを見ていた。

「兄貴。こいつは何を言っているんだい？」

「俺にも理解できん」

2人はしばらくテレビの前で沈黙していた。

「つまり民生党は審議拒否する。意味ある内容はこれだけだな」

真はようやく口を開いた。

「民生党抜きで審議ってわけにはいかないの？」

「社会民主党は民生党に追従するとして、労働党が出席しても委員

会の定数半分に達しないから審議は無理だな」

委員会は定員の過半数の議員が出席しなければ開けない。つまり今日から安全保障委員会を開けず、自衛隊出動に関する審議が行ないことになる。

「なあ兄貴、あいつつて前に“十分に審議しなくてはならない”って言ってなかったか？」

「お前は民生党の言う事を信じるのか？」

真は弟の疑問に鼻で笑って返した。

衆議院第一議員会館

議員会館内の食堂で菅井官房長官と中山防衛大臣は昼食のカレーライスを食べていた。

「民生党はなにを考えているんでしょうね？」

「決まっているだろ？ 政権交代だけだ。“国民生活を人質”にしてな」

菅井は民生党のスローガンをもじって揶揄した。

「でも今、審議をストップさせたら…」

「忘れるなよ。マスコミはいつも彼らの味方なんだ。きっと与党の国会対策の失敗だと報じるだろう…」

菅井は言葉が途中で止まってしまった。何か別のものに意識を集中しているようだ。中山が菅井の視線の先に目を凝らすと見知った

顔を見つけた。

「ちょっと話をしてくる」

菅井が立ち上がったのを中山が制した。

「しかし彼は……」

「安心しろ。彼らに関する格言を1つ教えてやる。“用法容量を守って、正しくお使いください”だ」

菅井はそのまま中山を振り切つて、カレーライスとともにその人物の隣に座つた。その人物とは日本で唯一共産主義を掲げる議会政党である日本労働党の書記長、片山満かたやま みつるであつた。

「片山さん。久方ぶり。そちらはトンカツ定食か」

「これは菅井さん。なにぶんカレーは昔から好きじゃなくてね。で何の御用で？」

労働党の新世代リーダーは冷ややかな目線を菅井に向けた。

「安保委員会のことだね。そちらは出席するつもりだったんでしょ？」

「勿論。我々は“確かな野党”ですからね」

「自衛隊出動そのものには賛成ですか反対ですか？」

「党内にはいろいろな意見があります」

片山は明確な回答は避けた。

「非武装路線の社会民主党と違って、確か労働党第22回大会では自衛隊の存在は一応容認。必要なら活用となっていた筈。今、活用

しないなら何時活用するんですかな？」

菅井はさらに問い詰めるが片山は黙り込んでしまった。

「今の護憲平和主義だつて結局はソ連が崩壊して共産主義じゃ支持が集まらないから、左派勢力に日和見した結果じゃないか。憶えてないとか反動の仕業だとかはもう言わせないぞ。9条下では自衛戦争も認めないと答弁する吉田首相に向かって“自衛戦争は正義の戦争”と言い切つたのはどこの党の議員だい？日本国憲法制定時にもつとも頑固に反対したのは？」

「それは天皇制があるからだ！」

菅井の追及に片山はようやく反論できる点を見つけた。

「自衛権の否定にも反対していた筈だ。冷戦中には自衛隊解体・日米安保廃棄を確かに謳っていたが、その後人民軍創設と日ソ安保締結って続いていた。韓国が竹島占領した時に武力奪還を主張していたのもあんたら労働党だよ。今さら自衛戦争反対なんて言わせはしないぞ。若造」

「取引するつもりはないぞ」

「裏取引なんてしないさ。ただ忠告しているだけだ。“確かな野党”を標榜するなら、その通り行動しろつてな」

それを聞いた片山は何度か頷いた。

「党内をまとめるのに5日は必要だ。どだい衆院の労働党らうどうの票をあわせても過半数には達しないぞ？」

「大丈夫だ。こっちにも考えはある。どうせそっちにも時間がかかる。5日くらいは待つさ」

それだけ言うと菅井はまたカレーを持ってもと居た席に戻った。

「なんとか光が見えてきたぞ。あとは民生党右派を取り込んでだ。名前は確か…前なんだっけな…」

そう得意げに語る菅井に中山は不満げであつた。

「なにを考えているんですか。相手は労働党ですよ。我々と彼らは決して相容れない」

「その通りだ。だが民生党と違って筋は通す。それで十分だ。確かに共産主義は麻薬みたいなもんだ。だが使い方さえ間違わなければ麻薬も医療に役立つ」

「労働党は劇薬だと？」

「その通りさ。言っただろ？ “労働党は用法容量を守って正しくお使ってください”さ」

菅井は残ったカレーを平らげた。

六・巡航ミサイルの脅威（後書き）

メッセージを通じて“五・出撃！ガンファイターズ”のフェイズド・アレイリーダーの説明に誤りがあるとの指摘を受けたので訂正しました。この場で指摘について感謝をしたいと思います

なお本編中の労働党（共産党）の自衛権に関する見解、主張は事実を基にしております。

七・巡航ミサイル迎撃作戦

岐阜基地

航空自衛隊岐阜基地は航空自衛隊に配備される様々な装備の開発・研究を進める航空開発実験集団の中で一番重要な航空機に関する研究を行なう飛行開発実験団が置かれているのが岐阜県各務ヶ原市にある航空自衛隊岐阜基地である。

この基地には航空自衛隊の保有するあらゆる航空機が配備され、各種実験施設が準備され、さらには川崎重工の工場に隣接しているという実験場に相応しい態勢が築かれている。

この基地の今の主役は4機のF-15であった。それもF-15Jではない新型機である。その機体は公式にはF-15FXと呼ばれ、非公式の愛称としてサイレントイーグルの名が与えられている。次世代F-Xとして自衛隊が導入を開始した最新のF-15である。基本的には戦闘爆撃機であるF-15Eストライクイーグルを制空戦闘機として最適化した機体である。レーダーにはアメリカの最新のF-15Cと同じようにAPG-63(V)4を装備し巡航ミサイル探知能力も高い。また尾翼はレーダー反射を抑えるために垂直尾翼が外側に傾けられ、また機体側面に取り付ける専用のウエポンベイ内蔵のコンフォーマルタンクに兵器を収めている。これにより正面限定ながらF-22などと同程度のステルス性を確保しているのだ。

今、航空自衛隊ではF-4EJ改の後継として導入を進める一方で、ここ岐阜基地でどのように運用すべきか試験と研究が続けられていたのだ。

「出撃ですか？」

集められた8人のパイロットの代表が実験団司令に向かって言っ

た。F-15FXは複座で、各機にパイロットと兵装士官が搭乗する。特に高い電子戦能力を武器にするF-15FXではリーダーなどの各種操作をする兵装士官は重要である。

「その通りだ。それも実戦のな」

8人のパイロットの顔が一気に引き締まった。実験部隊を高麗空軍との空中戦に使おうとは考えないだろうが、それでも戦場に派遣されるのは間違いないのだ。

海上自衛隊厚木航空基地

厚木基地には海上自衛隊の様々な部隊が配置されているが、その1つである第51航空隊は航空自衛隊の飛行開発実験団に相当する部隊で、新しい器材の実験・研究がその任務である。新型の国産哨戒機であるP-1の配備が開始され、第51航空隊ではその派生型の研究に力が注がれるようになった。その1つがXEP-1C空中複合センサー機である。

XEP-1Cは巡航ミサイルの頭文字であるCが後ろにつけられている点からも分かるように、巡航ミサイルを主要な目標にして弾道ミサイルやステルス機への探知能力をも併せ持つ空飛ぶ探知機なのだ。

機体の背部には目標の熱を感知する赤外線センサーを搭載し、下部にはアクティブフェイズドアレイレーダーが設置されている。この2つのセンサーを駆使して敵の巡航ミサイルを探知するのがXEP-1Cの任務なのだ。

「この機体は試験中なんですよ？実戦でどこまで通用するか」
機長が任務の説明をした飛行隊長に食って掛かっていた。

「そう言うな。実戦テストの機会なんて滅多にないんだぞ。特にこの日本では。それにだ、アメリカだって湾岸で試験中のジョイント・スターズを派遣して大きな戦果をあげたじゃないか」

ジョイント・スターズとはアメリカ空軍の保有するE-8対地監視機を示す。地上を移動する目標部隊を様々なセンサーで探知、追尾して友軍部隊に的確な指示を与えるための航空機で、対地版のAWACSであると言える。その性能は湾岸戦争時にイラク軍相手に発揮され、多国籍軍の勝利に大きく貢献した。当時は試作機であったが、優れた性能を示したE-8はすぐに正式採用されて量産が開始されたのである。

「それにだ。お前はこの機体の性能に自信が無いのか？」

「いえ。XEP-1Cは世界のどこでも通用する機体であると思っています」

「だったら飛んでくれ」

そこまで言われたら機長も引き下がらざるをえなかった。

首相官邸

その日の夕方、再びローゼンバーグ駐日大使が在日米軍司令官を伴って首相官邸を訪れた。

「結局、日本はどうするつもりなんですか？」

大使はなんの外交儀礼も挟まずに率直に聞いてきた。

「私は決断したのですが、なにぶん議会では少数派になってしまいました」

「そちらの事情はお察ししますが、貴国が動かない限りは我々も動きようがありません」

大使は疲れた表情の烏丸首相に向かって冷徹に宣告した。

「ただし現段階では軍の介入はできませんが、いくらかの支援は可能です。これはそのリストです」

大使は一枚の紙を渡した。そこには英語のリストが印刷されていた。そこには様々な物資弾薬の貸与が提案されていた。

「ありがとうございます」

その中には巡航ミサイル早期警戒システムという項目があった。

福岡 東平尾公園

福岡空港の東側にある丘陵地帯に総合運動公園がある。3万人を収容可能な陸上競技場をはじめ広大な敷地とさまざまな設備を有するこの公園が高麗軍千里馬遠征部隊の現地司令部に選ばれたのは当然の成り行きであった。

広い運動場の中には衛星通信装置などの各種通信装置が偽装されて配置され、林の中には半地下式の塹壕が掘られて司令部が設置されている。チェ・チョンヒ將軍とその参謀たちはそこに詰めて、本国の指示を待ちつつ作戦計画を練っていた。

「次の攻撃目標は飯塚とすべきです」

首席参謀であるイ・デヨン大佐が指摘した。

「自衛隊の主力を叩き、戦力を粉砕すべきなのではないか？」

チョンヒ將軍はあくまでも南下して大宰府防衛線を叩くことを主張した。

「しかし、福岡と北九州の連結を確固たるものにするのが最優先であると思います。それに弾薬の補給が十分とは言えません。事態が長引いた場合のことを考えますと、自衛隊の増援部隊との戦闘の可能性を考慮して、敵主力との交戦は控えた方がよろしいかと」

イ・デヨンは食い下がった。それに補給担当の参謀が続く。

「海軍力では日本側が優勢です。今でこそ物資を搭載した貨物船は自由に行動でき、補給活動を円滑にできますが、朝鮮海峡から中立船舶がいなくなれば日本の海上自衛隊はただちに阻止行動に出るでしょう。補給には限りがあると考えるべきです」

さらに作戦参謀が続いた。

「自衛隊の攻勢を考えますと、できる限りベストな状態を保つべきです。我々がなすべきことは飯塚を攻略して、確固たる防衛線を構

築することです。それは自衛隊を躊躇させることになるでしょう」
チエ・チヨンヒは決して有能ではなかったが、部下の言葉に耳に
傾ける程度には無能ではなかった。

「よろしい。本国に飯塚攻略の許可を求める」

鹿児島県 鹿屋航空基地

かつての特攻隊の発進基地として知られる鹿屋飛行場は、現代では海上自衛隊とアメリカ海兵隊の共用する航空基地となっている。

アメリカ軍の存在のためか高麗軍はこの基地への攻撃を控えていた。この基地の格納庫の住人は海上自衛隊第一航空群のP-3C対潜哨戒機や第72航空隊のUH-60J救難ヘリコプター。それにアメリカ海兵隊のKC-130J空中給油輸送機である。それに新顔が加わった。それが小松の第6航空団から派遣された8機のF-15J改であった。

1980年代から日本の防空の主力を担ってきたF-15J戦闘機であるが、21世紀に突入すると老朽化が目立つようになった。そして周辺国が空軍力の増強を進めるのに対応するために近代化改修が施されることになったのである。

第6航空団のF-15J改は改修一型と呼ばれるタイプのものでレーダーとコンピューターシステムが新型のものに換装され、さらに国産の空対空ミサイルであるAAM-4を搭載できるように改良されている。

AAM-4、正式には99式空対空誘導弾はAIM-7スパローの後継となるミサイルとして開発され、アムラームミサイルのように自らのレーダーで敵機を搜索して追尾、攻撃する能力があり、最後まで母機が敵機まで誘導する必要がない。撃ちっ放し型のミサイルなのだ。このミサイルの存在によって航空自衛隊はアムラームを

装備する高麗空軍と互角に戦えることができる。さらにスパローより小型化を進めたアマラムに対して、AAM-4は大きさをスパローそのままに射程をより伸ばし、攻撃能力と電子戦能力を高めることを目指した。それ故に巡航ミサイル迎撃任務に対してはアマラム以上に優れているとされる。

かくして航空自衛隊の増援部隊第一陣は巡航ミサイル迎撃任務に就くことになった。

同様の任務が与えられたのは彼らだけではない。那覇基地に退避している第6飛行隊にも巡航ミサイル迎撃任務が与えられた。彼らが装備するのは、本来は地上や水上の敵を攻撃して陸自部隊を支援する支援戦闘機のF-2であるが、しかし巡航ミサイル探知能力に優れるアクティブ・フェイズド・アレイレーダーを装備し、さらに第6飛行隊のF-2の一部はAAM-4を装備できるように改修されているので、この任務に最適と判断されたのである。

さて増援としてかけつけたF-15J改部隊が任務に備えて整備を行なっている頃、鹿屋飛行場の滑走路に数機のC-17が着陸した。彼らの任務は同盟国への支援として貸与される物資を運ぶ事である。そしてこれらのC-17に巡航ミサイル迎撃作戦の切り札が載せられているのだ。

かくして高麗の巡航ミサイルに立ち向かう体制は急速に整えられた。

東平尾公園

チエ・チヨンヒ將軍の司令部には隷下の部隊の指揮官たちが集め

られていた。半地下式の司令部の中には、九州北部の地図が張られたホワイトボードを前に上級部隊ごとに集まって並んでいる彼らの中には特殊作戦部隊の指揮官の1人としてドン・テヒョン少尉も交じっていた。

「気をつけ！」

指揮官たちが姿勢を正すと、チェ・チョンヒ将軍が指揮官たちの背後からテントに入ってきた。

「忠誠！」

前に立った副官が敬礼で迎え、チェ・チョンヒ将軍は答礼する。

そして前に立って集まった指揮官たちの姿を見た。

「諸君、いよいよ新たな攻勢を開始する。目標は飯塚市だ」

チェ・チョンヒは作戦の概要を説明した。

「作戦発動は明日の午前10時だ。巡航ミサイル攻撃を併せて日本に動揺を与えるとともに、福岡と北九州の連絡を確固たるものにする。質問はあるかな？」

何人かが疑問点を述べて、参謀がそれに答えると会合は終わった。指揮官たちは作戦決行の準備をすべく、それぞれの部隊に戻っていた。最後にドン・テヒョン少尉が残った。チェ・チョンヒはそれに気づいた。

「おお。君は！ドン・テヒョン少尉だったな。君の武勇伝は聞いているよ」

ドン・テヒョンは特殊作戦部隊の中でも最も有能な指揮官として紹介されていて、今回の作戦でも北九州と福岡の占領に大きな役割を果たした。ただ1つの点を除いた。

「少数の敵を逃してしまったのは残念だが、だがそういうこともあるものだ」

ドン・テヒョンはチェ・チョンヒの言葉に拳を握り締めた。

「逃がしたのは私ではありません。海兵隊の連中です。もう少しで追い詰めることができたのに、あの海兵隊の連中が逃がしたのです」

チェ・チョンヒはドン・テヒョンの言葉に驚いた。

「南の人間は資本主義に毒され、墮落している。特殊作戦部隊を再編成したい」

「再編成だって？」

「特殊作戦部隊指揮官の許可は得ました。私の部隊を直属の部隊で固めたいのです」

その瞬間、チヨンヒの顔色が変わった。

千里馬作戦に投入された特殊作戦部隊は旧北朝鮮と旧韓国の軍人から成る3つの混成小隊から成っている。彼は自分の小隊に分散している旧北朝鮮特殊部隊の人員を集めようと言っているのだ。

「直属の部下？元第8特殊軍団の連中か？」

第8特殊軍団。かつて北朝鮮とも呼ばれた朝鮮半島の北半分を支配していた国家、朝鮮民主主義人民共和国の誇る数十個旅団に及ぶ大規模な特殊部隊だ。人生の半分を38度線で過ごしたチヨンヒにとって北朝鮮の特殊部隊は最も恐れる存在なのだ。

特殊作戦部隊を南北合同にしたのも旧北朝鮮特殊部隊をそのまま実戦に投入することに危機感を覚えたからに他ならない。なにをするか分からない。そういう恐怖心を旧韓国の軍人たちは抱いていたのである。

「はい。彼らは優秀です。必ず日帝の腰抜けどもを叩き潰してくれましょう」

「そうか、期待しているぞ」

テヒョンは敬礼で返すと、すぐに司令部を出て行った。その瞬間にチヨンヒの顔色が再び変わった。

「糞。北の貧乏奴隷が。戦闘に他人より少々長けているくらいで調子に乗りよって」

チヨンヒは、その拳をテーブルに叩きつけた。

司令部を出たテヒョンは、待ち構えていた韓国軍のジープであるK131多用途車に飛び乗った。運転するのはキム・ヨンス伍長で

ある。

「同志少尉。どうでしたか？」

「部隊を再編する許可をとった。これでやりやすくなる」

助手席に収まったテヒヨンは、後部座席に置いておいて水筒を手に取りながら答えた。

K131は走り出し、明かりの消えた街を疾走した。

「同志少尉。この戦争が終わったらどうなさるおつもりで？」

「どうなさるって、勝つか負けるかによるな」

「勝つに決まっているじゃないですか！」

ドン・テヒヨンは部下の抗議を無視して水筒の水の口に注ぎ、飲み込んだ。

「うまい。日本の水道水だ。飲んでみるか」

ドン・テヒヨンは水筒を持った手を女に向けた。

「水道水？飲めるんですか？」

「飲めるんだ。水道水が飲めるんだ」

その言葉にキム・ヨンスは心底驚いた様子であった。

「いいか。日本人は手先が器用な連中だ。我々には無い力を持っている。事実、ヒデヨシが、日帝が、我が祖国を蹂躪したが、我が民族が日本を蹂躪した事は無い。日本はそれだけ強大な国なんだ。簡単に勝てる相手じゃないぞ」

ドン・テヒヨンはそう言って、再び水筒の水を口の中に注いだ。

「で、勝つたらどうするおつもりで？」

「そうだな。東京へ行くこつ。東京の葛飾だ」

「葛飾？」

「我らが偉大なる將軍閣下が一番好きだった映画の舞台さ」

七・巡航ミサイル迎撃作戦（後書き）

というわけで一ヶ月ぶりの更新です。閣僚の中で一番まともなのが社民党の福島瑞穂特命大臣という素敵な民主党政権がいよいよ始まりましたがいかがお過ごしでしょうか？

“福島瑞穂女氏が一番まとも”と聞いて驚いた方もいるでしょうが、これが実情です。すくなくとも消費者・少子化・男女共同参画担当という職務の範囲内ではまともなことを言っています。他の大臣が基本的に威勢のいいことを言うだけで、後は丸投げするだけの連中ばかりですから。政治主導が聞いて呆れます。

2話を感想欄による指摘に基き登場する機体をRF-4EJからRF-15Jに変更しました。

八・情報収集

6月27日未明 東シナ海 海上自衛隊潜水艦【こうりゅう】

海中を巨大な鉄塊が進んでいる。周りを優雅に泳ぐ魚たちの姿と比べると何とも醜いものであるが、それは人類の生み出した幾多のテクノロジーを投入された強力な兵器システムであった。

海上自衛隊の潜水艦【こうりゅう】は厳戒態勢を維持しながら東シナ海を進んでいた。内戦の続くうえに台湾との緊張状態を高めていた中国に対する情報収集任務に投入されていた【こうりゅう】であるが、高麗との戦争勃発により呼び戻されたのである。

【そうりゅう】型の第4番艦である【こうりゅう】は就役から3年目の新鋭艦である。葉巻型と呼ばれる独特の船体にはアメリカの潜水艦と比べても見劣りしない最新鋭のエレクトロニクスが詰め込まれ、その戦闘能力は世界有数を言われる高性能艦であるが、その命運はたった一人の男に握られていた。その男は名を山吹義男やまぶき よしおと言い、階級は1等海曹、役職は水測長ソナーであった。彼は今、まだ十分な力量を身に付けていない新人ソナーマンとともに当直に就いていた。山吹はソナー画面を眺めながら、様々な水中の音の中から敵を見つけ出そうとしている。ベテランのソナーマンである山吹は解析にかけなくても音を聞けば船の種類を当てることができた。そしてその耳は今回もうまく働いた。山吹は艦内電話の受話器を取ると艦長を呼び出した。

発令所から艦長である中曾根2佐がソナー室を訪れるまでに15秒ほどしかかからなかった。ソナーは発令所の隣にある。

「敵艦か？」

「まだ分かりませんが、潜水艦です」

山吹はそう言ってソナー画面の一点を指差した。素人目にはデタラメにカラフルな模様を映しているだけに見えない画面だが、山吹はその中に自分が乗っているのと同じような鉄の鯨の姿を見ていた。

「今、抽出して流します。雑音を消去してクリアにしました」

スピーカーからは明らかに船舶のスクリー音と分かる音が流れ始めた。

「1軸のスクリー音。潜水艦です。詳しくは不明ですが、海上自衛隊かアメリカのモノではありません」

「よくやったぞ。すぐに正体を暴いてくれ」

中曽根はそれだけ言つと発令所に戻つた。

「総員戦闘配備、水雷戦用意！これは訓練ではない」

それを聞くと、乗組員たちがキビキビと動き出した。その顔は誰もが緊張感に満ちている。これは訓練では無い上に、今は平時ではなく戦時である。つまり誰かが戦闘に参加しなくてはならないのだ。それがもしかしたら自分達かもしれない。

乗組員たちが配置につくと、【こうりゅう】の船内は静寂に包まれた。いくら防音技術が発達したからと言っても、全ての音を遮断できるわけではない。敵に見つからぬために皆が声を潜めているのである。だが、その静寂は長くは続かなかつた。

<目標は台湾海軍、海龍型潜水艦！>

山吹の声に続いて、乗組員たちの溜息で船内は一杯になった。

「戦闘配備解除、戦闘配備解除。哨戒配備につけ」

中曽根はそう命じると、乗組員の中で最後に溜息をついた。

「助かったな。もし正体を知らずに攻撃をしかけていれば、大変なことになっていた」

日本の周辺国、中国、台湾、ロシア、アメリカはみな潜水艦を保有し海中に配備している。極東は世界有数の潜水艦ホットゾーンなのだ。そして今、自衛隊と高麗軍が戦争を開始している時でも各国

の潜水艦隊は不気味に活動を続けており、戦争の当事者は常に敵味方識別の判断を強いられ緊張状態にあるのである、

それから数時間後、【こうりゆう】はフローティングアンテナを水上まで伸ばして潜水艦隊司令部からの命令を受けとっていた。

「今度は何だ？福岡方面への偵察任務？」

仮眠中に叩き起こされ、発令所に入っていた中曾根2佐は、哨戒長を務めていた当直士官から状況説明を受けていた。

「危ない任務だな……」

「しかし、高麗の対潜能力は充実しているとは言いがたいです。不可能ではありませんよ」

若い哨戒長が語った。

「それもどうだな。前進原速。深度60、針路そのまま。ヨーソロ」

艦長はあまりやる気がなさそうだった。

「前進原速。深度60。針路そのまま。ヨーソロー」

哨戒長が復誦した。

対馬海峡 釜山と対馬の中間海域

【こうりゆう】が偵察任務の命令を受領すると同じ頃、同じような任務を既に実行中の艦があった。ステルスミサイル駆逐艦【カニンガム】である。

低視認性塗装が施されて暗い闇の中に紛れこんでいる【カニンガム】では高麗本土と高麗の占領下にある対馬への情報収集活動が開始されていた。

「シースカウトがまもなくツシマに達します」

主要な将校が詰める【カニンガム】CICではレンディーノに皆

の注目が集まっている。彼女の前の画面には【カニンガム】が搭載する無人偵察ヘリコプターであるMQ-8シースカウトの赤外線カメラが捉えた映像が映されている。

「敵に見つかってはいいの？」

艦長が尋ねると情報士官は首を横に振った。

「レーダー探知を避けるために超低空で飛行しています。ESSMも反応していません。高麗軍のレーダーには捉えられていない筈です」「本当かねえ？」

マッケルシーが何時ものようにレンディーノに悪態ついた。レンディーノは無視して画面に集中している。

「まもなくツシマ空港が視界に入ります」

浅芽湾より侵入したシースカウトは高度を上げて対馬空港の全景を赤外線カメラに収めた。まず目に付いたのは背部に巨大な板を載せたような旅客機型の飛行機である。

「E-737です」

レンディーノが説明をした。高麗空軍の早期警戒機である。さらにその奥にはF-15Kが8機ほど並べられているのが見えた。どの機体も爆弾の搭載作業が行なわれている。

「なにかの作戦準備中のようにですね」

副長が指摘した。そしてこんな提案をした。

「今ならまとめて吹き飛ばせますよ」

距離としては100km程度であるから長射程弾を使えば155ミリ主砲AGSでも十分に届く。連射をすれば駐機している航空機をあとかたもなく破壊できるであろう。

「ダメよ。まだアメリカは参戦していないのだから」

艦長は副長を窘めつつ、彼の提案を魅力的なものだと考えていた。きつと実行できる時が来るであろう。

「電子情報収集の方は？」

艦長が尋ねるとコンソールと睨めっこをしていた電子戦オペレーターが答えた。

「通信量が急速に増えています。それもツシマだけでなく戦線全域で。なにか大規模な作戦を準備しているようです」

「日本に伝えたら喜びそうね」

【カニングム】の得た情報は傍受されにくい衛星通信をつかってハワイの太平洋軍司令部に送信された。

午前7時 防衛省中央指揮所

アメリカ太平洋軍司令部が在日米軍司令部を通じて送ってきた情報は中央指揮所に詰める自衛隊の最高首脳部たちを緊張させた。

「各部隊に通達して警戒を高めさせるんだ」

神谷統幕長が陸海空の幕僚長に指示を出した。

「各自衛隊の増援部隊の展開状況はどうなっているんだ？」

まず答えたのは剣持陸幕長であった。

「第14旅団が大分への上陸を完了しました。現在は西部方面隊の戦略予備部隊として待機中です」

第14旅団はそれまで四国の防備を担当していた第2混成団を改編したもので、2個普通科連隊を基幹とする小さな部隊である。その立地から中国地方や九州を守る部隊の後を詰める戦略予備部隊としての正確が強い。

「第7師団先遣隊も今日中には九州に上陸できる筈です。それに加えて現在、第6師団、第10師団、第13旅団の各部隊を派遣する予定です。高麗軍の次の攻勢に間に合うかはわかりません」

続いて笹山海幕長が説明を行なった。

「海上自衛隊は第1護衛隊群が五島列島沖に展開して阻止線を張っています。対馬海峡に突入せよとおっしゃるなら空自の援護がないと」

潜水艦に与えられた特殊任務については説明をしなかった。潜水艦の作戦行動は海上自衛隊の機密中の機密であり、例えば中央指揮所

の中でも簡単に漏らすわけにはいかないのである。

「空自は巡航ミサイル対策で手一杯ですよ」

斎藤空将は首を横に振りながら言った。

「今は攻勢作戦はとれません」

モスクワ時間午前5時 ホテルウクライナ スイートルーム

ドミトリー・ウスチノフはこんな時間に会う約束をしたことを後悔していた。ただでさえ早い時間で、しかも今は夏時間が始まったせいで余計に早く感じる。しかし、これも両者の都合の辻褄をあわせた結果であるから仕方が無いと言う事は、彼自身がアポイントをとったのであるから分かっていた。

ドアを開けると4つ星ホテルの最高級スイートルーらしい高級感溢れる豪華な内装が施された広い部屋がドミトリーを待っていた。そしてお目当ての人物も。ドミトリーは連絡員1人を伴なって部屋に踏み入った。

「おひさしぶりです」

ドミトリーが右手を差し出すと、相手も同じく右手を出してドミトリーの手を握り締めた。

「こちらこそ。それでご用件は？」

相手は流暢なロシア語で返した。日本では“デイズニーランドを訪問するため”と称して日本に密入国するという奇行の方が有名なため、彼が実は日本語も含めた数力国語に精通する秀才であるということはあまり知られていない。

ドミトリーを迎えたのは、かつて北朝鮮とも呼ばれた朝鮮民主主義人民共和国の最高指導者の長男であった。中年を過ぎてだいが贅肉がついたドミトリーと比べても横幅の広さが目立つ相手の男は秘密会談の相手としてはどうしても胡散臭さを感じられるが、北朝鮮と韓国、アメリカの開戦から南北統合までの混乱の中からまんまと国

外に逃げおおせたしたたかさは本物に間違いはなかった。

「あなたの見解を聞きたいのです。高麗連邦と中国、間をとりもっているのは誰かということですよ」

すると連絡員の持つ携帯電話が鳴った。連絡員は2人に断りをいれると背を向けて携帯電話を手にした。

「なんだって。分かった。現地は午前10時だったな？」

連絡員は黙ってこちらを注視している2人に言った。

「長官。高麗連邦軍が九州で再び攻勢に転じたそうです」

八・情報収集（後書き）

悪い癖であると思いつながら、やってしまつたのですよね。やたらとキヤラを増やしてしますのは。ただ陸自、空自ばかりで海自もそろそろ活躍させろ！と言われそうなのと、潜水艦戦を書きたいという欲求を押しえられませんでした。すっかり忘れ去られているくゆきぐもくを使えという声もあるでしょうが、艦長を名無しにしてしまったせいでどうも使いづらい。まあいずれ第1護衛隊群ともども舞台を用意するつもりです。

さて話は変わりますが、麻生内閣で財務大臣を務めた中川昭一氏がお亡くなりになりました。

中川氏は麻生総理とともにこのたびの金融危機に立ち向かい、日本ばかりではなく世界の経済を下支えた日本が誇るべき政治家です。大げさに聞こえるかもしれませんが、IMFが2人の進めた緊急融資を「人類史上最大の貢献」と称えたのは紛れもない事実なのです。その功績については“ある内閣総理大臣の軌跡”でも取り上げたいと思っております。

大変優秀で将来のある中川氏を失ったのは日本にとっても大きな損失です。その冥福を心よりお祈りしたいと思います。

九・大攻勢

北九州市内

戦場という場所では大なり小なり軍紀に乱れが生じるものであった。ある高麗軍兵士にとつて、それが命とりになった。歩哨は2人1組で行なうものであるが、面倒ごとを嫌った彼の相方が彼1人に押し付けてしまったのである。

高麗連邦共和国は占領した北九州と福岡に戒厳令を敷き、チエ・チヨンヒ將軍を戒厳司令官に任命して占領・統治を行なっていた。といつても、高麗軍には恒久的な占領をするつもりなどまったく無かつたので行政活動には殆ど手をつけておらず“家に籠もること”を推奨する放送を流す程度であつたし、占領下の街から脱出する市民に対してもなにもしようとしなかつた。これは難民を押し付けて日本に圧力をかける意図もあつた。

ともかく、その高麗兵はK2小銃を肩にかけて徴用した自転車に乗り朝の住宅街を駆けていた。そしてある角を曲がつた瞬間、肩から血飛沫が飛んでそのまま倒れてしまった。高麗兵は咄嗟にK2小銃を構えようとしたが、今度は胸元から血飛沫が飛び、そのまま動かなくなつた。

相手が動かなくなるのを確かめると、平坂2曹は隠れていた物陰から飛び出した。脈に手を当てて相手の死を確認すると、高麗兵の持つ小銃用弾倉を奪い取つて、その場を後にした。

4日前に原隊からはぐれて敵の占領下の街に1人取り残された平坂は、ゲリラのような戦いをしつつ何とか生きのびていた。

すると空から轟音のようなものが聞こえてきた。平坂が空を見上

げると、ミサイルが陸地に向かって飛んでいるのが見えた。

「巡航ミサイルか…」

それが高麗軍のさらなる攻勢の始まりを示す合図であった。

阿蘇山上空 航空自衛隊 E - 7 6 7 A W A C S

早期警戒を担っていた上空の E - 7 6 7 A W A C S は高麗軍の発射した多数の巡航ミサイル、それと同時に活発化した高麗空軍機の動きを捉えていた。

すでに防衛省中央から“高麗が攻勢にでる可能性あり”と報告を受けていたオペレーターたちはその動きを見て、その時が来たのだと判断した。

オペレーターたちはまず鹿屋で待機中の海自の新型機である X E P - 1 C に出動を要請した。 E - 7 6 7 にも巡航ミサイル探知能力が備わっているが、同時に高麗空軍機の動きが活発化しているのでそちらに集中したかった。なので巡航ミサイルは巡航ミサイルの専門家に任せることにしたのである。

そして各地の部隊にただちに迎撃部隊を出撃させるように要請した。

鹿屋基地を飛び立った X E P - 1 C は一気に高度を上げた。巡航ミサイルに対処するために配置されている各種部隊とデータリンクが繋がり、機体下部のフェイズド・アレイ・レーダーを起動させた。「マイホーム、こちらアスター 2。目標を捕捉した」

レーダーシステムは高麗軍が発射した 20 発以上の巡航ミサイルを確かに捉えていた。

XEP-1Cの下を1機の戦闘機が飛んでいった。同じく鹿屋から出撃したF-15FXである。XEP-1Cに比べると空中戦闘能力があり生存性が高いF-15FXは、XEP-1Cの哨戒線より前方に進出して巡航ミサイルを搜索する役割を与えられていた。そして搭載するフェイズド・アレイ・レーダーは見事にその役割を果たした。

「マイホーム、こちらクレイモア・ワン。目標を捕捉した」
コクピットに座る東條惣一3等空佐は新田原にそう報告した。

F-15FXを追って4機の戦闘機が続いた。第6航空団のF-15J改である。翼の下にAAM-4空対空ミサイルを搭載して迎撃の準備を済ましていた。

さらに新田原からもF-15Jが発進し、特異な動きを見せる高麗空軍に備えた。空における防空態勢は自衛隊が用意できるなかで万全の状態であった。

「クレイモア・ワン、こちらマイホーム。マグースチームを誘導せよ」

「ラジャー」

F-15FXはさらに海自機であるXEP-1Cに代わって友軍機を誘導する任務も与えられている。

東條は返答をすると通信機を機内回線にあわせて後席手に呼びかけた。

「どうだ？まだ追尾しているか？」

「大丈夫。くつきり映っているよ」

後席でWSOを務めるWAF（女性自衛官）である多々良弥生1尉が答えた。

「よし。最適な迎撃位置を割り出せ」

F-15の編隊は東條のF-15FXを先頭に一気に加速して獲物である巡航ミサイルに喰いかかったのである。

迎撃の主力となるのは第6航空団のF-15J改、マグースチームたちである。

「マグース・ワン。フォックス・ワン！」

4機のF-15J改がそれぞれの目標に向かって99式空対空誘導弾AAM-4を発射した。比較的遠距離からの発射であるので、F-15J改が自らのレーダーで捉えた情報を基にミサイルを誘導しなくてはならない。しかし、やがてAAM-4に搭載されたアクティブレーダーが高麗の巡航ミサイルを捉えた。AAM-4は撃ちっぱなし型ミサイルの本領をいよいよ発揮したのである。発射母機の制御下から離れ、各個に目標に向かうAAM-4。そして、空中にいくつもの爆発が生じた。

<4機撃墜！4機撃墜！新たな目標に攻撃を続行せよ>

XEP-1Cのオペレーターの興奮した声が無線越しに聞こえてきて、東條は微笑んだ。

「了解。引き続き迎撃行動を行なう」

F-15J改の編隊は次なる目標を探す。そこへ那覇からAAM-4装備のF-2編隊も駆けつけた。

今度は8発の高麗巡航ミサイルが空に散った。

九州電力 南畑発電所

坂本峠の防衛線から国道385号線に沿って北上したところに南畑発電所がある。防衛線の一角を担っている南畑ダムから供給される水を利用する水力発電所である。

その先、国道385号線は緩やかなS字カーブになっているが周りには畑が広がっているので視界を遮る森が無く、発電所敷地内に設置された観測所は広い視界を得られた。

「来たぞ」

双眼鏡を片手に見張りをしていた隊員が叫んだ。S字カーブの先の方のカーブを戦車が曲がって来て観測所の視界の中に現われたのだ。

「K1A1だ」

1 輻の戦車を先頭に歩兵隊を乗せていると思われるトラックが続く。時速は待ち伏せを警戒しているのか遅めで時速10km程度。それを有線回線で報告した。

第19普通科連隊防衛線

第2小隊の陣地にも高麗軍接近のニュースは伝わった。彼らを含めた第1中隊の守る防衛線に敵軍が突っ込んでくるのだ。

防衛線が敷かれている地点において国道385号線は急激なS字カーブを描いている。つまり2つのU字カーブがあり、上から見ると一定の区間の中に道が三つ、並行して並んでいる形となる。

第1中隊の防衛線は最初のU字カーブの中に設けられている。道路が並行に並んでいるその中間に川が流れていて、その川に沿った防衛線から対岸の道路を狙い、そこへやってきた高麗軍を殲滅する作戦である。北側から第2小隊、第3小隊、第4小隊の順に3個小隊が並列して対岸に睨みを利かせて、北側には第1小隊が予備として待機する。予備小隊は迂回して浸透してくる高麗軍に備えるとともに、可能ならば他の小隊の集中砲火で足止めした高麗軍に攻撃を仕掛けて粉碎する役割が与えられている。そして対戦車小隊の87式対戦車誘導弾は各小隊の陣地に分散、配置されて敵の戦車を狙う。一方、第1中隊の後方、二つ目のU字カーブの中には第2中隊が控えている。彼らの任務は第1中隊を援護し、第1中隊が撤収する場合は次の陣地に移動するまでの時間を稼ぐことにある。

そして両中隊の軽迫撃砲小隊は一番後方にまとめられ、協力して火力支援を行なう事になる。

第2小隊の陣地は中隊の中で一番北側にあり、南下してくる高麗

軍はまず彼らの目の前に現われるのだ。

<敵勢力は1個中隊。戦車2輦に支援されている。先頭と最後尾を戦車で守り、間にトラック縦隊が…>

敵勢について報告が次々と入り、その度ごとに緊張が高まる。隊員たちは入念に擬装が施された陣地の中から銃身だけを突き出して敵を待ち構え、小隊長の“撃ち方はじめ”の一言を待っているのだ。そこへ戦闘の戦車が現われた。さらに徒歩歩兵が1個小隊ほど続く。

「偵察部隊のようだな」

古谷が呟いた。高麗軍はここを絶好の待ち伏せポイントと考えて、まず先遣隊を派遣して情報収集を行なうつもりのようなのだ。

問題は第1中隊の攻撃開始のタイミングである。敵の主力が来るのを待つか、それとも先に先遣部隊を粉碎するか。攻撃を仕掛ければこちらの防衛線が暴露してしまうのだから、判断は難しい。全ては中隊長の判断にかかっている。

佐賀市金立公園 第4師団司令部

標高501メートルの金立山の麓に広がる公園の森の中に師団の司令部が設置されていた。高速のサービスエリアにも面していて、業務用の出入口が開放されているので高速道路である長崎自動車道へ直接乗り入れることもでき、2つの峠の防衛線との連絡線を確保していた。

森の中に設けられた半地下式の司令部には各防衛線からの情報が次々と舞い込んでいた。そこで内海師団長は悩んでいた。

「385と263に1個中隊ずつ？後ろに大隊主力が控えているとかそういうことはないのか？」

385と263はそれぞれ国道385号線と国道263号線を示す。どちらも防衛線を通る道路だ。高麗軍は前原付近に2個連隊の

兵力を揚げている。それが攻勢に2個中隊しか投入しないというのはおかしい。

「はい。斥候の情報や電子偵察の結果を総合しても、それ以上の規模の軍事行動は確認できません」

情報幕僚が手元にある事柄をすべて説明した。

「機動妨害システムの方はどうだ？森のあちこちに監視センサーを設置しているんだろ」

内海はシステム専属のオペレーターに尋ねた。

「センサーに動きはありません」

「他所での大規模攻勢を隠すための陽動か、それとも威力偵察か。もしくは我々の情報網を巧くすり抜けているか？どちらにしても、こちらの手の内は見せたくないな」

内海は西部方面普通科連隊と第19普通科連隊の連隊長に指示を出した。

第19普通科連隊防衛線

古谷は有線回線で中隊長からの指令を受け取った。

<敵先遣部隊を攻撃しろ。ただし第2小隊だけだ。小規模な前哨陣地と思わせろ>

「了解。交信、終わり」

古谷は優先電話の受話器を戻すと、小隊無線網の発信ボタンを押した。

「撃ち方はじめ！」

九・大攻勢（後書き）

文中に登場する機動妨害システムの正体を知りたい方は、防衛省のサイトにアクセスして、“我が国の防衛と予算 - 平成21年度概算要求の概要 - ”をご覧ください。

一〇・激突

合図は87式対戦車誘導弾の発射であった。先頭の戦車に向けられたもので、至近距離での発射のために戦車の方にはなんの対処の手段もなかった。

ミサイルが戦車を破壊すると、小隊の持つ全ての火器が一斉に火を吹いた。車を降りて徒歩で前進していた歩兵たちはその射撃にもろに晒されることになった。高麗兵は次々と血飛沫をあげて倒れていったのである。

ある兵士は戦車の陰に、ある兵士はその場に伏せて、ある者は川に飛び込んで、それぞれに銃撃から逃れようとした。ほぼ拮抗した小隊同士の撃ちあいであったが、陣地と先制の優位を得た自衛隊側が一方的な攻撃を仕掛けていた。

後ろの戦車がスモークディスチャージャーを作動させ煙幕を張りつつ主砲を陣地のある対岸の林に撃ちこんでいる。戦車砲の攻撃に堪らず自衛隊員たちは塹壕の中に隠れる。

「被害状況を報告しろ！負傷者はいないか！」
数人の負傷者が出た。幸い死者は出なかった。

高麗兵の小隊長は無線で中隊司令部に連絡を取っていた。

「敵の前哨陣地とぶつかりました！」
小隊長の隠れる戦車の陰にも銃弾が次々と飛び込んでくる。

その少し後方の中隊本部では中隊長が冷静に指示を出していた。

「よし。先遣小隊は現状を維持、残りは山中の迂回を試みる」
少し先から聞こえてくる銃声が辺りに響く中、中隊主力が動き始めた。

数人の兵士が少し下流で川を渡ろうとしているのが、桜井の

目に留まった。素早く64式改狙撃銃の銃口をその兵士の一群に向けた。引き金を引くと、先頭の高麗兵の頭から血飛沫が吹いてそのまま倒れた。残りの兵士はその場に身を屈めて、元来た道に戻っていった。

それを確認して、また正面に視線を戻すと、戦闘は膠着状態に陥りつつあるのが分かった。先ほどまで途切れることなく続いていた銃声の音は疎らになり、高麗兵たちはそれぞれ手近な障害物を見つけて、そこに隠れてしまっていた。

先ほどまでの一方的な状況は奇襲効果によるもので、自衛隊側には2個中隊が陣地に集結しているとは言え実際に戦っているのは1個小隊同士であり奇襲効果が薄ければこのような状況になるのは目に見えていた。そして一度、落ち着いてしまうとそこから事態を動かすのは難しい。

「気を抜くな！敵の主力が迂回をしてくるかもしれん。あらゆる事態を想定して備えるんだ！」

古谷小隊長の声が聞こえてきた。古谷は塹壕の中を屈んで歩き回って、部下の状況を1人1人確かめていたのである。

桜井は自然と北西方向に視線を向けた。高麗軍が迂回攻撃を仕掛けてくるとしたらその方向である。その先には第1小隊がいる筈であるが、彼らはどうしているのであるのか？まさか同士討ちになるようなこともあるまいな？

ホテルウクライナ スイートルーム

ドミトリーの会談相手は、彼の人脈から得た情報の詳細を話していた。それはドミトリーがこれまで得た情報を裏付けるのに十分なものであった。

「やはり間を取り持っているのは白守信將軍に間違いはないということかな？」

バイ・シヨウシン

「ええ。彼はかつての我が祖国の軍部と強い繋がりがあり、内戦時には多大な支援をしております。今の中国軍軍部で高麗軍部と繋がりがあり、かつ間を取り持つことができる人間となると彼だけでしょう」

ドミトリーは自分のオフィスで読んだS V Rの白將軍に対する評価を思い出した。いわゆる上海派と呼ばれる派閥に属する將軍の1人で、北京政府とは距離を取っていた。今の地位は第23集團軍司令官で祖国ロシアとの国境を守っている。南方で内戦が繰り広げられている中国の現状を鑑みれば、あまり重要な地位であるとは言えない。飼い殺されているようである。高麗との仲介役をすることで自らの立場の向上を狙っているのであるだろうか。

「なるほど。おかげさまで裏付けができました。謝礼については指定の口座に振込みをしておきます」

「その件で1つ頼みたいことがあります。貴国がシベリアで推進中の資源開発についてですよ」

「と言いますと?」

「例えばどこの銀行から融資を受ける予定なのか、とか。採掘を担当するのはどこの企業だとか。もうだいたい決まっているんじゃない?」

ドミトリーは相手の意図を察した。インサイダー取引をやるつもりになっているのだ。

「すみません。自由主義経済の建前もありますし、関係各国との関係もありましてその件については国家機密なのでそう簡単に教えるというわけには」

「大丈夫です。決して外部には漏らしません。それにちゃんと見返りはあるんですよ」

相手の男はニンマリ笑って言った。ドミトリーは最後の一言が気になった。

「見返りと言いますと?」

「絶対に満足していただける筈です。しかし4日間限定で有効な情

報ですが」

ドミトリーは国家機密の一部を目の前の人物に対して解除する気になりつつあった。

上空

F-15J改チームはAAM-4を撃ち尽くして帰還していた。代わりのチームが離陸中で、空に残っているF-2の編隊も残存ミサイルが数発になっていた。

「アスター2、こちらクレイモアワン。残りの目標は捕捉できるか？」

F-2チームを先導するF-15FX、コールサイン“クレイモアワン”のリーダーは残りの巡航ミサイルを捉えていなかった。

「クレイモアワン、こちらアスター2。新たな目標は確認できない。まった。新たな目標2基を確認、瀬戸内海沿いに南下している。畜生、地形の陰に隠れた！ロストした！」

「ラジャー。アスター2、こちらクレイモアワン。目標を探してみる」

東條は通信を終えるとF-15FXは急旋回させた。F-2の編隊もそれに続いた。

「糞！どこに居るんだ」

後席に座ってリーダーと睨めっこをしていた多々良1尉が悪態ついていた。

「落ち着け。プログラミング通りにしか動かない巡航ミサイルだ。すぐに見つかるはずさ」

しかしF-15FXのフェイズドアレイリーダーはなかなか目標を見つけれない。そこへ他所の誰かが通信に割り込んできた。

「こちらエアロジェリーフィッシュオペレーター。こちらのセンサーが目標を捉えた」

突然の通信に東條と多々良は驚いた。

「多々良。空のクラゲなんてコード知ってるか？」

「聞いた事もない」

それはアメリカからの贈り物に臨時で与えられたコールサインであつた。

鹿屋基地 J・LENSオペレーションセンター

鹿屋基地の一角に大きなテントがいくつも張られていた。そのなかにはコンピュータと様々な通信システムが並べられていて、その隙間を多くの人間が行き交っていた。何人か日本人の姿もあつたが、ほとんどがアメリカ人のようであつた。

そして数少ない日本人の1人が、F-15FX<クレイモアワン>と繋がっている通信機の前に座っていた。

「繰り返す。クレイモアワン、こちらエアロジェリーフィッシュ。」

目標を捉えた。こちらはJ・LENSジュロキモオレベンギカキのオペレーションセンターだ」

<ちよつと待て！J・LENSジェイ・レンズだつて？>

相手の驚きように通信手は顔を歪めた。

「聞いてないのか？」

<ああ。ちつともな>

この混乱で連絡が伝わっていなかったらしい。

「どうやら我が国の防衛体制にはまだまだ欠陥があるようだな。繰り返す。目標を捉えた。データリンクの準備が終わっていないので口頭で座標を伝える。かまわないか？」

<エアロジェリーフィッシュ、こちらクレイモアワン。ニダーの欺瞞じゃないだろうな>

「信じる」

通信手はクレイモアワンから高麗軍の巡航ミサイルへの方位、距離を伝えた。そのデータは高度5000メートルに浮かぶ飛行船か

らもたらされていた。

Ｊ・ＬＥＮＳ、すなわち統合陸上攻撃巡航ミサイル防衛用上空配備型ネット接続センサーはアメリカ軍が対巡航ミサイル防衛の要として開発した空中レーダーで、15メートル級の飛行船に各種のレーダーと赤外線センサーを備えている。飛行船は飛行機と違い長時間同じ空域に留まることができるので、この手の早期警戒システムに使うには便利なツールである。

昨日、鹿屋基地にC-17輸送機で運ばれたＪ・ＬＥＮＳは海岸で組み立てられ、徹夜の作業の結果として今朝早くに日向灘に配備することに成功したのである。自衛隊はアメリカからのＪ・ＬＥＮＳの貸与によって空白のない対巡航ミサイル防衛網を完成させたのだ。

上空

「よし。ただちに目標に向かう。アフターバーナー点火！」

東條は後席の多々良に一方的に宣言すると、アフターバーナーを点火してF-15FXを一気に加速させた。多々良は突然の急加速のGによって身構える暇もなく座席に身体を押し付けられることになったが、それに文句を言う事なく、すぐに態勢を整えてレーダーシステムと向き合った。多々良はレーダーの搜索範囲をエアロジェリーフイツシュの指示のあった方向に集中して重点的に捜査した。

F-2編隊を後ろに率いて、くじゅう連山の山々を眼下に音速で飛ぶF-15FXは遂に目標を捉えた。

「ターゲットを確認。2発だ。射程圏内」

多々良の報告を聞いて東條は後ろに続くF-2編隊に攻撃を指示しようとしたが、またもや通信への割り込みによって妨げられた。今度の相手は上空警戒中のE-767AWACSであった。

<高麗編隊が接近中。KF-16が4機だ>

「ちっ」

東條は舌打ちして心の中で高麗空軍機を罵った。それからF-2編隊の指揮官に指示を出した。

「レヴィンリーダー、こちらクレイモアワン。AWACSの管制下に入り高麗空軍機を阻止してくれ。巡航ミサイルはこちらで始末する」

<ラジャー、クレイモアワン>

F-2編隊は一斉に散開して、接近するKF-16に向かって行った。

「単機でやれる？」

後席の多々良が指摘した。ステルスモードのF-15FXにはAM-4を2発しか搭載できない。相手の巡航ミサイルも2基で同数であるが、ミサイルは決して完璧な兵器ではなく外す事も多々あり、できるならば予備のミサイルが欲しいところである。

「いざとなったら機関砲ガンで落すさ」

多々良はその言葉がどこまで本気なのか分からなかった。

「OK。火器管制システム、対空モード」

多々良がリーダーを操作して東條が攻撃に集中できるようにした。こうした作業分担ができるのが複座機の利点である。

「武器選択、AM-4。ターゲットロック」

2つの十字模様が東條の見えるヘッドマウントディスプレイ上の巡航ミサイルを示す輝点に重なった。フェイズド・アレイ・リーダーと撃ちっ放し型ミサイルを装備しているので同時に複数の目標に対して攻撃を加えることができる。

「クレイモアワン、フォックスー！フォックスー！」

機体側面に貼りつけられたコンフォーマルタンクの兵装ベイを覆っていた蓋が開いてミサイルを取り付けられたレールを支えるアームが動き、AM-4が機外に突き出されて外気に晒される。次の瞬間、AM-4のロケットモーターが点火されレールから離れて目標に向かって行く。最後にまたアームが動きレールをベイ内に戻

して何事もなかったかのように蓋が閉じた。

2発のミサイルはそれぞれの目標に向かって真っ直ぐ飛んでいく。それをモニターする多々良は自然と手に力が入るのを感じた。AA M-4を示す輝点が巡航ミサイルを示す輝点にぐんぐんと近づいていく。やがて重なった。

「撃墜成功だ」

東條は遠い空中に2つの火花が散るのが見えた。

やがてKF-16の阻止に向かったF-2の編隊が戻ってきた。

3機になっていた。

<クレイモアワン、こちらレヴィンリーダー。敵を1機撃墜した>
指揮官がそう報告してきたが、その声は少しも嬉しそうではなかった。

一〇・激突（後書き）

ひつちびとの投稿です。

一一・飯塚包囲網

福岡県飯塚市西部 八木山バイパス筑穂インター前 空挺団第5中隊陣地

第1空挺団第2普通科大隊第5中隊 ちなみに第1空挺団に属する普通化中隊は所属大隊に関係なく通し番号で呼ばれているので、別に第2大隊に5個中隊も配属されているわけではない。は、飯塚市の西に防衛線を築いていた。

大隊は西側の高麗軍に備える態勢をしていて、飯塚市内への突入ルートとして北の国道201号線と南の八木山バイパスルートが考えられたので、第4中隊と第5中隊をそれぞれの道沿いに配置するとともに、2つのルートの間に広がる山々森林に第6中隊を配置して防衛線の穴を埋めた。さらに後方には第41普通科連隊戦闘団から配属された1個普通科中隊と1個戦車小隊 第4戦車大隊第3中隊の74式戦車小隊 が予備として待機していた。

第5中隊長である山岸1尉は配下の3個小隊を八木山バイパスに沿って1個小隊ずつ配置していた。高麗軍がやってきたら1個小隊で敵の先頭部隊に火力を集中し前進を阻止する。そして後退して次の陣地に向かう。その間に前進してきた敵部隊を今度は次の小隊が攻撃して後退する。さらに敵が前進してきたら3番目の小隊とぶつかり…といった風に交代で敵の動きを鈍らせながら後退し、最後の陣地で集結して予備の中隊とともに高麗軍を叩きのめす。必要なら空挺団直属の予備である第41普通化連隊戦闘団を呼び出す。それが山岸の作戦であった。

そして山岸は先頭の小隊の陣地が設けられた筑穂インター前に中隊本部を置いて陣頭指揮を執っていた。なだらかな斜面に掘られた塹壕陣地は八木山バイパスと並行して走る県道60号線の両方に面していて射界の中に収まっている。道と陣地の設けられた森林の間には田畑が広がり川も流れているので、高麗軍が山岸の陣地に真正

面から攻撃を仕掛けても射撃的になるだけである。

410高地 陸上自衛隊前線観測所

日本のどこもがそうであるように、飯塚の山中にもゴルフコースがあった。福岡方面からの飯塚市街地への突入路と見られている国道201号線と八木山バイパスの間にあり、その東西には山々があってゴルフコースを挟んでいた。

東側は一带の山系の最高峰である龍王山で、その標高から615高地と呼称されていた。そして福岡方面である西側には410高地があった。ゴルフコースの縁が山頂付近まで達していたので交通の便は良く、ただし開けているので高麗空軍の動向を気にする必要がある。しかも、山頂からは国道210号線と八木山バイパスの合流点を見下ろすことができた。つまり高麗軍が福岡から飯塚に攻め込もうとすれば、必ず410高地に居る者の目の前を通らなければならないのだ。自衛隊がそこに砲兵隊の観測拠点を設けるのは至極当然のことであった。

観測所は龍王山のさらに東に配置された空挺特科大隊から配属された120ミリ迫撃砲中隊と第41普通科連隊戦闘団の特科大隊と電話網が繋がっていた。もし彼らが高麗軍の姿を見つければ、ただちにこれらの砲撃を加えることができるのだ。

十分に偽装された山頂陣地から観測員が下の様子を双眼鏡で監視していた。するとトラックの縦隊が西から来るのが確認された。観測員は片手で双眼鏡を構えたまま、すぐに横に置いてある野戦電話機の受話器を取った。

高麗のトラック隊は飯塚西側からの攻撃を担う高麗空中襲撃旅団の1個大隊の先遣隊である。彼らの任務は侵入路を発見し、本隊を導くことになる。

北九州制圧のために投入された空中襲撃旅団であるが、任務を終えて侵攻作戦を上陸した装甲部隊に譲ると彼らは北九州と福岡の占領行政の実行部隊となったのだが、今回の任務のために戦略予備に指定されていた1個大隊を投入することになった。十分に防御された敵陣地を突破するには軽装備の1個大隊では不十分であるが、与えられた任務は達成できる筈であった。

1個中隊の先遣隊は410高地の前にある交差点でトラックを停めると、降りて森の中へ進んでいった。目標は目の前に広がる山の山頂、つまり410高地である。

410高地

その様子を監視していた観測員は背筋が凍る想いをしていた。敵の侵攻路は北側でも南側でもなく中央、すなわち自分達の陣地を蹂躪して進むつもりなのだ。

「敵はまっすぐ山を突っ切る気だ。至急、砲撃を頼む」
そのリクエストにはすぐに応えられた。

筑穂インター前

山岸は北から聞こえてくる砲弾の炸裂音をBGMにして、大隊本部からの情報を検討していた。敵は軽装備の歩兵部隊で、戦車や装甲車の援護はなし。ともに飯塚を攻め落とすのに必要な戦力とは思えない。

「牽制か？」

全体像は分からなかったが、高麗軍の主攻がここでないのは間違いない無さそうであった。どこか別の場所で総攻撃が行なわれるのか、

それとも総攻撃があると見せかけて自衛隊を浮き足立たせるのが目的か。

山岸は少し考えてから自らの無意味な思考を笑った。敵の主動がどこであるかなど今の山岸にとってはどうでもいいことである。それはもつと上の人間が考えることで、現場の指揮官である山岸は自分の担当する区域に出撃した敵を撃退することを第一に考えなくてはならないのだ。

中隊の通信係りの肩を叩き、野外電話の受話器を取った。各小隊の小隊長を呼び出さなくてはならない。敵が森林を縦横無尽に進むことができる軽歩兵部隊であるならば、装甲化部隊の攻撃を想定した今の中隊の配置は無意味である。すぐに陣形を立て直さなくてはならない。

鞍手郡小竹町 戦車隊陣地

飯塚の北側には空挺団第1普通科大隊の防衛線が築かれていて、ここには第41普通科連隊戦闘団に配属された第4戦車大隊第3中隊から74式戦車2個小隊が増援として派遣されていた。北側からの主要な侵攻ルートも2つあり、それは飯塚市内を通り北九州へ流れる遠賀川沿いに進む旧来の国道200号線と新しい国道200号線バイパスである。第1大隊は2つのルートに沿って1個中隊ずつ配置し、もう1個中隊を予備として後方に置いていた。

古い方の200号線を守る中隊の陣地は飯塚の北側に隣接する鞍手郡小竹町にまで及んでいて、派遣された戦車小隊はゴルフ場の縁で森の広がる丘の上に陣取っていた。そこは遠賀川を見下ろし古い方の国道200号線と筑豊本線を射界の中に収めていて、そこを通る敵に射撃を浴びせることになっていた。

4輦の74式戦車は戦車壕の中に車体を隠し、砲塔だけを出して国道に向けていた。その上から偽装用のネットが被せられていたの

で彼らを事前に発見することは困難であった。

すると前方に配置されていた普通科中隊の前哨陣地から緊急連絡が入った。

< 敵の装甲部隊が前進してくる >

戦車の中で待機していた小隊長が車長用ペリスコープを覗いてズームしてみると、確かにK1A1戦車2輦とK200装甲車4輦が国道200号線に沿って南下してくるのが見えた。

「小規模だな。偵察部隊か？」

有線電話で普通科中隊の本部に尋ねると相手の指揮官も同意見であった。そしてとりあえず片付けることにした。

「よし戦車を狙え。あれさえ倒せば後はどうにでもなる」

74式戦車は105ミリ砲装備の戦後第2世代戦車で第3世代に分類されるK1A1戦車と戦うには分が悪かった。

「十分に引き寄せるんだ。小隊の火力を集中するぞ」

敵部隊の先頭を走るK1A1がぐんぐん近づいてくる。やがて距離300まで迫った。

「よし、今だ。撃て！」

4輦の74式戦車が一斉に主砲を放った。古い砲が相手とはいえ4門に集中攻撃され、しかも砲塔と車体の繋ぎ目や砲塔上面といった弱点を集中的に狙われたK1A1はひとたまりもない。

「各個、自由に射撃せよ」

4輦の戦車が残ったK200装甲車に牙を向けた。戦車の援護を失った装甲車など74式戦車小隊には的も同然で、周りが田んぼで逃げ場が無かったこともあり瞬く間に3輦が破壊された。1輦は土手を川岸側に下りてなんとか身を隠した。

すると逃げた装甲車が要請したのか、戦車隊の前に発煙弾が撃ちこまれて視界を塞いだ。装甲車はその間に逃げてしまった。

他の乗員たちは敵を倒したことを喜んでいたら小隊長は違った。

偵察隊はきつと本格的な攻撃の前触れに違いない。そしてこちらの防衛線が知られてしまった以上、敵はいよいよ攻撃してくるである

う。

小隊長はもうひとつの戦車陣地に移動するように命令を出した。距離にして500メートルほど南に別の戦車壕が用意されていて、ここと同じような射界が確保されていた。

直方市内 高麗陸軍第11機械化歩兵師団第20旅団司令部

イ・ピョントク大佐は幕僚たちとともに一帯の地図が広げられた机の周りに座って作戦を練っていた。予想した通り、自衛隊は頑固な陣地を築いているようだ。

「よし。迂回攻撃を試みる。旅団隷下の大隊は中隊単位で戦闘群を編成していたな？」

旅団長の問いに作戦幕僚が答えた。

「はい。全ての中隊を戦車及び装甲車小隊から成る混成中隊に編成替えを完了しております」

韓国・高麗も日本と同様に山がちな地形であるから、そのような地勢でどのように戦うかを彼らは熟知していた。大部隊が揃って戦う余地はないので、小規模な戦闘グループを幾つも用意するのが最適である。

「第201歩兵大隊には3個中隊、第202歩兵大隊には2個中隊を配備し、第201大隊は県道30号線を進み西から、第202大隊は県道62号線を進んで東から飯塚市内に侵入し、北側を守る敵大隊を孤立させるのだ。そして第203戦車大隊には4個中隊を配置し、川沿いとバイパスに2個中隊ずつ配置し自衛隊を牽制するとともに包囲が完了した時点で突撃するのだ」

幕僚達からは作戦についてなんの異論もなかった。

「よろしい。ただちに準備にかかれ」

かくして後に飯塚攻防戦と呼ばれる戦いの火蓋が切られたのである。

久々の投稿です。更新停滞している間にいろいろなことがありましたね。いくつか触れておきましょう。

沖縄名護市長選で基地受け入れ反対派が勝ちました。もし政権交代前であったならば民主党にとって自民攻撃の良い材料になったでしょうが、今回は逆に追い詰められた結果となりました。というか、なんでこんな微妙な時期にわざわざ辺野古移設反対派の候補に推薦なんか与えたのか？傍観してれば良かったのに、推薦なんか与えたせいで余計に不味い状況になってると思うのですが。

辺野古移転問題に関してもう1つおかしいと思うのが、その議論に際して「地元の負担軽減」「アメリカとの関係」という話ばかりで「じゃあ、なんで基地を辺野古につくるんだ？」という話が全然聞こえてこないように思うのですが。そしてアメリカの現在の戦略上、現状維持か辺野古移転以外の選択肢はありえないわけで。代替候補地に「グアム」とか「硫黄島」とか出てくるところを見ると、そういった議論を与党内で全然やってないのだなあとつくづく思うわけです。地元の皆さんには酷な話でしょうが、日本の安全保障に深く関係している軍事問題なのだから軍事的視点で見ずにどうするのかと？

それに関連して思うこと。つまり「対等な日米関係」とやらです。民主党のマニフェストにも明記され、左右両陣営から歴代自民政権への批判としてよく使われるフレーズなのですが、そもそも「対等な日米関係」とは何ぞや？と思うわけです。

辺野古移設決定も自民政府のアメリカ追従の如く言われますが、アメリカの戦略上、つまり台湾防衛のために沖縄から離すわけにもいかず、それが日本の安全保障にとっても重要、台湾を取られた

らシーレーンが容易に遮断されますよ。ならそれを受け入れるのも政府にとって当然の選択でしょう。そもそも自民政府がアメリカの言いなりなら交渉に10年以上もかかるわけがないのです。

ともかく、じゃあ「対等な日米関係」とはなんなのかと？どうも日本人が日米関係を語る場合は被害者意識が前面に出てしまっていて、対等な関係について深く考察がなされていないように思うわけです。また半世紀以上も他国軍が居座って、地元の住民は多大な被害を受けているから仕方が無いといえば仕方が無いのかもしれない。しかし在日米軍は日本の防衛だけではなく東アジア全体の安全保障において重要な役割を果たし、かつ南アジア・中東の安全保障とも強く結びついている。そういう性質の部隊で、しかも日本はその恩恵を享受して繁栄を謳歌している。そういう立場ですから、そのアメリカと対等になるといって「アジア全体の安全保障についてアメリカと同等の責任を負う」ということになると思うのですが。

昨日、次期輸送機C-Xが初飛行。今後も増えるであろう海外派遣で重要な役割を担う機体です。航空自衛隊の最前線で戦うまさに新時代の象徴的な機体。これまでいろいろとありましたが、これからは順調に開発が進むことを願っています。

一二・山中の死闘

首相官邸

高麗軍の攻勢により烏丸首相は衆院厚生労働委員会への出席をキヤンセルして首相官邸に籠らざるをえなかった。民主党はこのことを大いに批判してマスコミも同調するだろう。彼らはその瞬間だけ、まるで北九州有事など発生していないかのように振舞うのだ。

「それで現状は？」

中山防衛大臣は首を横に振った。

「はつきり言いまして、高麗軍が攻撃をしてきたという以外はまだ詳細は分かっています」

烏丸はその掴み所の無い報告に自衛隊がなにか隠し事をしているのではないかとも思った。烏丸は社会民主党出身で今でも護憲派なのだ。が、これ以上追求してもどうしようもない。話題を変えることにした。

「官房長官。それで民生党の切り崩しの方がどうなっているんだ？」

「なんとかかなりそうです。今夜、会合を行ないます」

菅井は機嫌が良さそうであった。

背振山地

飯塚市で高麗軍の本格的な攻勢が始まろうとしている頃、第19普通科連隊はこの日の戦闘は最終局面に入ろうとしていた。

高麗海兵隊が偵察に派遣した1個小隊が自衛隊の防御陣地と膠着状態に陥ると、韓国側の指揮官は山中に中隊主力を進めた。後方に迂回して自衛隊の陣地を包囲しようと企んだのだ。

高麗中隊の主力は慎重に森林の中を進んでいたが、その警戒は木々の間に張られているであろうワイヤートラップに向けられていて、

自衛隊が持ち込んでいたより高度なセンサーシステムには注意が向けられていなかった。

「止まれ！」

先頭を進む歩兵分隊が先頭の兵士の掛け声によって一斉にその場に伏せた。先頭の兵士は銃剣を出して、足元に張られたワイヤーを切ろうとしていた。その様子を見張る赤外線センサーが存在するとも知らず。

金立公園 第4師団司令部

「センサーに感あり」

機動妨害システム担当のオペレーターが叫んだ。

「敵か？」

内海師団長の問いにオペレーターは首を横に振った。

「まだ確認できません。現在、現地部隊に照会中」

内海は不完全な状況の自分の部隊に舌打ちした。本来なら機動障害システムは陸上自衛隊のC4Iシステムである一基幹連隊指揮統制システム《Recs》と接続することにより、センサーが目標を感知したことを自動的に現地部隊に通告するとともに、味方の位置情報から敵味方識別までこなすことができるのであるが、Recsの方が導入されていない現在の第4師団では人力で代替しなければならぬ。

「防衛線から入電。目標は味方ではありません。攻撃します」

背振山地

丁度、ワイヤーが取り除かれた時であった。

「よし、安全を確保した……」

除去を担当した先頭の兵士は振りむいて報告をしようとした瞬間、横から衝撃を受けた倒れた。彼を襲ったのは数十個のパチンコ玉ほどの金属球であったが、火薬により加速されて拘束で突っ込んできたので高麗兵を防弾着の上からでも容易に打ちのめした。彼がこの世で最後に見たのは、自分と同じように仕掛けられた指向性散弾によりボロボロになった分隊の仲間の姿であった。

その後方に居た中隊長は目の前の出来事にぎよつとしていた。しかし、彼は目の前の出来事がクレイモアなどの在来型の指向性地雷によって引き起こされた者だと勘違いをした。日本が持つ高度なセンサーシステムと結びついた機動障害システムについても事前に説明を受けていたが、悲惨な光景を目の前にして自軍が持たない兵器については考えが及ばなかった。

「ワイヤーに注意しろ！あと、もしかしたら周りに日本兵が潜んでいるかもしれない」

先頭に分隊が自らクレイモアのワイヤーを引っ張ったか、近くに潜む自衛官が手動で爆破させたなら適切な指示であったかもしれないが、この場合はまったく意味が無く、むしろ警戒すべき対象から注意を外すことになった。

高麗兵は回りに弾丸をばら撒きながら前進した。そうすれば近くに潜んでいるかもしれないクレイモアの起爆装置を握る自衛官を威圧する事が出来るかもしれない。しかし生憎ながら起爆スイッチを握っている者はずっと彼方の安全地帯に居た。

再び指向性散弾が炸裂した。何人か高麗兵の呻き声が聞こえてくる。さらに再び炸裂。

「止まれ！その場から動くな！」

中隊長は堪らず命じた。兵士たちはその場に伏せると周りの様子をじっと見つめて敵の姿を探したが、どこにも見られなかった。

その300メートル先には自衛隊の陣地が築かれていて、そこでも第19普通科連隊第1中隊第1小隊の面々が息を潜めて様子を見ていた。小隊長は有線電話の受話器を手に持って誰かと話していた。

「前方300メートルですね。分かりました。前進して蹴散らしてやります。了解。交信終わり」

小隊長は受話器を戻すと配下の小銃班の班長たちを集めた。

「これより前方の高麗兵を掃討する。突撃支援射撃の終了とともに突撃する」

やがて迫撃砲が飛んでくるヒュルヒュルヒュルという音が聞こえてきた。さらに前方で炸裂音がして、やがて止んだ。

「小隊前進用意！前へ！」

第1小隊の面々は小隊長の怒声とともに一気に陣地を飛び出した。

数的には優勢であったのは高麗海兵隊であったが、機動障害システムにより動きを封じられ、勢いを削がれたこともあって数的な優勢を生かせずに居た。

「撤退！撤退！」

迫撃砲の攻撃と第1小隊の突撃に堪らず高麗中隊長は撤退を命じた。たださすがに高麗側も崩壊するということなく、分隊単位で相互支援をしながら比較的軽傷の負傷兵を引き摺りながら整然と後退していった。

なかなか巧みに後退していくので第1小隊は遂に高麗中隊を殲滅することができず、負傷者を出すことになった。幸い死者は出な

った。第1小隊は逃走する高麗中隊に対する追撃を諦め、衛生隊を呼んで双方の負傷者を後送した。当然、残された重傷の高麗負傷兵は捕虜となった。

国道385号線 防衛線

道に沿って進み、自衛隊の防衛線と膠着状態となった高麗の先遣小隊は山中の中隊長から撤退命令が届いたが、その手順は山中より些か複雑であった。なにぶん路上の高麗兵は陣地の中の自衛隊から一方的に射撃を受ける状況にあるのだ。

中隊長は自らの安全を確保すると、より上級の司令部に支援射撃を要求した。まず発煙弾が撃ちこまれた。

桜井は視界が真っ白になるのを見ると、すぐに塹壕内に屈んで背囊から暗視装置を取り出した。

桜井は狙撃レンジャーということで個人用暗視装置JGV S - V9を支給されていた。J S V S - V9は従来型の暗視装置であるJGSV - V8の後継として試験的に配備が始められた新型で、アメリカ軍のAN/PSQ - 20の自衛隊バージョンで従来の微光増量方式とパッシブ赤外線方式を併用しているのが特徴だ。

それを急いで取り出すと、すぐに鉄帽に取り付けようとした。パッシブ赤外線方式の暗視装置は相手の発する熱を捉えるタイプなので昼夜関係なく煙を通して目標を追うことができるという利点があった。

すると身体を衝撃が襲った。

「砲撃だ！伏せる！」

小隊陸曹の砺波の叫び声が響いた。高麗砲兵が煙幕を張ると、今度は自衛隊の動きを妨げるために陣地に向けて榴弾を撃ちこんでき

ただ。

桜井は砲撃が収まるのを待つて塹壕から半身を出し、高麗兵に銃口を向けた。1人だけ、桜井に背中を向けて立ち去ろうとする兵士が見えた。桜井は躊躇なく引き金を引いた。胸のあたりに銃弾が当り、高麗兵は倒れた。遠くからディーゼル音が響き、残った戦車が後退していることを報せた。

「撃ち方止め！撃ち方止め！」

古谷の叫び声が陣地に響いた。だが銃声は止まない。

「撃ち方止めと言ってるだろが！」

続いて砺波の怒鳴り声が響いた。誰かが銃撃を続けているらしい。やがて煙が晴れると破壊された戦車と高麗兵の死体だけが残された。自衛隊側でも砲撃により2人の死者と3人の負傷者が出た。そして最後まで銃撃を続けていた者の正体も明らかになった。少々過激な言動が気になる矢部陸士長だ。

「貴様、抗命か！」

「いや、そんなつもりは。ただ1人でも多く奴らを……」

砺波に弁解している矢部の姿を眺めつつ桜井は周囲を警戒していた。

「桜井！」

そこへ路上の高麗軍の遺物への検分を終えた古谷がやってきて桜井の肩を叩いた。

「奴を撃つたのはお前だったよな？死んだのは小隊長だ。よくやった」

つまり高麗軍が税金を使って育てた貴重な人材を1人永久に葬ったということだ。

「ありがとうございます」

桜井は形だけの言葉を発した。後味の悪さはこれまでよりも薄かった。相手が背中を見せていて、顔を直接見なかったためだろう。

それから古谷は苦い表情をした。

「小隊を再編成しないとな」

先ほどの砲撃による被害によつて第2小隊の実員は20人を割つて15人になつていた。これでは3個小銃班を維持できない。ともかく第19普通科連隊正面の戦いは終わった。

一一の二・空挺団の苦闘

飯塚西部山中

山岸は高麗軍の動きを予測して新たな配置に動いた。最新の情報によれば高麗軍部隊は大隊規模の軽歩兵部隊で砲兵観測隊がいる410高地に向かって進んでいるという。しかし、その稜線を超えようとすれば第6中隊の激しい砲火に直面するのであるから迂回を試みるに違いない。

もし第5中隊の戦区に逃れるとすればどう行動するか。道路に出ることを避けて山中を進むであろう。ルートは410高地とその南にある461高地。その下に八木山バイパスの筑穂トンネルやJR篠栗線の篠栗トンネルの通る山の間を抜けて東に出る。

山岸は地図を見て、その先になにかがあるかを確認した。池があり、そこから小さな水路が森の中を通り川に出る。山岸はそこに陣を敷くことを考えた。

水路を挟む丘に1個小隊を分散して配置し、残りの小隊は迂回を防ぐために水路の南北に広がる林の中に配した。

そこに潜んで暫く待つていると何も知らない高麗軍がやってきた。山岸は各小隊に命令あるまで待機するように命じて、相手を観察した。目の前に現れた高麗兵は一個分隊程度で、どうやら斥候のようである。殲滅するのは容易いが、山岸はより大きな獲物を狙うことにした。斥候が安全を確認すれば、やがて本隊がやってくる。そこへ水路の小隊が攻撃して足止めし、残りの小隊が南北から挟撃するのだ。中隊で大隊に挑むことになるが、奇襲の効果と地の利が味方してくれる。

さらに徹底的な打撃を与えるために、ゴルフ場を守る第6中隊と予備となっている第41普通科連隊からの配属中隊の出勤を要請した。これで奇襲効果に加えて数的にも優勢になる。

その時、林の中に銃声が轟いた。高麗兵の1人が倒れて、残りの

面々が林に向かって銃撃をしている。

「応戦！撃ち方始め！」

待機していた自衛隊員たちが一斉に射撃を始めた。また何人かの高麗兵が倒れ、残りが逃げ帰っていく。その光景を見ながら山岸は毒づいた。敵にこちらの存在が気づかれてしまい、計画が台無しになった。

「誰だ！最初に撃つたのは！なぜ撃つた！」

山岸は無線手から携帯無線機の受話器を奪い取って叫んだ。しばしの沈黙の後、返事が返ってきた。

<すいません。うちの部下が…>

話を聞くと、若い陸士がすぐ近くまでやってきた敵兵の姿を見て思わず引き金を引いてしまったようだ。

「よし。済んだことは仕方が無い。待機しろ」

事情が分かり、落ち着きを少し取り戻したところで山岸は今後のことを考えた。奇襲に失敗した以上、大隊規模と見られる敵部隊と正面きつてやりあうのは分が悪い。他の中隊に増援を要請するべきだと結論付けた山岸は再び受話器に手を伸ばした。

その時、空から空気を切り裂くような音が聞こえてきた。

「伏せる！」

次の瞬間、山岸らの周りで次々と爆発が起こった。高麗軍の砲撃である。木々が次々となぎ倒され、自衛隊員たちの悲鳴が聞こえる。砲弾の炸裂で土が巻き上げられ、それが口の中に入りジャリジャリするのを山岸は感じた。そして冷静な自分に驚いた。

周りの状況に目を凝らすと、爆発で地面が吹き上がるのが見えた。次に直撃を受けた大木が弾けとぶ光景。そして爆発のむこうに消えた部下。この時、山岸は目の前の光景がまるで映画やテレビの中で繰り広げられる出来事のように感じていた。音は何も聞こえず、周りの様子がスローモーションのように見えた。

やがて砲撃が止み、山岸の意識も目の前の現実に取り戻された。傷ついた隊員たちの呻き声が聞こえる中、山岸は立ち上がってまわ

りの状況確かめた。さつきまで生い茂っていた木々が無くなっていた。多くの木が途中で折れて倒れている。

「動ける者はいないか！」

山岸が声を張り上げると何人かの隊員が立ち上がった。しかし、それほど多くは無かった。無事に動ける隊員は小隊の3分の1程度で、その中にも治療が必要な傷を負った者がいた。

その時、水路の北の方から銃声が聞こえてきた。

「一体、なにがあつた！無線手、報告はないか？」

そう言つて隣に居た筈の無線手に目を向けると、そこは惨状が広がっていた。無線手の身体はズタズタになり、首から上は無くなつていた。

「畜生！」

山岸は無線機を遺体から剥ぎ取ると、作動するか確かめた。幸い無線機は正常に作動した。

「状況を報告せよ！」

< 敵が突然、目の前に現れました。今、応戦中です >

北を守備する小隊の指揮官が答えた。

< 我々は敵の意表を突いたようで、圧倒しています >

どうやら高麗軍は山岸らを側面から攻撃すべき迂回したところ、北の小隊と不意に遭遇してしまつたようである。しかし、相手はやがて動揺から立ち直り組織だつて攻撃に移行する筈だ。となれば数で劣る小隊は危うい。

「よし。なんとか敵を食い止める。これより包囲攻撃をしかける」

山岸は水路の小隊の残存兵力と南の小隊をあわせて、北の小隊に阻止されている高麗軍を側面から攻撃することにした。

「よし。前進だ！」

水路の小隊の生き残りが山岸とともに動き始めた。山岸はその中に明らかに軽くない傷を負った者の姿を見つけた。

「君、なにをやっている！すぐに後ろに下がれ！」

だが傷を負つた隊員は首を横に振つた。

「行かせてください。まだ戦えます」

「ダメだ。君を攻撃に参加させるわけにはいかない。残れ。これは命令だ」

山岸は断固たる口調で言った。部隊は既に次なる戦闘にむけて動き出したのであるから、説得している時間は無かった。

「しかし、私は」

「命令だ。それとも抗命するかね？」

山岸の厳しい言葉に手負いの隊員は渋々ながら従った。

林の中を進んでいくと銃撃に加えて爆発音が聞こえてきた。友軍の迫撃砲が高麗兵を攻撃しているようである。さらに味方の特科部隊と高麗の砲兵隊が互いを撃ちあってもいるようだ。

「迫撃砲射撃が終わるとともに突入する」

山岸は指示を出し、中隊主力を横一列に並ばせて待機させた。その間に無線で増援に呼んだ中隊の現状を確認したが、到着には暫く時間がかかりそうであった。

「どこまでもたせられるかな」

もはや奇襲も地の利もはや失われた。

そして、迫撃砲の音が止まった。

「呐喊！」

自衛隊員たちは一斉に駆け出した。迫撃砲のためか森は煙に包まれて、視界はほとんどなかった。自衛隊員たちはその中を進みつけた。すると目の前に突然、高麗兵が現れた。

「撃て！」

89式小銃が乱射される。何人かの高麗兵が倒れた。しかし高麗側も負けじと撃ちかえしてくる。何人かの自衛隊員が倒れた。

「木に隠れる！」

山岸は木の影に身を隠すと、相手の様子を確かめた。高麗側も木

の影から銃を突き出して乱射している。かくして森の中で壮絶な銃撃戦が始まった。

しかし、相次ぐ不意の遭遇と迫撃砲により大きな被害を受けたとはいえ、依然として兵力では高麗側に分がある。第5中隊は次第に圧倒されつつあった。

「増援はまだか！」

山岸は次々と倒れている部下の姿を見て叫んだ。

そのとき、新たな銃声が聞こえてきた。増援部隊だ。

一三・ヒトマル無双

宮若市 脇野橋交差点

空挺団第3普通科大隊は第1大隊と第2大隊の間に入り必要に応じて後方に浸透して後方連絡線を遮断するという任務が与えられていた。そしてその第3大隊の監視哨の1つが脇野橋交差点を見下ろす森の中にあつた。その交差点は直方市から南下してくる道路が飯塚市街地へと繋がる県道30号線と接続する地点であつた。

「高麗軍の活動を確認。中隊規模の部隊が南下してきた…いや、さらに別の中隊規模の部隊が続いている…」

監視員は市街の空挺団本部まで引かれた電話回線に向かって見たモノをそのまま報告した。

飯塚市 市民公園

第4戦車大隊第1中隊は稼働戦車数が一時7輦まで下がっていたが、なんとか現地で修理ができた3輦が復帰して10輦に回復していた。それでも定数に比べると丸々1個小隊を失つたことになる。中隊長は中隊を2個小隊に再編して、そのうち1個小隊を氷室に任せることにした。

第1中隊は第41普通科連隊戦闘団に配属された。戦闘団は飯塚市民公園をはじめとした市内各地の分散して空挺団司令部からの命令を待っていた。

<サクラ21、こちらサクラ61>

サクラは第4戦車大隊第1中隊に割り当てられたコールサインで61は中隊長車、21は氷室車を示す。

「サクラ61、こちらサクラ21。送れ」

氷室が返答をしているうちに、車長用デジタルディスプレイに地

図が映された。

<高麗軍が動き出した。ただちに迎撃に向かう。敵の予想現在位置と迎撃予定地点を送る>

ディスプレイの地図上に敵を示す赤い記号と自軍を示す青い記号が現れた。

「分かりました。ただちに行動を開始します」

<了解、交信終わり>

氷室が指揮する4輦の戦車小隊が一斉に動き出した。

飯塚市内 中交差点

飯塚の盆地に入って最初の交差点で先頭に行く中隊が県道30号を進む大隊主力から分かれて左に曲がり、敵の防衛線がある北に針路を向けた。高麗大隊は3個中隊をそれぞれ遠賀川に並行して200メートル程度の間隔で敷かれた3つの道路を別々に前進させるつもりだった。

次の交差点で別の中隊が左に曲がり、最後の中隊は川沿いの国道200号線とぶつかるT字路を左に曲がった。かくして3つの中隊が横に並んで進む事になった。

飯塚市内 私立中学校敷地

氷室の10式戦車は地元の中学校敷地内の物陰に隠れ、車長用ペリスコープだけを出して監視を行なっている。

遠賀川に面する中学校からは、敵の主要な進撃ルートになると見られた対岸の国道200号線をよく見ることができた。また周辺は畑が広がっているので、川沿いの道だけでなくずっと奥にある山沿いの道まで見通すことができた。

山沿いの道を進む中隊が最も先に進み、真ん中の道を進む中隊がそれに続く。そして川沿いの国道200号線を進む高麗軍中隊の姿も確認した。どの戦車も別々の方向に砲口を向けて、自衛隊の奇襲攻撃に備えている。

「よし。全車。射撃用意！」

氷室は車輛間データーリンクを使って指揮下にある戦車3輛に目標を割り振った。これで同じ目標を撃って無駄弾を出すなんてことにはならないだろう。そして氷室は自らの戦車の目標を再びペリスコープで評定した。真ん中の道路を進む中隊の先頭3輛。それを連射で粉碎する。ロックオンをすれば、後は撃つだけである。最初に叩くのは、こちらに砲を向けている戦車である。

「全車、撃ち方はじめ！」

4輛の戦車が一齐に飛び出した。主砲は予めロックオンしてある戦車に自動的に向けられ、目標戦車の動きにあわせて自動追尾する。「撃て！」

既に装填済みの主砲の発射ボタンを砲手が押し、44口径120ミリ滑腔砲から新型の徹甲弾が放たれる。

口径長こそ90式戦車の主砲と同じであるが、10式に搭載されている主砲はずっと進歩したものである。例えば従来の戦車には装薬の爆発によつて生じる有毒ガスが車内に入らないように外に逃がす排煙機を砲身に備えている。しかし、それでは装薬の爆発力が一部逃げてしまうことになる。そこで10式では排煙機を廃止し、発射後に砲尾から圧縮空気を噴射して砲口から有毒ガスを逃がすという形式を採用している。だから装薬の爆発力は砲弾に集中し、従来と同じ砲弾でもより威力が上がるのである。

そして砲弾の方も装薬をより高威力にするなどの改良が施された新型のAPFSDS弾を搭載しており、その威力はドイツのレオパルド2A6戦車が装備する55口径長砲身120ミリ主砲に勝るとも劣らない強力な戦車砲なのである。

最初の餌食となったのは主砲を進行方向右に向け、川のある方向

を警戒していたK1A1戦車である。氷室戦車の一撃を受けて瞬間に沈黙した。

その前後に居たK1A1戦車は慌てて敵を見つけ出し反撃しようとしたが、氷室から見るとその反応は鈍く見えた。直ちに次弾が装填され、10式は90式に比べ装填速度も向上している。既にロツクオン済みの第二目標に砲口が向けられた。

「撃て！」

第1射からものの数秒後であった。ようやくこっちに砲口を向けた第二目標であったが、10式の放った砲弾がその瞬間に命中した。すぐに次の目標に移る。

「撃て！」

氷室が第3射を命じるのとほぼ同時に、第三目標は氷室車にむけて発砲することができた。川の上で両者の砲弾が交差する。しかし精度は予めロツクオンをした上で自動追尾して攻撃した氷室の砲弾の方が、高麗戦車が慌てて撃った弾より正確であった。氷室の第3射は見事に砲塔と車体の隙間に滑り込みK1A1戦車を粉碎したのに対して高麗の撃った弾は氷川の10式の固い正面装甲を掠って後ろに飛んでいった。

氷室は戦車を隠れていた物陰に戻すと、直後に高麗軍残存戦車から放たれた砲弾が周辺に命中した。学校の施設が滅茶苦茶になったが、氷室戦車にはなんの被害もなかった。物陰からまたペリスコープだけを出して目標とした戦車を覗いてみると3輦のK1A1戦車が頓挫しているのが見えた。

データリンクを通じて部下の戦車からも戦果報告があった。4輦の戦車がそれぞれ3連射した結果、11輦の戦車を撃破した。1個小隊で1個中隊弱の敵を撃破したのだから大したものである。

「よし。次の陣地に移動する」

県道449号線

氷室小隊が高麗大隊に第1撃を浴びせている頃、中隊長と副中隊長の乗る10式戦車は県道449号線を北上していた。彼らの目的は国道200号線に到達後に高麗部隊は北上するだろうと考えられたので、その行く手を遮ることであった。

氷室小隊の戦果・行動はデータリンクによつてただちに中隊長の知るところになった。さらに氷室小隊長からも無線で直接の報告があった。

<現在、敵戦車11輦を撃破しました。交戦を継続します>

「よし。敵の規模はどうだ？空挺は1個大隊と言っていたが」

<私が把握している限りは、その情報に誤りはありません>

「よろしい。阻止を継続せよ。交信終わり」

<了解、オーバー>

通信が切れると中隊長はもう1つの小隊の指揮官に通信を入れた。もう1つの小隊は高麗部隊が国道200号線を南下した場合に備えて第41普通科連隊の1個中隊に配属され、その南方で防衛線を張っていた。増強普通科中隊は普通科連隊本部から“高麗軍が北上したならば、ただちに北進して背後から強襲するとともに退路を断て”という命令を受けていて、そのタイミングを指示するのが戦車中隊長の役目であった。

「よろしい。ただちに予定通りに行動を開始してくれ」

通信を切ると中隊長は現在の状況を分析してみた。主功はおそらく3個大隊編制の1個旅団である。そして1個大隊は西から現れた。残りの部隊は？

空挺団司令部も同様のことを考えていた。残りの高麗部隊はどこにいるのか？

気がかりだったのは国道201号線を通つて西側から迫っている高麗部隊であった。第2普通科大隊が応戦中で、大隊規模の軽歩兵

部隊である報告を受けていた。もしかしたら彼らが残りの機甲部隊の露払いを勤めているのかもしれない。戦線は膠着状態にあるという。となると敵のさらなる攻勢は西側から来るのか？

司令部の幕僚の中には第1普通科大隊に空挺団に残る予備兵力を与えて防備を強化すべきであると主張する者もいた。だが団司令はそれを受け入れなかった。これといった根拠があつたわけではないが、勳が“ 主功は西から来る ” という考えを否定していたのである。むしろがら空きになっている東側に不安を感じていた。

ただちに情報収集の徹底を命じた。飯塚の北を守る第2普通科大隊には北へ斥候隊を派遣するように命じ、また司令部直轄の偵察小队と空挺教育隊から選抜された臨時レンジャー部隊にはがら空きになつてゐる東方の偵察を命じた。さらに航空自衛隊にも航空偵察を要請した。

それとともに東側に対する防備も固めることにした。第2普通科大隊のうち後方で予備として待機している中隊に東の福智町に伸びる県道62号線の防衛を命じ、また第41普通科連隊戦闘団に予備として残つてゐる普通科2個中隊には国道201号線を田川市方面に進出させて防御陣を敷かせたのである。

自衛隊が高麗軍の行動を探り、東西からの挟み撃ちを警戒していた頃、その東側からの攻撃を担う高麗陸軍第202大隊は迷走していた。第202大隊は田川直方バイパスを南下し、宮馬場という交差点で右折し、あとは県道62号線を西に進むだけなのだが、あるうことか先頭に行く小型車が右折すべき交差点を通り過ぎてしまつたのだ。

間違いに気づいた高麗兵たちは車輛縦隊を停止させると、車を降りて周辺を警戒しつつ正しい道を探した。

先頭では大隊司令部の一行がハンゲルで書かれた地図と標識を見比べていたが、標識の地名は当然ながら漢字で書かれているので、

うまく対照することができずにいた。日本語を解す情報将校も配属されていたが、やはり難儀しているようであった。

「畜生、誰なんだ漢字教育を廃止しようと言ったのは」

韓国初代大統領の李承晩である。韓国はかつて漢字とハングルを併用していたが、第二次大戦の終結とそれにもなう光復　つまり日本からの解放　の際に民族主義的見地から漢字教育を廃止したのである。そしてその弊害が思わぬところまで出ることになったというわけだ。

「こうなったら誰かに尋ねますか？」

情報将校が大隊長に提案した。大隊長はかつてあるNATO軍士官がソ連軍の演習を視察した時に逸話を思い出した。演習中に道に迷ったソ連軍部隊がそのNATO軍士官に道を尋ねてきたという。しかしここには視察中の自衛隊幹部などいない。

「誰にだ？」

「誰でもいいじゃないですか？」

周りには一帯の住人らしき人々の姿が見えた。彼らは距離をとりつつ高麗軍部隊を眺めている。戦時中の敵国部隊相手にも野次馬根性をはたらかせているらしい。

「そうだな」

一三・ビットマル無双（後書き）

某大型電子掲示板と某T-72神教本殿でTK-Xに関する記事、噂を見まして。私自身、90式を小型化してデータリンクを搭載したくらいだろう程度の認識だったのを見事に粉碎され、マジぱねえってことになりました。というわけで、今回はそのTK-Xに無双をさせてみた、と（笑）

一四・続ヒトマル無双

氷室小隊の面々は例によって障害物に隠れて、そこからペリスコープだけ出してロツクオンをし、ヒット・アンド・ウェイ攻撃を仕掛けるという作戦を繰り返して、高麗軍に打撃を浴びせた。

さすがに奇襲効果が薄れ、一撃で1個中隊分撃破というわけにはいなくなっていたが、高麗軍大隊は混乱状態になっていた。

「撃て！」

氷室は6輛目のK1A1戦車を撃破した。小隊で合わせて18輛。残りは10輛。4輛の戦車による戦果と考えれば凄まじいものである。

しかし氷室小隊も無事では済まない。2輛が被弾し、1輛は戦闘を継続しているが、1輛とは交信が途絶え、データリンクも切断されている。

だが氷室には戦果を喜ぶ事も、仲間の犠牲を悲しむ事もできなかった。戦闘に必死だったのだ。10式は極めて優れた戦車であるが、戦闘とは様々な要因によって結果が決まるもので、気を抜けるものではない。

するとモニターに友軍を示すシンボルが現れた。もう1つの10式小隊とそれが配属された普通科中隊が高麗軍を背後から強襲したのだ。

<氷室！十字砲火だ>

「了解」

相手の小隊長から通信が入った。厳密には相手の小隊は普通科中隊に配属されたのであるから普通科中隊長の指揮を受けている。だから戦車中隊の指揮下にある氷室小隊と直接交信するのは指揮系統の点から好ましくないのであるが、その問題は状況にあわせて柔軟に対応することとなった。

データリンクで結ばれた7輛の戦車はそれぞれに目標を割り振っ

た。そして合図で一斉に高麗軍の後ろと横から攻撃を仕掛けるのである。

増強普通科中隊が戦車小隊を先頭に南から県道30号線に突入した。北には田畑が広がり、高麗軍戦車と装甲車が走り回っている。戦車小隊は道から外れて田畑に突入して。

一方、遠賀川対岸の氷室小隊も物陰から一斉に飛び出した。
「撃て！」

7輦の戦車の一斉射撃が残る高麗軍戦車に襲い掛かる。特に対岸の氷室小隊に目をとられていた高麗戦車隊にとって背後からの襲撃はまいったくの奇襲であった。放たれた7発のAPFSDS弾の全てが見事に目標を捉えた。

「次弾、HEAT-MP（多目的対戦車榴弾）。目標、装甲車」
残った戦車はもう1つの小隊に任せて氷室小隊は歩兵部隊の掃討に移った。装甲の薄い装甲車相手に強力な徹甲弾を使うのはもったいないのだ。

HEAT、つまり対戦車榴弾は化学エネルギー弾で、かつてのバズーカやパンツァーファウストなどで知られる成形炸薬弾を戦車主砲に転用したものである。火薬に円錐形の凹面を設けることで爆発エネルギーを一点に集中し装甲を貫通する成形炸薬弾は、威力を弾体の重量と速力に依存する徹甲弾に比べて目標との距離に関係なく高い貫通力を発揮するという利点があるが、近年は複合装甲の発達によって効果が低くなってしまった。それでも余剰エネルギーを利用して対装甲車輛攻撃以外にも使用できるように改良した多目的対戦車榴弾はAPFSDS弾とともに現代戦車の標準的な搭載弾薬となっている。

「撃て！」

標的になったK200装甲車が炎上した。中から炎に包まれた人

らしきものが飛び出てきたが、氷室は見なかったことした。

ペリスコープを覗いて新たな目標を探していると、データリンクで送られて情報がデジタル画面に表示された。家の陰に戦車が1輛居る。

<氷室、すまん。装填装置に問題が発生した。代わりにやってくれ、相手の小隊長から通信が入った。>

「了解」

氷室はペリスコープを対岸のある家に向けた。その家の裏に戦車が居る筈である。

「砲手、照準よこせ」

10式戦車は90式戦車と同様に砲手だけでなく車長自ら主砲の照準をすることができると言われる。ボタン一つで射撃管制装置が車長のペリスコープに接続されるのだ。

照準が砲手から車長にオーバーライドされ、砲口が家に向けられる。データリンクから得られる情報では、家の裏に戦車が居るはずだから、今射撃しても家越しに命中して撃破できるであろう。しかし氷室は出来る限り街を壊したくなかった。

すると氷室から見て家の右側から戦車の後部が見えてきた。戦車は砲塔を後ろ向きにして北へ進んでいるようだ。南から攻めてきた増強普通科中隊に主砲を向けつつ、後退しているのだ。

「撃て！」

主砲から発射されたAPFSDS弾は氷室の狙いどおり砲塔と車体の間に入り込んだ。

氷室は照準を砲手に戻してペリスコープで新たな目標を探した。しかし見当たらなかつた。データリンクは残存する高麗歩兵を普通科中隊が戦車小隊の支援の下で掃討している様子を伝えてくるが、敵の戦闘装甲車輛の存在を教えてくれない。戦闘は終わったのだ。少なくとも氷室の戦闘は。

氷室はハッチを開けて、砲塔の上に頭を出した。対岸にいくつもの黒煙が立っているのが見えた。それからまた砲塔内に顔を引っ込

めると、被弾したらしい僚車のところへ急いだ。

データリンクの最後の送信位置を元に移動すると撃破された戦車を見つけた。操縦手が車長を路上に寝かせて手当てをしていた。10式戦車は砲塔側面に十字の穴 APFSDS弾には弾道を安定させるために翼が取り付けられているので、そのような跡になる。が開いていて、そこに砲弾が貫通したのが分かる。砲手の姿が見えなかった。

「大丈夫か？」

氷室は戦車を降りると手当てをしている操縦手に駆け寄った。車長は意識を失っているようであった。

「なんとか大丈夫です」

「砲手は？」

氷室の問いに操縦手は首を振った。

「分かった。すぐに後送できるように手配しよう」

氷室がそう言った時、氷室の戦車から砲手が顔を出した。

「3尉！中隊長から通信です！」

それを聞くと氷室は自らの戦車に駆け戻った。砲塔に登って自分のヘッドセットを取り出した。

<そつちは片付いたな？>

相手は中隊長であった。

「ええ。今、普通科中隊が掃討中です」

<よし。氷室、お前の小隊は俺のところへ来い。敵が迫っている>

ようやく正しい道を見つけ出した高麗軍第202大隊は県道62号線を西に進んでいた。しかし、その動きは第2普通科大隊の放った斥候隊に発見されたのである。隠れて第202大隊をやり過ごした斥候隊はその情報をただちに報告したのである。

県道62号線は小さな山々を越える道で第202大隊の先頭を行

く戦車が一番の高所に達しようとしていた。先頭のK1A1に乗る戦車兵は緊張していた。稜線を超える瞬間が戦車にとって一番危険な瞬間と言える。地形のために視界はあまり利かず、稜線上に頭を出した瞬間にドカンとなりかねない。大隊長は待ち伏せを警戒して十分な偵察と砲兵の支援射撃をしようとも考えたが、奇襲効果を重視する旅団司令部に却下された。

自衛隊戦車中隊長は愛車の10式戦車を簡易な擬装を施された道路脇の陣地に身を潜めさせて、稜線上に敵が現れるのを待ち構えていた。中隊長車と副中隊長のたった2輦による迎撃であるが、相手の戦車も道路上では2列に並んで行動しなくてはならないから、中隊長車と同時に交戦できるのは精々2輦程度で対等な戦いができる。すると稜線の向こうから砲身がニョキッと出てきて、やがて砲塔が姿を現した。

「K1A1戦車だ！」

高麗軍のK1A1がいままさに稜線を越えようとしている。しかし、ここでもう一つ、稜線における作戦の問題を晒す事になった。それは地形の特性上、稜線を越えて下り坂に踏み入れる瞬間に無防備な車体下部を晒し、さらに下り坂では装甲が比較的薄い上部を正面に見せることになる。稜線を超える戦車は敵に弱点を晒してしまうのだ。中隊長もそこが狙い目であった。

「撃て！」

中隊長車の放ったAPSFDS弾が見事にK1A1戦車の車体下部に滑り込んだ。撃たれたK1A1はそのまま道路脇に突っ込んで無残な姿を晒し、擱挫してしまった。僚車がすぐにその仇を討とうとしたが、被弾車の前に出た瞬間に副中隊長の10式が放ったAPSFDS弾を受けてしまった。

「よし。発煙弾！」

特科部隊のFH-70が高麗軍第202大隊の上に発煙弾をばら

撤き、中隊長と副中隊長の10式戦車は煙に紛れて後退し、次の陣地に移った。

氷室小隊の残存戦車3輦は県道62号線で防衛線を張っている空挺団第2普通科大隊予備中隊と合流した。東の方には発煙弾の白い煙と撃破された戦車から上がる黒煙が見える。データリンクから得られる情報によれば中隊長と副隊長は既に5輦の敵戦車を撃破している。

すると東から2輦の戦車が姿を現した。中隊長と副隊長の10式だ。

「データリンクでも確認した。友軍だ。撃つな」

氷室は普通科中隊の指揮官に無線でそう伝えた。さらに中隊長から通信が入った。

<敵は追いかけてこない。撤退したのかもしれない>

「空自の偵察待ちですかね」

飯塚西部山中

山岸は高麗の銃声がいつのまにか止んでいることに気づいた。

「撃ち方止め！撃ち方止め！」

味方の銃声も止んだ。戦場に残っているのは無数の敵味方の死体だけであった。

「隊長、敵は西に逃げていくようです」

小隊長の1人が報告した。

「追撃しますか？」

「いや。いい。なぜ逃げるんだ？」

自衛隊側は増援を得たとはいえ、まだ戦力的には拮抗していた。なにか理由がある筈である。

「もし奴らの目的が陽動であるとしたら、本隊の攻撃が失敗したのではないでしょうか？」

さきほどの小隊長が意見を述べた。

「かもしれんな」

一四・続ヒトマル無双（後書き）

前回に続きヒトマル無双。私も日本人。自衛隊が負けるのは見たくないってのがやっぱりあるのか、戦争では負けてますが戦闘じゃずっと勝ってるんですよ（笑）

一五・大空の戦い

その頃、航空自衛隊は高麗空軍との戦闘を続けていた。巡航ミサイル攻撃が一段落すると、高麗軍は陸軍の攻勢にあわせて前線の陸上自衛隊への攻撃を始めた。ただ実際の効果より陸軍の攻撃方向を誤認させることを主な目的としているようで、攻撃は飯塚ではなく大宰府攻防戦に集中した。さらに陸上自衛隊の防空網に突っ込む事を恐れたらしい高麗空軍は滑空爆弾を使つてのミサイル射程外からのスタンドオフ攻撃に徹したので、空自側の迎撃も手ごたえが無かつた。

そんな中、これまで2機の高麗機を撃墜した野々宮3佐は新田原で待機中であつた。彼は大規模な戦闘に参加できないのが残念で仕方が無かつた。すると飛行隊の幕僚が待機室を訪れた。彼は野々宮ともう1人のパイロットをTACネームで名指しした。

「アーニー、アイスマン。出撃できるか？」

「はい。すぐにでも」

野々宮がそう答えると、幕僚はついてくるように手で示した。外へ連れ出すと幕僚は2人に任務を与えた。

「百里のRFが偵察に出る。護衛を頼みたい」

野々宮と僚機のパイロットはアラートハンガーに向かつた。そこではF-15Jイーグルが何機も待機している。整備員たちは寝る間も惜しんで機体の整備に励み、稼動率を維持していた。

2人は愛機のもとへ向かうとコクピットに収まつた。

新田原基地上空には戦闘機を最低4機常時待機させている上に、今まさに高麗空軍の攻撃部隊との間で戦闘が続いているので、誘導路には常に待機中のF-15で一杯であつた。野々宮と僚機はその

間をすり抜け、次の上空待機組の発進を待つてから滑走路に出た。

管制塔から離陸許可が出ると、2機のF-15Jは大空に飛び立った。

上空では百里から進出してきたRF-15Jが待機していた。3機はRFを先頭に編隊を組んで一路、北へ向かった。

対馬海峡上空を飛ぶ高麗空軍の早期警戒機E-737の中で航空管制官は迎撃に飛び立つ空自部隊の中に紛れて出撃する3機編隊に気づいた。偵察チームだとすぐに気づいた。オペレーターはすぐにF-16の2機に迎撃を命じた。

豊予海峡上空で警戒活動中の航空自衛隊のE-767早期警戒管制機も高麗空軍が偵察隊に向けて刺客を差し伸べたことに気づいた。「アローリーダー、こちらアスター2。高麗空軍機が接近している。警戒せよ」

<アスター2、こちらアローリーダー。了解した>

高麗空軍の2機は散開し二手に分かれた。1機が護衛を引きつけて、もう1機が偵察機を仕留める手筈である。

その動きは直ちにE-767に探知された。E-737はその時に咄嗟にある作戦を思いつき、それを実行させることにした。それを聞かされたパイロットたちは明らかに戸惑っていたが、時間がないのですぐ実行することになった。

高麗のE-737は自衛隊の編隊が2つに分かれたのに気づいた。1機はそのままの針路を保ち、残りの2機が編隊を崩して囷のKF-16に向かつて行く。高麗の作戦に自衛隊はまんまと嵌ったのだ。囷となったKF-16は2機のF-15が迫っているのを知って、すぐに退避行動をとった。囷なのだから護衛を惹きつけなければそれで十分であり、それ以上の危険を侵す必要は無かった。

もう1機のKF-16はE-737の誘導に従って偵察機を追っていた。相手もこちらに感じいたらしく高度を下げて山々の陰に逃げようとしている。KF-16はそれを追尾して高度を下げた。相手は地形の影に隠れてしまったので、レーダー誘導式ミサイルによる長距離攻撃はできない。こうなれば接近して至近距離から叩くだけである。

KF-16のパイロットは機首のレーダーを作動させた。近接戦に持ち込めば勝てる自身があった。いくら強力な制空戦闘機であるF-15でも偵察仕様ならばパイロットは積極的に攻撃してこようとはしない筈だ。それに偵察器材がデットウエイトとなり空戦能力を落す。勿論、偵察器材を放棄すれば対等に戦えるかもしれないが、そうなればもう偵察はできないのだから高麗空軍は任務達成なので逃げればいい。負ける要素はない筈である。AN/APG-68レーダーがF-15を捉えたら、後はミサイルを撃ちこむだけであった。

だがレーダーには一瞬、なにかが映ったかと思ったら、すぐに反応が消えた。そして、すぐに今度は警報が鳴った。

ドップラーレーダーは地上からのレーダー反射に紛れた下方の敵

を探すのには重宝するが、その代わりに重大な弱点を抱えていた。つまり自機から見た地上と相手機の相対速度の違いから相手機を見つけて出すのであるが、逆に言えばその相対速度の差をゼロにしてしまえば捉えられなくなる。それは実に簡単なことで、相手の針路に対して直角に飛行すればいいのだ。自機から前後だけで見た接近速度は地面と変わらないのであるから誤魔化すことができるのだ。これがビーム機動である。

相手のF - 15はESM 逆探 でKF - 16のレーダー照射を捉えるとビーム機動で追尾から逃れて急旋回して、逆にF - 16にレーダー照射を浴びせたようである。

KF - 16のパイロットが後ろを振り向くと、自機を追跡してくるF - 15を確認できた。翼の下に偵察器材は無い。放棄したのだとパイロットは判断した。つまり自衛隊は偵察に失敗し、高麗は作戦に成功したのである。後は逃げるだけである。

しかしF - 15はしつこく追跡してきた。それにはKF - 16のパイロットは驚いた。偵察機のパイロットが敵機に積極的に攻撃をしてくるとは思わなかったからだ。左右に何度も旋回し、フレアをばら撒いて引き離そうとするが、離れない。エンジンパワーはF - 15の方が遥かに上なのだから、食いつかれたら逃げ切れないのは当然である。逃げられないとなれば戦いを挑むしかない。

KF - 16はさらに急旋回してF - 15の後ろに回り込もうとした。旋回性能ならF - 16の方が上であるからドッグファイトに持ち込めば勝機はあった。しかしF - 15の方も高麗パイロットの作戦にはのってこない。KF - 16が後ろに回りこんでくようとするれば、エンジン出力を上げて一気に引き離す。F - 15は圧倒的なエンジンパワーを武器に一撃離脱に徹する。相手から距離をとるとF - 15は大きく旋回して背後にまわる。KF - 16はその隙に逃げようとしたが、叶わなかった。

F - 15は再びKF - 16の尻に噛み付いた。パイロットは火器管制システムを操作して使用武器にAAM - 3 赤外線追尾式空対空

ミサイルを選択した。弾頭のシーカーがKF - 16の発する熱を捉えたことをブザーが知らせる。

「フオックス2!」

主翼下のパイロンからAAM3ミサイルが切り離され、続いてAAM3のロケットモーターが点火される。覚醒したミサイルは前を飛ぶKF - 16に一直線に向かつて行つた。至近距離から発射されたミサイルにKF - 16は回避運動をする暇もなかった。

ミサイルがKF - 16の胴体に突き刺さつた。機体は炸薬の爆発で真っ二つに折れて、二つに分かれて空中を舞つた。すかさず空中を飛ぶ機首部分のキャノピーが吹き飛び、そこから座席ごと高麗空軍のパイロットが空に飛び出した。パラシュートが開き、高麗のパイロットは筑紫山地の山々にゆっくりと降りていった。彼の目はどこかの空へと去つていくF - 15を追つていた。そして偵察器材を放棄させたのだから任務は成功したのだと自分に言い聞かせた。

囷のKF - 16を追つていた2機のF - 15が戻つてきた。敵機

1機を撃墜したパイロットは早速、戦果を報告した。

「アイスマン、それでそつちはどうだった?」

「アーニー、残念ながら逃がしてしまいましたよ」

そこへもう1人のパイロットが割り込んできた。

「それにしても酷いですねえ。偵察機に敵の戦闘機を追えだなんて、
「だが俺より安全だっただろ?」

3機目の撃墜に意気揚揚としている野々宮は偵察仕様のF - 15のパイロットに指摘した。E - 767AWACSオペレーターが咄嗟に考えた、野々宮のイーグルを囷にして相手の策略に引っかかつたと見せかけRF - 15Jを逃がす作戦は見事に成功したのだ。野々宮のイーグルを偵察機だと思ひ込んだ高麗空軍は囷となつたKF - 16をすぐに離脱させ、アイスマン機のウイングマンとして飛んでいたRF - 15Jには一切手を出さなかつた。

<それでは、これより偵察を実施します>

RF-15Jが2機のTACOM無人偵察機を射出して飯塚防衛線周辺を偵察した。

偵察の結果、高麗陸軍部隊は攻勢を中断して後退した事が明らかになった。飯塚への攻勢は終了したのである。この日の戦闘で、陸上自衛隊は防衛線の死守に成功し、一方で航空自衛隊は2機の犠牲と引き換えに2機の高麗機を撃墜した。

一五・大空の戦い（後書き）

というわけで遅滞の章は政治中心と言いつつ戦闘ばっかになって
いますね…

沖縄の普天間基地移設問題は結局、自民党時代の現行案に逆戻り
のようです。アメリカの軍事戦略に基づくと、そして我が国の安全保
障に必要な要求と普天間基地の危険除去を達成する唯一の解です
から、当然と言えば当然ですが、結局は政権交代から今日までの迷
走は時間を浪費して日米関係に楔を打ち込んだだけとなりました。
なんとも残念なことです。

一六・スペツナズ部隊ザスローン

ロシア

ドミトリーはホテルウクライナでの会談を終えると、すぐにヤセネヴォのSVR本部に戻った。彼は得た情報をすぐに特殊作戦課主任に伝えて、スペツナズによる特殊作戦が実行可能か尋ねた。実行可能という言葉を取ると、すぐに作戦立案をするように命じて、それからドミトリーは事の詳細を秘密回線の電話でクレムリンの大統領に伝えた。

「極めて効果の高い作戦ですが、他国領土における大規模作戦ですからリスクも大きいです」

ドミトリーは作戦の問題点も含めてありのままを説明した。スターリン時代を除けば常に否定的見解についてもしつかり伝えるのが情報官の生き残る道である。もし問題が生じた時に“リスクは承知の上でしょ？”と弁解できるからだ。

「分かった。私も情報機関の人間だったんだ。この種の作戦では何を犠牲にし、何を得るのかは心得ている。ただちに実行したまえ」
「ありがとうございます」

大統領からの了承を得るとドミトリーはスペツナズの訓練施設へ向かった。実行する部隊をこの目で見ておきたかった。

現地で特殊作戦課主任と合流すると、ドミトリーは実行部隊の待機しているところへ向かった。SVRには秘密作戦のためのスペツナズ部隊を独自に保有しており、部隊はまたの名をザスローン防壁と言った。

施設では実行役を務める分隊の指揮官であるイヴァン・コンドラチエフ大尉が2人を出迎えた。コンドラチエフが先導して2人を分隊のところへと案内した。

「主任。何故、彼の分隊を実行役に選んだんだね」

「簡単な話です。たまたま彼の分隊が当番隊だった。それだけです」

ザスローンは複数のチームに分かれており、そのうちどれかの部隊が必ず直ちに出撃できるように待機している。今はたまたまコンドラチェフの分隊がそうであったのだ。能力についてはあまり考慮されなかった。どのチームも優秀であらゆる作戦に投入可能だからである。

「それで大尉。特に目をかけている優秀な奴は居るのかな？」

ドミトリーが尋ねるとコンドラチェフは少し考えてから答えた。

「あいつです。あの狙撃手」

コンドラチェフが指したのは特殊部隊としては小柄で少年のような容姿の隊員であった。

「ミハイル・チエーホフ少尉です。狙撃も巧い上に、小さいから隠れるのも得意です。仲間内じゃ“妖精”^{ニラフテ}って呼ばれるくらい、かわいい顔していますけど怖い奴ですよ」

「かわいい？」

主任がミハイルの顔を凝視した。

「確かにね。髪を伸ばしたら女と言っても通用しそうだ」

それを聞いたコンドラチェフが顔を顰めた。

「なにを言っているのですか？あんなにかわいいのが女なわけないじゃないですか！」

ドミトリーはコンドラチェフの言っていることが理解できなかった。とりあえず触れてはいけないようなので無視することにした。

「隊員を集める」

「分隊、集合！」

12人の隊員がコンドラチェフのところへ集まった。4人組の突入班が2つ、ミハイルが指揮する3人組の狙撃班が1つ、それに分隊長直属の通信兵が1人。それに分隊長であるコンドラチェフも加わった13人が実行部隊である。

ドミトリーは隊員たちのきびきびとした動作を見て、昔の時代のことを思い出していた。

S V Rの母体であるかつてのK G Bには2つの優秀な実力行使部隊があった。A部隊とV部隊である。前者は第7局の下で国内テロ対策部隊として、後者は第1総局の下で対外工作部隊としてK G B史に名を残したのである。

その後、ソ連の崩壊に伴いK G Bは解体され連邦保安庁F S Bとなり、外国での情報収集を担う第1総局は独立して対外情報庁S V Rとなった。だがヴィンベルはS V Rにはなぜか来ず、そのままF S Bにより廃止されてしまった。その後、当時のF S B長官であった現大統領の手によってヴィンベルは復活したが、所属はF S Bであった。S V R 旧第1総局 はヴィンベルを奪われてしまったのだ。勿論、S V Rにはザスローン部隊がある。しかし本来は栄光のヴィンベルの名は彼らが名乗るべきものの筈だ。だがヴィンベルは今やF S Bにある。それがドミトリーにはどうしても納得できなかった。

「君たちをヴィンベルと呼べればよかったのだがね」

だがイヴァンも他の隊員たちも怪訝な表情をした。彼らは小学校に通うようになった頃には既にソビエト連邦は無くなっていて、お互いを同志と呼ばなくなった世代の人間なのだから仕方がない。思えばドミトリーももう60歳。しばらくすれば定年を迎える。ロシアが超大国としてアメリカとともに君臨していた頃を生きていた人間は一線から次々と退いていくわけだ。

「よろしい。これより君達に実行してもらおう作戦を説明する。今から3日後、6月30日に1人の中国人民解放軍の将軍が国境警備部隊視察のために黒河を訪れる。君達の任務はその将軍を誘拐することだ」

その内容に隊員たちおは一瞬どよめいたが、すぐに平静さを取り戻した。

「これが目標と作戦地域の地図だ」

説明を引き継いだコンドラチェフが白將軍の顔写真と、国境警備部隊の詰め所と思われる建物中心に撮られた衛星写真を隊員たちに配った。

「想定される敵兵力は？」

衛星写真を見ながらミハイル・チエーホフが尋ねた。

「詰め所には常時1個小隊が配備されているが、当日は將軍の出迎えのために増強される可能性が高い。1個中隊程度は見込んでおくべきだ」

ドミトリーが説明した。

「しかし、將軍直屬の護衛はそれほど多くは無い筈だ。詰め所の外で襲撃をするべきだろうな」

それにコンドラチェフが続く。

「しかし、將軍の使うルートは分からないので、襲撃は詰め所の近くで行なわざるをえない。おそらく、すぐに警備兵どもに気づかれるだろう。速さが肝心だ」

「どれだけの支援を得られるのですか？」

別の隊員が尋ねた。

「中国で内戦が始まって以来、極東軍管区は常に警戒態勢を高めた状態にあり、日本で戦争が始まってからはさらに臨戦態勢をとっている。故に軍が提供できる資源はかなりのものだ。既に極東管区司令部では独自に検討をはじめているだろう」

ドミトリーはそれから極東軍管区が検討している幾つかのプランについて説明した。

説明を聞き終えた隊員たちは意見を出し合いコンドラチェフ、作戦主任とともに作戦を練った。

八代海は不知火海の異名を持つ天草諸島と九州に囲まれた小さな内海である。その上空を2機のF-15が巡回していた。パイロットは下に広がる海を眺めて唇を吹いた。その目は北上する船団に向けられていた。

6隻の護衛艦と8隻のカーフェリー、貨物船というのが船団の構成である。先頭を進むのはイージス護衛艦【あたご】に汎用護衛艦の【たかなみ】【はるさめ】である。それに貨物船団が続き、後ろをヘリコプター護衛艦【いせ】と汎用護衛艦【みねぐも】【ありあけ】であった。護衛艦は高麗海軍潜水艦の襲撃から生きのびた第2護衛隊群の艦である。

「これで汚名返上となるのかな？」

護衛隊群司令の二ノ宮海将補は【いせ】の艦橋から進む船団を眺めていた。

「我々としては無事に戦車を地上に降ろしてもらえば満足だよ」

第7師団長の大原陸将がそう返した。船団に載せられているのは彼らの装備なのだ。

第7偵察隊に戦車部隊などを増強した第7師団先遣隊は苦小牧から民間企業より徴発したフェリー、貨物船に載せられて九州を目指した。当初は船団を組まずバラバラに独航していた。高麗海軍の潜水艦の襲撃が予測されたが、戦時とはいえ日本周辺にはまだまだ多くの民間船舶や中立船舶が航行しており、その中から自衛隊の装備を載せた特定の船を見つけることは大変困難なことである故に独航させることを選択した。

しかし九州近辺に近づくときさすがに中立船の数が減り、航空攻撃の脅威も高まったことから鹿児島沖で船団を組んで、護衛艦隊と合流して八代海に面する八代港を目指しているのである。

八代海に入ったところで高麗軍の総攻撃が始まったが、幸い洋上の船団は攻撃目標にならなかった。船団に気づかなかったのかもしいれない。ともかくとして船団は無事に八代の港に入ろうとしていた。護衛艦が港の周りを囲み、その警戒の下でフェリーと貨物船は順番に八代港に入港し、物資を下ろし始めた。最初にフェリーから戦車を下ろされた。

西部方面総監がその様子を視察していた。フェリーのランプを降りて彼の目の前に現れたのは90式戦車であった。

「ほお。やはり10式にはない重厚さがあるな」

入隊以来、西部方面一筋で出世してきた普通科出身の陸将は90式戦車を見る機会があまり無かった。冷戦末期にソ連戦車部隊を迎え撃つべく開発され90式戦車は第7師団の主力戦車であり、50tの車体には10式には劣るが強力な120ミリ主砲と頑強な装甲が施されている。新型の10式戦車の配備が始まったとはいえ、いまでも第一線級の戦車であることは間違いなかった。

すると洋上の護衛艦からSH-60K艦載ヘリコプターが飛んできて、港の一角に着地した。そこから大原陸将が出てきた。彼は西部方面総監の姿を見つけると、駆け寄ってきた。

「第7師団先遣隊、ただいま到着しました」

「よく来たな」

総監は大原に握手を求め、大原はそれに喜んで応じた。

「敵の攻勢があつたそうですが、どうなりました？」

「敵は飯塚の占領を狙つたようだが、なんとか阻止したよ」

それから総監は再び次々と降ろされる90式戦車に視線を戻した。「このような強力な機動打撃部隊を得られたのがうれしいよ。君達には暫くは西部方面隊の戦略予備部隊となつてもらい。今度のような攻勢を高麗が再び仕掛けてきたら、その時には心強い」

政府の方針がまだ定まらぬ中、九州の自衛隊は着実に増強が進め

られていた。

一六・スペツナズ部隊ザスローン（後書き）

というわけで久々の更新です。劇中にはなぜかミーシャ君も登場したり。なんか危ない人も登場してますが…

感のいい人は第2護衛隊群の護衛艦の名前がおかしいことにお気づきになるとおもいますが、現在、日韓大戦第1章の加筆修正作業を進めています、修正verにあわせてみました。

一七・流れの変化

6月27日 都内料亭

太陽は西に沈むと菅井官房長官は1人で都内の某有名料亭を訪れていた。マスコミに嗅ぎつかれないようにするのに苦労した。囿のハイヤーを首相官邸正面に用意し、菅井は公邸から一般のタクシーで脱出した。

菅井は個室に案内され、そこで1時間ほど待った。すると個室と外を隔てる引き戸が開かれ、見知っているがあまり話しをしたことのない男が現れた。彼は野党である民生党の右派を束ねる中心人物であった。

菅井は気さくな感じに声をかけた。

「いやあ、よく招きにに応じてくれたね」

相手の議員は落ち着かず、にそわそわしているようであった。

「手短にお願いますよ。この会合が知れたら大変なことになりま
すから」

「まあまあ。そう焦りなさんな。秘密の取り扱いには気を使ってい
るよ」

菅井は相手が安心するように自信ありげに答えたが、内心は気が
気でなかった。今、彼の計画が瓦解すれば烏丸政権は風前の灯であ
る。

「それで用件は？」

「分かっているだろう？自衛隊の防衛出動承認の件だよ」

予期した通りの菅井の言葉に相手の議員は顔を顰めた。

「分かってください。私にも党における立場というものがあるんで
す」

「党なんて糞食らえだ。今は国家の危機なんだぞ」

菅井の言葉に相手の議員は目を伏せた。菅井は構わず続けた。

「君だって自衛隊の出動に反対なんて言わないだろう？この事態の

解決に防衛出動が必要だと考えているんだろう？ だったらやるべき事は1つじゃないか！」

菅井がそこまで言うのと相手は顔を上げて菅井を見た。彼の中でなにかが動いているようであった。

「少し時間をくれないか？」

「いいとも」

名古屋のアパート

弟のアパートに足止めを食らっている深海真はネットを使って情報収集に勤しんでいた。国内外のニュース報道を漁るのはもとより、掲示板などに書き込まれる自称“現地住人の証言”も独自に信頼性を判断して分類して現地の状況把握に努めた。

パソコンから離れて幾つか得られた情報をメモに書いて整理。深海は情報の整理・分析には最新のIT機器より手書きのメモを好んだ。していると、テレビの音が聞こえてきた。

<これほど戦争が長期化しているにも関わらず介入しないアメリカ軍。私達はアメリカを背景にした安全保障を信じ、半世紀に渡り同盟を結び、様々な害悪を被りながらも、莫大なおもいやり予算を払いながらも同盟関係を維持してきたわけですが。しかし、我々の期待は見事に裏切られてしまいました>

元プレス実況のアナウンサーが沈痛な面持ちでしゃべっている。<一体、この半世紀の間、我々が背負ってきたものはなんだったのでしょうか？これまで日本外交、安全保障の基盤とも言えた日米安保体制、しかしこの体制を見直すべきときがきているのかもしれない>

開戦以来、この手の論説を報道でもネットの書き込みでもよく見かける。冷静に考えれば、当事者である日本政府議会がそもそも自衛隊を出動させるべきかどうかで揉めているというのにアメリカ軍

が動いてくれるわけもないだろう。

真は日米離間を狙う勢力がこの期を利用して何らかの行動に出ているのだろうかとも考えた。だがすぐに止めた。陰謀論に傾倒しても碌なことがない。

ワシントンDC ホワイトハウス

一方、アメリカはようやく27日の朝を迎えていた。昨日、ローゼンバーグ大使が日本の首相の決断を伝えたので、それに対応した新たな方策が練られていた。そして、それは翌日、朝一番に行なわれる大統領への状況報告で示された。

「それで安保理決議案を提出するわけね？」

國務長官の意見書を見て大統領が言った。

「その通りです、サラ。ようやく安保理でも反撃を開始できます」
國務長官が誇らしげに言った。日韓が開戦するとすぐに緊急の安全保障理事会が開かれて中国が即時停戦決議案を提出した。つまり戦闘を1度停止して戦線をそのままにとりあえず交渉での解決を探ろうというわけだ。国連の手法に忠実で、かつ高麗の望むものであった。

もし決議が通れば日本にとって拙いことになる。現在の線で戦闘を停めるのであるから、高麗軍が居座る事になる。それどころか堂々と補給だってできる。保護下 占領下の現代的な言い換え の一般市民に対する人道的な支援とでも言い張れば、誰が補給物資を載せた船や航空機を阻止できるであろうか？そして領土の占拠を背景にして日本に譲歩を求めれば、多くを得ることができ。一旦、停戦決議が通れば高麗はただちに受け入れるであろう。相手が受託しているのに停戦を拒否するなどという真似は日本にはできまい。そして全て高麗の思い通りだ。

無論、アメリカもそれを察しているから同盟国として出来る限り

の援護はしている。決議を引き伸ばして時間を稼ぐのである。しかし、それはかなり厳しいことであった。即時停戦は武力衝突に対する国連の通例の対応であり、国連を構成する第三国が当然に努力すべきことであるとされているのだ。それを妨害するのは外交的に拙い。既に時間稼ぎは限界に達しつつあった。

おまけに日本政府の方針が定まらないのも問題だ。それ故に妨害以上のことはできない。日本の出方が分からない以上、別の決議案を提出することも拒否権も使うこともリスクが大きすぎた。アメリカが高麗軍の即時撤退を訴える横で日本が即時停戦を受託すればアメリカの威信は大きく傷つく事になるからだ。アメリカにはその危険を冒してまで日本を守る義理は無い。

だが日本は決断をした。

「いやあ。あと1日で中国に押し切られるところでしたよ。中国案には拒否権を行使し、こちらの停戦案を提案します」

「問題は中国をどう黙らすかね」

大統領が指摘した。安保理で拒否権を行使できるのはアメリカだけではない。内戦中の国でありながら中国は相変わらず安保理に席を持ち拒否権を行使できるのだ。

「それは問題ではありません。我々も対等な武器を得たという事ですよ。中国が拒否権を行使するというのなら、すればいい。そうなれば我々は停戦勧告決議が採決されるまで好きなようにできる」

「なるほどね」

アメリカの方針は決まった。

ニューヨーク 国連本部

安全保障理事会では今日も北九州有事への対応について討論が重ねられていた。その展開は即時停戦を唱える中国大使にアメリカ大使が慎重論を唱え、それに対して中国大使が批判で応酬するという

のを繰り返していた。

「我々はアメリカの対応を強く批判する」

この日、最初に口火を切ったのは中国大使であった。

「平和の回復に必要なのは第一に戦闘を止めることである。だからこそ我々は即時停戦を主張しているのだ。しかし、アメリカはその妨害を図っている。アメリカが如何なる野望を目論んでいるのか我々の知るところにないが、アメリカの行動によって無辜な九州人民に無用の苦しみを与えている事に間違いない」

理事国である各国大使を前に熱弁を振るう中国大使。昨日までは中国大使の演説に聞き入る各国大使とその様子を苦々しい表情で見守るアメリカ大使の姿が見られたが今日は違った。アメリカ大使の表情は妙に穏やかで不安のない様子である。中国大使はその姿に戸惑いを覚えた。

「私はアメリカ大使が世界平和のために積極的な対応をすることを望む。考えを改めて停戦決議採決に協力をしてほしい」

中国大使は演説を終えると自分の席に腰を下ろし、次に発言することになっているアメリカ大使を見つめた。なにを企んでいる？

「それではアメリカ大使」

議長である非常任理事国のアルゼンチン大使が促し、アメリカ大使が立ち上がった。

「中国大使は世界平和とおっしゃったが、貴方のいう平和とは如何なる状況を言うのでしょうか？」

アメリカ大使の主張は中国大使への問いかけから始まった。

「国連憲章にはこのようにあります。国際的な紛争の解決を平和的手段によって且つ正義及び国際法の原則に従って実現すること」

白々しい。アメリカ大使を含めたその場に居た全員が同じ感想を抱いた。

「高麗軍が日本の領土内に居座り、その軍事力を背景に外交的要求を押し付けることを容認することを平和と言えるのでしょうか？」
それにすぐさま中国大使が反発した。

「国連が真つ先に取り組まなくてはならないのは被害の更なる拡大を防ぐ事です。条件をつみあげることによって停戦発効が遅れば、今まさに戦場に居る人々がさらに傷つくことになる！アメリカの主張は死傷者を悪戯に増やすようなものだ！」

さらに安全保障理事国を構成する国々の大使が次々と非難の言葉を口にしました。

「そもそも軍事力を背景にした脅迫外交を推し進めているのはアメリカではないか！」

「今の大使の発言はアメリカの外交政策の転換を示すものなのか？はつきりしてほしい！」

「アメリカの横暴こそが問題だ！」

非難の言葉が次々と浴びせられる中、アメリカ大使は強く宣言した。

「我々アメリカ合衆国は新たな停戦決議案を提出したい。国連は両国に対して即時停戦を求めると同時に、高麗に対して即時撤退を要求しなくてはならない！」

流れが変わりつつあった。

一七・流れの変化（後書き）

というわけで久々の投稿です。突然、国連なんかが出てきました。こつやつつとその場その場で新しいアイデアを埋め込んでボロボロになっていく様は如何に私の構成能力がヤバイかを如実に示すものです。申し訳御座いません。

一八・米軍行動開始

6月28日朝 アメリカ海軍佐世保基地

国連本部で北九州有事問題を巡って大使たちが紛糾している頃、佐世保のアメリカ軍基地に入港する数隻の船があった。それらの船は委託された業者を通じてアメリカ軍海上輸送司令部が運行する船で、空母やイージス艦といった“主力兵器”に比べれば馴染みの無い船であったが、アメリカの世界戦略を支える重要な船であった。その船級をジョン・P・ボボ少尉級という。

ベトナム戦争時に英雄的な活躍をして戦死し名誉勲章を授与された少尉の名に由来して命名されたジョン・P・ボボ少尉をネームシップとするこの級は、本質的には貨物船であった。カーフェリーのようにランプを埠頭に渡してクレーンを使わずにトラックで直接積荷を積み込むことができるR0-R0型に分類される一般的な貨物船である。

問題はその積荷である。佐世保基地の埠頭に渡されたランプから次々と降りてきたのはM1A1主力戦車であった。船内には戦車だけでなく大砲や弾薬、その他の様々な物資を載せていた。船団の他の船も同様で、全ての貨物を降ろせば後は兵士がやって来るだけで30日間独立して戦闘行動が可能な海兵遠征旅団が完成する。そう。船団はアメリカ軍の誇る海上事前集積船隊だったのである。アメリカ軍は各地にこの事前集積船団を配置することで陸上部隊を迅速に派遣することができるのだ。

同時にアメリカ太平洋海兵隊の各部隊が抽出されて第三海兵遠征旅団の編成が始まっていた。海兵遠征旅団は1個海兵連隊 歩兵連隊 を基幹として編成される諸兵科連合部隊で、人員は1万から1万5000人、砲兵1個大隊に戦車1個中隊が配属され、さらに海兵航空団の援護を受ける。アメリカ海兵隊は極めて有力な戦力を日本へと展開させたのである。

しかし物資と積み下ろしと兵員の集結は今しばらく時間が必要であった。それでも僅か1個中隊で佐世保を守っていた海兵隊は、船団の到着によつて戦力に余剰が生まれた。かくして海兵隊は本格的に対高麗作戦行動を開始することになった。

国道385号線 第19普通科連隊陣地

激しい戦闘が一夜を経て前線はようやく落ち着きを取り戻していた。道路に残る戦車の残骸や高麗兵の死体は片づけられて、一帯は一見平穏なように見えた。実際には木々の影に自衛隊員たちが身を潜めて、何時やってくるかも分からない敵を睨みつけていた。

桜井ら第19普通科連隊第1中隊は道を挟んで後方に待機していた第2中隊と交代して後方の陣地に入り、次の戦いに備えていた。実員15名にまで減っていた第2小隊は部隊を2個小銃班に再編した。

桜井は気にもたれて、トラックに高麗兵が入った死体袋が次々とトラックに積み込まれていく様を見つめていた。

「どうした？」

その様子を見かねた小隊の前任陸曹である砺波陸曹長が声をかけた。

「いや、別に」

そう答えたものの、内心は動揺していた。自分がつくりだした死体を見る度に思うのだ。なぜ俺はこんなことをしているんだと。彼が自衛隊員を志したのは大災害の被害にあった人々を助けるためだから何故、こんな山の中で殺し合いをしているのだろうと考えてしまう。

ふと、数日前のことを思い出した。福岡撤退戦時とともに戦った特戦群の男の言葉。

振り返ると砺波は彼に背を向けて、その場を離れようとしていた。

「ちよつといいですか？」

砺波が桜井の方に振り向いた。

「陸曹長殿はどうして自衛隊に入隊なされたんですか？」

桜井の問いに砺波は怪訝な表情をしながら答えた。

「大学を出た時、丁度就職氷河期とぶつかっちまってな。それで自衛隊に入ったよ。生活のために」

近くにいた機関銃手がそれを聞いていた。

「曹長殿は大卒だったのですか？」

いかにも現場叩き上げという風貌の砺波を大学出身とイメージできる者は小隊には居なかった。

「当時は陸士だってほとんど大卒だったんだぞ。不況のせいで志願者が殺到してきたんだ。そういうお前はなんで自衛隊に入ったんだ」
聞かれた機関銃手は緊張で強張っていた表情を緩めた。

「祖父も親父も自衛官で、俺もその道に進むべきなのかなってなんとなく。親父は幹部で連隊長まで昇進したんですけど、俺は防大落ちてしまったってこの様です」

そこへ古谷3尉がやって来た。

「なんだ、お前ら。揃って身の上話か？」

「まあそんなところです。3尉はどうして自衛隊に入隊したんですか？」

桜井が尋ねると、古谷は遠慮がちに答えた。

「いやな。高卒陸士でもなかなか高給だし資格も取れるから、金を貯めた後に除隊して、なにか店でも出そうかと思っていたんだが、気が付いたら陸曹の昇進試験に受かって、それから幹部にも昇進して、職業軍人になってたんだ」

誰も彼もいい加減な理由である。そして最後に矢部が答えようとした。だいたい予想できたので誰も聞きたいと思わなかったが、矢部は皆のそういう視線を無視した。

「俺は決まってるでしょう？銃がガンガン撃てて、敵をぶっ殺せるところだったからですよ」

そんな有様に古谷が呆れて言った。

「まったく。どいつもこいつも、滅茶苦茶な理由で命を散らすかもしれん戦場で戦うわけか」

「3尉。あなたもでしょ？」

桜井が指摘すると、古谷は彼の方を向いて逆に尋ねてきた。

「お前はどうかんだ？」

桜井が答えようとしていると、陣地に自動車の駆動音が聞こえてきた。南側、すなわち味方の側から。音のする方向に振り向くと、そこには自衛隊の軽装甲機動車にも似た小型装甲車輛が向かってきていた。

「なんだあれ？」

誰もその正体を知らなかった。

20世紀初め、アメリカ軍はある問題を抱えていた。それは軽歩兵部隊の主力車輛であったハンヴィーの脆弱性である。ソマリアでの戦いや対テロ戦争を通じてゲリラなどの攻撃に対して防弾能力の低いハンヴィーでは耐えられなかったのである。

そこでアメリカ軍は新たな車輛の開発を決意した。それがJTLV、統合戦術軽車輛である。簡単に言えば自衛隊の軽装甲機動車のアメリカ版で、用途にあわせて積載量別に3つのカテゴリーが存在し、それぞれのカテゴリーの中で様々なバリエーションが用意されている。桜井たちの目の前に現れたのはその中で最も小さいカテゴリーAに分類される車輛で、その唯一のバリエーションであるGP型である。GPとは汎用ジェネラルの略称であり、ジープの正当な後継者である4人乗りの軽量多用途車輛と位置付けられている。

JTLVは古谷らの前に停まった。乗り込んでいるのはアメリカ海兵隊隊員であった。

「指揮官は？」

助手席に座る少尉の階級章をつけた男は流暢な日本を操った。

「私だが。古谷少尉だ」

古谷が名乗り出ると、海兵隊の少尉は窓から手を伸ばし握手を求めてきた。古谷がそれに応じて手を出すと、少尉は古谷の手を固く握り締めた。

「私はトム・ワトソン少尉。海兵隊だ。我々はこの先に斥候へと向かう」

「それで？なにか支援が必要ですか？」

古谷が尋ねると、ワトソンは首を横に振った。

「いや。通告した方がよいと思ったただだよ。それと今の敵の位置は？」

古谷はワトソンが高麗のことを“敵”と明言したのを聞き逃さなかった。単なるリップサービスかもしれないが、隊員達はアメリカがやはり味方であると感じて安堵しているようであった。

「前哨陣地の報告によれば、ここから2キロ先までは敵はいない。だがそれ以降は分からない」

「ありがとうございます。では」

JTLVは発進して、古谷たちのもとを離れた。

しばらく走るとJTLVは道路脇に停まった。

「さて、そろそろ始めるか」

ワトソン少尉が宣言すると彼の3人の部下が頷いた。ドアを開けて外に出ると、それぞれの得物を手にした。ワトソン少尉はM16ライフルを、運転手はミニミ機関銃を、そして後部座席に座っていた二人の下士官はそれぞれM14DMR狙撃銃とSR-25狙撃銃を手にしている。

「先頭はマルキーニ、トリガーが続け。ヒューイットは後ろを守れ」
ワトソンが指示を出すと、まずM14DMRを持った狙撃手が前に出た。それにミニミを持った運転手が続く。ワトソン少尉は運転手の後について、SR-25を持った狙撃手が最後尾に立った。海

兵隊斥候チームの4人は縦隊となり、森の中に進んでいった。

一八・米軍行動開始（後書き）

日韓大戦久々の更新です。といっても実は先月、一二の二・空挺団の苦闘を割り込み投稿させていただいたのですが、どれだけの方が気づいていただけたのでしょうか？

桜井君の物語はどう收拾をつけるべきか思い悩む今日この頃です。書いててしっくりきませんからね。

さて、今日は12月24日、クリスマスイブです。ただいま午後4時よりアメリカ北米宇宙防空司令部NORADの公式サイトで毎年恒例のノーラッド・トラックス・サンタが始まります。是非ともご覧ください。詳しくはNORAD、サンタでご検索を。2ちゃんねる軍事板にもスレが建っていますので、そちらもよろしくおねがいします。

一九・どうしたものか

福岡沖

潜水艦<こつりゆう>は東シナ海から対馬海峡に向けて航行中に偵察任務を与えられてから早1日。ようやく目標である福岡沖に到達しようとしていた。

<こつりゆう>は万全の態勢であった。バッテリーはほぼ充電を完了しており、スターリング機関は出力が小さいので戦闘時は専らバッテリーが頼りである、武装も89式魚雷18発にハーブーン4発と搭載量一杯載せられている。

今、<こつりゆう>はスターリング機関を動かし、それで発電された電力で航行をしていた。スターリング機関は1800年代初めに発明された比較的古い外燃機関である。仕組みを簡単に書けば、シリンダーにガスを詰め、外部から過熱と冷却を繰り返してそれによって起こるガスの膨張、収縮により動力を得るものだ。熱を運動エネルギーに転換する効率が高く、しかも爆発エネルギーを利用するディーゼル機関と違って静粛性も高いので潜水艦機関には最適と言える。<そつりゆう>型に搭載されたスターリング機関は液体酸素とケロシンの燃料によってシリンダー内のヘリウムガスを過熱して動力を得る。

発令所は自国の近海だが敵の勢力圏に突入するということで緊張に包まれていた。海上自衛隊の潜水艦は世界でも最高水準にあるが、それも少しのミスで帳消しになってしまうのが戦場というものである。だから乗組員たちは自然と口数が少なくなり不必要な話をしなくなる。トイレさえその回数が極端に減る。

<こつりゆう>の任務は福岡港の偵察である。福岡港は敵の補給拠点となっているから、それを阻止するためには港を封鎖しなくてはならない。<こつりゆう>はそれに必要な情報を集めるのである。

「機関停止。微速前進」

その静寂は発令所で破られた。中曽根艦長の号令でスターリング機関が停止してモーターによる無音航行に突入する。

「潜望鏡深度」

舵が効く最低限の速力を維持する<こつりゆう>は艦橋の潜舵を動かして徐々に上昇する。

「潜望鏡深度、艦前後水平保て」

「潜望鏡上げ」

命令が矢継ぎ早に出されて、乗組員達はそれを黙々とこなした。

潜望鏡が海面上に出て、艦長は発令所の接眼部に顔を押し付けてレバーを操作し一回転した。そしてすぐに潜望鏡は海面下に沈んだ。

「ESM。感はあつたか？」

潜望鏡から顔を放した艦長の問いに電子戦担当の海曹が首を横に振った。

「感知できたのは航海用レーダーの電波だけです。探知はされていません」

艦長はそれを聞くと命じた。

「よし。微速前進、潜航！着底しろ！」

<こつりゆう>は微速で前進しながら、徐々に深く潜っていき、玄海灘の底についた。彼らの任務はそこに留まり、耳を澄まして博多港への船の出入を調べることにある。

海底に腰を落ち着けると艦長は先ほど潜望鏡で捉えた画像の再生を命じた。<そつりゆう>型潜水艦には新型の非貫通式潜望鏡が備えられている。従来までの潜望鏡は船殻に穴を開けて外に伸ばした筒を通じて直接に外界を覗き見るのであるが、新型では潜望鏡マストの先にビデオカメラを載せて艦内のテレビを使ってみるのである。船殻に大きな穴を開けずに済むので艦の強度が増す他、カメラを使うので捉えた景色を記録して大きな画面で再生することができるという利点もある。先ほど艦長が使った従来型潜望鏡と同じ接眼部は心理的、象徴的效果を期待したもので実用上必要なものではない。

艦長と幹部達は発令所につけられたディスプレイの前に集まって、

潜望鏡が捉えた博多港の拡大画像を見ていた。そこには積荷を下ろす貨物船と護衛の艦艇が映っている。

「ウルサン級が2隻、クワンゲトデワン級が1隻ですね」
湾内には韓国海軍艦艇の姿はそれくらいしかなかった。

「よし。通信予定時間まで聴音監視を続けるぞ」

国道385号線 第19普通科連隊陣地

海兵隊の偵察隊を見送った後、桜井達は再び防衛線で警戒を続けていた。桜井の隣に古谷がやって来た。

「それでお前はどうかんだ？」

突然の古谷の問い掛けに桜井は驚いてむせた。

「突然なんですか？ いったい？」

「さっきの続きだよ。お前が入隊した理由を聞いていない」

古谷の言葉に周りの隊員達が2人に目を向ける。

「こら！ 警戒を続けんか！」

周りの隊員たちは怒鳴られて戦線のむこうに目を戻したが、耳は2人に注意を向けたままである。

桜井は前に黒部に対して説明したように東海大地震の経験を放した。そして悩みも。

「別に戦うのが嫌だ、とか、人を殺すのよくない、とか甘ったれたことを言うつもりはないんですか。なにをやってるんだかと思ってしまうって」

「そんなもんだ。口でどう言ったって、実際に戦う覚悟とかそういうものを持つてる人間なんてそういやしない」

「それじゃあ何で戦っているんですか？」

桜井の問いに古谷は暫し考えてから答えた。

「それが仕事だからだ。これじゃあ不足かな？」

それを聞いていた砺波が北を警戒しながら呟いた。

「誰かがやらなくちゃならん仕事。まさに公務の真髄だな」

「そついや俺達、公務員だったんですよね」

砺波の隣で小銃を構えた陸士が続く。そんな風に意見が出たところで古谷がまともに入った。

「そついうことだ。それが俺達の仕事だ。誰かやらなくちゃいけない。そして俺達にはなんとかすることできる力がある。それで十分じゃないか」

それを聞いて桜井は64式狙撃銃を敵方へ構えてみた。なんとかすることが出来る力。それがある。

「そつですね」

横田基地

太陽が西に沈んだ頃、極東におけるアメリカ空軍有数の拠点である神奈川の横田空軍基地にトラックの縦隊が次々と入ってきた、トラック隊は同じ神奈川県内にある米軍施設である相模総合補給廠からやってきたもので、銃弾、大砲、車輛など1つの部隊を形作るのに必要な様々な物資が荷物の中身だ。

荷物は基地に待機している輸送機に積み込まれて、西に向けて飛びたっていった。

ハワイ

かつてアメリカ海軍太平洋艦隊最大の拠点であり日本海軍による真珠湾攻撃の舞台となったハワイであるが、現代においても米軍の世界展開にとって重要な拠点であることは変わらない。ハワイにある陸軍部隊、トロピックライトニングの愛称で知られる第25歩兵師団は冷戦期より極東有事の際の日本救援部隊に指定された部隊で

あつた。であるから、北九州有事に対して真つ先に出撃の準備を始めたのは当然のことである。

派遣部隊に指定されたのは第3歩兵旅団戦闘団“ブロンコ旅団”である。将兵が召集されて基地で待機をしていた。そこへ命令が下つた。

“第25師団第3旅団はただちに九州へ展開し、佐世保基地の警備を強化せよ”

目的はあくまで佐世保基地の警備強化であるが、真の目的は北九州有事への介入のためであることは明らかであつた。

“ブロンコ旅団”の将兵たちはヒツカム基地に移動し、そこから空軍の輸送機に乗り込んだ。

一九・どうしたものか（後書き）

題名は私の心境（笑）

でも、これを書き終わってようやく第2部の終わりが見えた感じが
す。

二十・動搖

6月28日深夜 ソウル

高麗大統領官邸である青瓦台は重苦しい雰囲気に包まれていた。

「つまり、どうということなんだ？」

鄭宇中大統領はさすがのような顔で外交通商部長に尋ねた。だが、その答えは大統領に容赦なく現実を突きつけた。

「国連安保理による即時停戦案は否決されました。残念ながら国連決議を利用しての短期決戦は望めそうにありません。アメリカは我が軍の即時撤退を主張しています」

そう報告する宗白一外交通商部長も目の前の事実を信じられないといった表情をしていた。だが心の奥底ではともかくとして頭では現実を認識できていた。

「残念ながら我々の選択肢は大きく狭められました」

「あくまで狭められただけだ」

そう主張したのは国防部長である李世昌である。

「自衛隊に痛撃を与えれば必ず日本は屈服します」

「先日の攻勢は失敗したではないか？」

さらなる攻勢を主張した国防部長の主張に口を挟んだのは国家情報院院長の金幽霊であった。

「既にこの戦争を勝利する上で重要な幾つかの条件が失われている。このまま消耗を重ねるよりも方針転換を図るのが筋ではないかな？」

幽霊の言葉に国防部長は顔を顰めた。

「ユリヨン院長。貴方は我が国軍を信じていないのですかな？」

「信じてどうにかなるなら、信じますがね」

2人の遣り取りを見つつ他の閣僚は黙り込んで日和見を決め込んでいる。既に作戦は当初の予定は破綻しつつあるように見えたが、それを口にする勇氣を持っていたのは金幽霊だけであった。

「大統領。長期戦になればなるほど不利です。状況によっては国連

安保理でのアメリカの提案を受け入れる必要が出てくるでしょう」「つまり負けを認めると？」

幽霊の大統領に対する提案に対して国防部長は強い口調で聞いたでした。

「軍が作戦を継続可能と判断するなら継続してもいいでしょう。しかし万が一の場合のために引き際について決めておくべきです」

鄭大統領は幽霊の提案に頷いた。

「金院長の言うとおりだ。作戦中止を決定するラインを決めるべきだ」

大統領の言葉を聞いて多くの閣僚達は安堵の表情を浮かべた。その中で外交通商部長はこれといった反応を示さず、国防部長は不満げであった。

「それで外交通商部長。国連の様子は怎么样了？」

大統領に指名された外交通商部長は手短に現状を説明し始めた。

「中国がアメリカ案に抵抗しています。採決には拒否権を行使するでしょう。中国が味方である限り最悪の状態に成ることはありません」

それに国防部長が続く。

「現在、中国軍が台湾に対して臨戦態勢をとっており、それが継続している限りアメリカ軍はその戦力を日本に集中させることができます。中国が我が国の味方である限り十分にチャンスがあります」

2人の主張は共通していた。

「つまり問題は中国の動向ということですか」

金幽霊が指摘した。

ニューヨーク 国連本部

徹夜での安全保障理事会の協議を終えた各国国連大使の面々の多くは国連本部内のレストランへと向かい遅い朝食を摂った。アメリカ

カ大使もその1人で、多くのスタッフとともに世間話をしながら食事をしていた。

そこへロシア大使がやってきた。

「2人でいいかな？」

アメリカ大使は無言で頷くと、他のスタッフに立ち去るように促した。スタッフが立ち去るとロシア大使はアメリカ大使と向かい合う形で座った。

「攻めあぐねているようだな」

「長期戦は覚悟のうえさ。むしろ好都合だ」

ハンバーガーを頬張りながらアメリカ大使は言った。

「だが日本政府は堪らないだろう。長期戦になればなるほど危うい立場になる」

それを聞くとアメリカ大使は目の色を変えた。

「なにが言いたいんだ？」

ロシア大使を睨みつけながら詰問するようにアメリカ大使は問いかける。

「怖い顔をするな。ただ耳寄りな話があるというだけだ」

「耳寄りな話？」

「高麗と中国の間を取り持つ人物が明後日に消える」

それを聞いた瞬間、アメリカ大使は目を見開かせた。それから周りに目を向けて会話を聞いている者が居ないか探った。盗み聞きをしている者がいないことを確認すると、改めてロシア大使と向き合った。

「どういうことだ？」

「文字通りの意味さ。高麗と中国の間を取り持っているのは1人の将軍だ。彼が居なくなれば2国の連携は難しくなる。君たちの付け入る隙ができるってことさ」

アメリカ大使はロシア大使の説明に納得していないようであった。「なるほど。しかし、君たちにどんな得がある？どうしてこんなことを」

「中国が高麗と仲良くなつて欲しくないのさ」

それは納得のできる説明であつた。中国と高麗が友好関係を保てば、中国は東北地域においてはロシアにその戦力を集中することが出来る。

「だから我々は中国と高麗の関係を壊す。これを利用して高麗に新米政権を樹立すればいい。その方が我々にとつても幾分マシだ」

「なるほどな」

「そして理由はもう一つある。長期化することによつて君たちが事態打開のために中国に飴を与えようなどと考えると困るのだ。武器輸出とかな」

それを聞くとアメリカ大使は首を横に振つた。

「おいおい。そんなことあるわけないだろ？」

「だが君たちはかつてイランに武器を輸出していたじゃないか！」

ロシア大使が持ち出したのは、レーガン大統領時代にレバノンでヒズボラの捕虜になつたアメリカ軍兵士救出の為にヒズボラの支援をしていたイランへ武器を輸出した事例である。俗に言うイラン・コントラ事件だ。

「前大統領はともかくとして、今の大統領はそんなことはしないさ」

「さて、どうだかね。生憎だが私は人を見る目がないのだ」

2人とも笑つた。

「それじゃあ言いたいことはすべて言つた。私はこれくらいにする」

ロシア大使が立ち去ると、代わつてスタッフたちが戻つてきた。

「どういふ話でしたか？」

スタッフ達の代表が不安げな表情で大使に尋ねた。それに対して大使はえらく上機嫌で、それがスタッフ達を安心させた。

「ホワイトハウスに向かう。ボスに説明しなきゃならんことがあるからな」

二一・出撃の宴

6月29日 沖縄 キャンプシュワブ

朝日が東から登る頃、沖縄の海に築かれた巨大な要塞から数機のヘリコプターが飛び立とうとしていた。

名護市にある巨大な米軍基地、キャンプシュワブ。その主な使用用途は射撃訓練場としてであるが、最近になって新たな価値が生まれた。それは海上に張り出した巨大な飛行場施設である。

かつて市街地の中にあり、世界一危険な飛行場と呼ばれた普天間基地の代替施設として生まれた名護飛行場は海兵隊航空隊が拠点として利用している。今は対高麗戦の為の後方基地として機能していた。輸送機が頻繁に着陸して、物資を降ろしていく。

その横で目立たないよう待機している2機のMH-60Sナイトホーク・ヘリコプターが停まっている。空母に搭載されて救難任務や輸送任務に従事する目的の機体である。そのヘリコプターのもとへと向かう20人の兵士がいた。完全武装の黒づくめの特殊部隊員である。彼らは沖縄のキャンプトリーに駐留する陸軍特殊部隊グリーンベレーと海軍特殊部隊SEALSの混成部隊であるが、その中に2人の日本人が混じっていた。

隊員たちを乗せたヘリコプターは海上に向かった。事前に指定された海域に到着すると、2機のヘリコプターはその上空でホバリングして会合相手の到着を待った。時間はそれほどかからなかった。すぐに海を割って巨大な潜水艦が浮上した。

その艦はオハイオ級原子力潜水艦第2番艦ミシガンである。かつてトライデント戦略核ミサイルを装備してアメリカの抑止力の一翼を担っていた戦略原潜であった。しかし冷戦の終結と対テロ戦争の始まりが時代遅れになった戦略原潜に新たな任務を与えることになった。

ミシガンは全てのトライデント弾道ミサイルが撤去され、替わり

にトマホーク巡航ミサイルが装備された。搭載量は全部で154発である。水上艦を含めてどのアメリカ艦よりも多くのトマホークミサイルを装備できるのだ。さらに特殊部隊潜入用の小型潜水艇を搭載でき、海軍特殊部隊SEALSの海中母艦としても機能する。冷戦の象徴であった戦略原潜は改装を経てポスト冷戦時代の最前線を戦う船へと生まれ変わったのである。

2機のヘリコプターはそのミシガンに降下した。ミサイルハッチが並ぶ甲板にヘリが着陸すると完全武装の特殊部隊員が次々と降りてきた。全員が降りて機体から離れていくのを確認するとヘリコプターはすぐに飛びたち、何事もなかったかのようにキャンプシユワブへと戻っていく。

後に残された特殊部隊員たちは水兵に案内されるまま艦内に入った。そしてすぐにミシガンは水中へと消えた。浮上してから5分も経っていなかった。

発令所に案内された特殊部隊員たちを待っていたのはミシガン艦長のボーエン大佐であった。SEALSの最先任である少佐が代表として一団から前に出て覆面を捲りボーエン大佐と握手を交わした。

「少佐。久しぶりだね。実戦任務は1年ぶりかな？」

「はい。今回もよろしく願います」

「それで日本からのゲストというのは？」

ボーエンが尋ねると少佐は一団の中から2人を指し示した。その2人は少佐と同じように覆面を捲くって顔を見せた。2人とも日本人で、先任の陸曹が前に出て名乗りあげた。

「陸上自衛隊所属、1等陸曹、黒部幸正です」

福岡撤退戦で桜井とともに戦った特殊作戦群の戦士、黒部1曹である。

「よく来てくれた。ともに戦えて嬉しい限りだ。早速、作戦計画について検討をしたいのだが」

ボーエンはそう言って海図台に広げられている海図を指し示した。広げられているのは対馬一帯の海図であった。

五島列島沖 第1護衛隊群

旗艦【ひゅうが】を筆頭に8隻の護衛艦より成る第1護衛隊群は自衛隊による高麗軍への反撃作戦の一翼を担うべく東南アジアから急遽北上してきたが、いまのところその役目を十分に果たしているとはいえなかった。彼らの目下の任務は高麗海軍の更なる攻撃を阻止するというものであったが実質的にはただの待機状態であった。

しかし、それも仕方がないことである。空母を持たない海上自衛隊が行動できるのはどうしても航空自衛隊の援護下に限られる。しかし肝心の航空自衛隊が守勢に立っている現状では反撃作戦など実行のしようが無かったのである。

そのような有様で隊員達の士気は下がる一方であった。それは群司令官である水無月海将補も同様で、同じ海域をクルクルまわるだけの任務にはいいかげんウンザリしていた。しかし現状では艦橋に立ち変わらぬ海の眺めを見ている他になかった。そこへ幕僚長の藤堂1佐が現れた。

「水無月海将補！護衛艦隊司令部より新たな命令です」

藤堂に連れられて水無月は【ひゅうが】のCICへと下りてきた。そこには【ひゅうが】艦長の相田1佐をはじめとする群と艦の主要幹部が集まっていた。

「それで命令とは？」

水無月が尋ねると相田は一枚の命令書を手渡した。

「護衛任務？」

「沖縄で待機しているストライカー部隊の物資を積んだ貨物船を護衛せよ、ということだそうです」

藤堂が説明した。台湾有事に備えて沖縄にはストライカー旅団戦

鬪群の装備を載せた事前集積船が待機している。それを九州まで守れということだ。

「そうか。ようやくそれらしい任務が与えられたわけだな」

水無月がそう言うと、幹部達は頷いて同意した。その顔は誰もが新たな任務への意欲の高さを示していた。

「よし。藤堂。必要な情報を集める。まず天候だがどうだ？」

指示を受けた藤堂は早速手元の資料から必要な情報を見つけた。

「明日以降、また雨になるようですね」

ロシア ベロゴルスク

中国との国境、アムール川に面する都市であるブラゴヴェシチエンスク。そこから北東に約100キロのところ、ベロゴルスクがある。国境の後方にあるこの街は昔から軍都で、現代もロシア地上軍第35軍の司令部が置かれている。

太陽が西に沈んだ頃、街の郊外にある飛行場は慌しくなっていた。ここはソ連軍が冷戦時代に建設した戦時に臨時の基地として利用するための施設である。その格納庫に13人のスペツナズ隊員とヘリコプターが待機していた。ヘリコプターはカモフKa-60で西側のUH-60ブラックホークに近い戦闘員14名を載せることができる多用途ヘリコプターである。十分な輸送能力があり、かつ適度にコンパクトで軽快なので潜入任務にはもってこいの機体である。格納庫には大きな机が1つ置かれていて、そこに黒河周辺の地図が広げられ潜入部隊指揮官のコンドラチェフ大尉とパイロット、それにSVR特殊作戦課主任が最後のチェックをしていた。

指揮官の検討会が終わると次に隊員全員参加のブリーフィングが始まった。隊員たちが机の周りに集まり作戦内容を改めて確認した。「着陸地点はここ。そこから徒歩で目的地まで進出して目標を捕獲する。脱出地点はここ。ヘリで回収する。空軍が全面的にバックア

ップをする予定だ」

隊員達は計画も地図もしっかり暗記している。なんの問題も無かった。

「目標である白将軍が国境警備隊を視察するのは現地時間の午前8時頃だ。暗いうちに現地に潜入する。日付が変わると同時に出撃だ。最終準備にかかれ！」

コンドラチエフ大尉がブリーフィングを締めくくると隊員たちは散らばり、それぞれの荷物を置いてある場所まで駆けて行った。それから銃の点検を行い弾倉を装填して、背囊を背負い、また集まった。

完全武装で整列した隊員達を前にしてコンドラチエフも直立不動の姿勢でその時を待った。手元の時計を見ると日付が変わろうとしていた。

「よし。出撃だ」

13人の兵士達がヘリコプターに乗り込み、北九州有事における日本の運命を決める一日が始まった。

二二・白守信將軍捕獲作戦

6月30日 アムール川

日付が変わると同時に中国とロシアの国境は俄に騒がしくなった。ロシア空軍の戦闘機、攻撃機が一斉に発進して、国境線付近で騒ぎ始めたからだ。国境を超えることはなかったが、中国軍はその動きに警戒を強めざるをえなかった。

中国空軍戦闘機も次々とスクランブル発進していった。ほとんどがMiG21の中国版である殲撃7型であったが、少数ながら虎の子として温存されていたSu-27の姿もあった。

国境上空は双方の戦闘機が入り乱れ、レーダーはそれらを示す輝点で埋め尽くされていた。だから中国側に超低空飛行で領空に侵入してきた1機のヘリコプターの存在に気づく者がいなかったのも致し方ないことであった。

アムール川を越えたことでKa-60のパイロットは一息つくことができた。川の上空は障害物が少なく最も中国のレーダーに捉えられやすいからである。陸地の上空に出れば山や建物、あらゆる物を障害物として利用することができる。その分だけ高いテクニクを要するが、ロシア軍の中からさらに選抜されたパイロットはそれを難なくこなす腕前があった。

パイロットは暗視装置を頼りにライトなしで真つ暗闇の中を操縦している。超低空を、木々や家などの障害物をギリギリで避けながら前進していく。もし昼間であったならば、キャビンから手を伸ばせば届きそうな距離を障害物が次々と駆け抜けていく光景を眺めることができた筈だ。さながら遊園地のアトラクションのような趣があるが、アトラクションと違って安全はパイロットの腕以外はまったく保証されていない。

Ka - 60は幾つかの山を越えるとホバリング状態 といつても高度は数メートル程度 で待機した。ロシア版GPSであるグロナスが表示す座標では既に特殊部隊の出発地点近くに達しているはずである。

すると前方で何かが光るのが見えた。だがパイロットが暗視装置を外すと光は見えなくなる。もう一度、暗視装置を装着するとまた発光が確認できた。肉眼では確認できない赤外線ライトによる合図である。パイロットはKa - 60をライトのすぐ上空まで動かした。キャビンのドアが開かれ、ロープが地面に向けて垂らされる。ザスローン隊員達は次々と滑り降りていった。下で彼らを出迎えたのはSVRの潜入情報員であった。

「なにか変わったことは？」

コンドラチェフが尋ねると情報員は首を横に振った。

「いや。予定通りに決行してくれ」

それだけ言うと情報員は赤外線ライトを片づけ、そそくさと立ち去った。ヘリコプターも元来た道を辿って帰途についた。13人のスペツナズ隊員は敵中に孤立した。

コンドラチェフは部下が装備を整え整列したのを見ると、1人の隊員を指名した。

「ミーシャ。先頭を行くんだ」

小柄な狙撃手であるミハイル・チェーホフである。ミハイルは黙って頷くと、先頭を進んで森の中に入っていった。時刻は午前0時40分であった。

ザスローン部隊は物音1つ立てずゆっくりと、しかし確実に前進していった。意外なこともかもしれないが彼らは暗視装置を装着していなかった。暗視装置を使えば視野が狭まるし、彼らは夜目を効かせる訓練を積んでいたからである。

すると先頭に行くミハイルが立ち止まり右手を上げた。それを合図に隊員たちが一斉に伏せて銃を構える。暫しの静寂の後、進行方向にある草むらが動き、その向こうから熊が姿を現した。ザスロー

ンの隊員たちは動じることなく銃を構えたまま待機した。熊は特殊部隊員の発する独特の空気に怖気づいたのか、そのまま彼らに背を向けて立ち去った。

それからミハイルを先頭に特殊部隊員たちは何事もなかったかのように再び前進を始めた。

東の空が白み始めた。コンドラチェフ率いるザスローン部隊はようやく目的地に到達した。国境警備部隊の詰め所である。それを見下ろす丘の木々に隠れながら様子を伺うと、警備兵が見えるが、それほど多くはない。

「視察後は警備兵たちの緊張が緩むだろう。目標を確実に確認するためにも、襲撃は帰り道を狙う」

コンドラチェフは丘の一角を指し示した。

「狙撃班はここで監視につけ。詰め所の奴らが將軍の増援に向かったら妨害するんだ」

ミハイル率いる狙撃班は無言で頷いた。

「交信は衛星電話を使う。合図があり次第、監視陣地を放棄して指定の地点に集合」

狙撃班はコンドラチェフの指示を聞き終えると、早速準備にとりかかった。監視点を決めると下の中国兵に見つからないように注意しつつ器材を配置する。

コンドラチェフは残りの隊員を引き連れて森の中へ入った。襲撃地点へと向かったのだ。

太陽が姿を現し、日光が警備部隊詰め所を照らしている。將軍を迎えるべく警備部隊の将兵たちが詰め所の前に並び待機している。それを見下ろす丘の上でミハイルたち狙撃班は完全に自然の一部になっていた。ミハイルの操るポルトアクション式狙撃銃SV-98を詰め所に向けている。その隣で観測手が双眼鏡で周辺を監視して

いる。さらにその横では機関銃手がPK機関銃を構えつつ、衛星電話と繋がるイヤフォンマイクに耳を傾けている。

ミハイルは機関銃手の顔色が変わったのに気づいた。緊張して顔が張り詰めている。なにか指示が入ったようだ。

「車が来ます。おそらく目標かと」

襲撃地点で道を見張る本隊から情報が入ったようだ。襲撃は帰り道に行なわれる。將軍がどの車に乗っているかを知らせるのがミハイルたちの役目なのである。

やがて狙撃班の視界の中に將軍のものとかわしき車列が現れた。

中国軍の軍用四輪駆動車が3台で、3台とも詰め所の前で一列に止まった。

「どの車だ」

双眼鏡を覗く観測手が思わず呟いた。ミハイルもSV-98のスコップ越しに車を睨む。

まず降りてきたのは10人前後の護衛兵である。彼らが車を取り囲み安全を確認すると、真ん中の車から将官らしき軍人が降りてきた。

「見つけた。たぶんあいつだ」

白將軍は待ち構える警備部隊の将兵に敬礼すると、駆け寄ってきた警備部隊の指揮官と会話を交わしながら詰め所への消えた。

30分後、詰め所から將軍と警備部隊指揮官が姿を現した。この時、ミハイルたちははじめて將軍を正面から見る事ができた。その顔は基地で見せられた白守信將軍の写真とまったく同じであった。將軍が到着する時と同じように将兵が整列し、將軍は振り向いて兵士達に敬礼をした。そして3輦のうち真ん中の車に乗り込んだ。

「報告しろ。將軍の車列が発する。將軍は2輦目だ」

ミハイルが命令し、機関銃手が衛星電話で本隊に報告する。そうしている間に將軍を乗せた車列は兵士達に見送られながら詰め所の

前を出発した。

コンドラチエフは狙撃班の報告をトランシーバーで分散している各突入班に知らせた。

「將軍は2輛目に乗っている。護衛は1個分隊だ。作戦は予定通りに決行する」

それから数分待つと、自動車のエンジン音が聞こえてきた。コンドラチエフは双眼鏡を持って音の方向に目を凝らした。目にしたそれは間違いなく將軍の車列であった。

車列はまさにコンドラチエフの前を通り過ぎようとしている。その時、先頭の四輪駆動車が閃光の中に消えた。爆発音が轟き、後続の2輛が慌てて停車する。道路脇に設置された仕掛け爆弾が爆発し、先頭車を吹き飛ばしたのだ。

予想通り、將軍の車列が出発するとともに警備部隊の緊張の糸が途切れたようだ。將軍で迎えのために増援された兵たちが原隊に復帰すべくトラックに乗り込み出発した。爆発音が聞こえてきたのは、まさにその時であった。

その音は詰め所にも届いた。突然の出来事に警備兵たちは驚き騒然としている。しかし彼らも訓練された兵士だ。すぐに落ち着きを取り戻し、状況を偵察して將軍の安否を確認すべく兵士たちが車に乗り込む。しかし彼らが任務を達成することはなかった。

兵士を乗せた四輪駆動車が発進した。しかしすぐに車はふらつきそのまま詰め所を囲む塀に突っ込んだ。運転手は眉間を狙撃され即死だった。

その様子を見ていた警備部隊の指揮官は状況を掌握しようとするが、意味を察すると同時にSV-98が放った7.62ミリx54R弾に頭を撃ちぬかれた。

「狙撃手だ！」

兵士の1人が叫んだ。それは的を射た推察であったが、指揮官を失った状況ではパニックを引き起こす効果しかなかった。

二二二・白守信將軍捕獲作戰（後書き）

感想欄において第1部、第2部双方に対して突っ込みがありましたので、その一部を修正しました。残る部分については全体の見直しをあわせて修正を目指すつもりです。

二三・脱出

先頭車を破壊された將軍の車列は急停車した。そして詰め所に逃げ込むべく後退しようとした。しかしそれは叶わなかった。ザスローン部隊の1人が最後尾の車に対戦車ミサイルを発射したからだ。

その隊員は最初から9M131メチスM携帯式対戦車ミサイルの発射装置を標的の車に向けていた。最初の爆発で車列が急停車すると隊員は素早く最後尾の車に照準を合わせて発射ボタンを押した。

ミサイルは後ろに誘導ワイヤーを引きながら車に向かって飛んでいった。ワイヤーから送られたデータに基づいてミサイルは正確に車に向かう。そしてミサイルは車のエンジン部に見事に命中した。

前後にも逃げられなくなった將軍車は立ち往生した。護衛兵が車を飛び出して、將軍を守ろうとする。先頭車と後尾車の生き残りも加わる。だが無駄な努力であった。

ザスローンの隊員達はAS Val消音アサルトライフルで將軍の護衛兵を1人1人撃ちぬいていった。中国の護衛兵たちはカラシニコフ小銃を乱射しているので、銃身と一体化したサプレッサーによって最小限に抑えられたAS Valの銃声とマズルフラッシュを見つけるのを甚だ困難にした。

次々と倒れていく護衛兵たちを白將軍は車中から黙ってみているしかなかった。

それを森の中から覗いていたコンドラチャフは頃合と感じた。

「アルファチーム。突入しろ！」

2つある突入班のうち1つが身を隠していた木々の中から飛び出した。もう片方の突入班が行なう援護射撃の下、將軍の車に飛びつく。残った護衛を片づけつつ、ドアのロックに小型爆弾を仕掛けて爆破し、無理やりこじ開けるとその先に縮こまっている將軍の姿があった。

真っ先に突入したザスローン隊員は記憶していた將軍の顔写真と

一致していることを確かめると將軍を車から引き摺りだした。頭に麻袋を被せ、両手首を背中であとめて荷造り用の結束バンドで拘束した。

その様子を見届けたコンドラチェフは隣で待機する通信手の肩を叩いた。

「司令部に報告。捕獲成功だ。それと狙撃班を呼び戻せ」

ミハイルはボルトハンドルを動かして空薬莖を排出し新たな銃弾を薬室に装填した。その間にも観測手は新たな目標を探していた。

「ジープの後ろに下士官が1人居る。距離は520メートル。風は西から吹いてる」

観測手の報告を聞き、ミハイルはその方向に新たな銃弾を装填したばかりのSV-98を向けた。次の瞬間には引き金を引いて、部隊を掌握しようとしていた任務に忠実な下士官の後頭部を撃ちぬいた。

新たな戦果をあげたミハイルは次の目標を探した。肩を叩かれたのはその時だ。叩いたのは通信担当の機関銃手だった。

「本隊の任務が成功しました。合流地点に集合せよ、とのことですがそれに続いた観測手が双眼鏡で新たな目標を監視しつつ言った。「なんにしろ、そろそろここからずらからないと」

ミハイルも観測手がなにかを見つけた方向に銃口を向けた。照準スコープは兵士を満載したトラックの隊列を見つけた。さきほど原隊に戻るべく出発した將軍出迎え部隊が異常を知って戻ってきたのだ。

すばやく先頭のトラックの運転手に照準を合わせるとミハイルは引き金を引いた。

運転手を失ったトラックはコントロールを失い横転した。後続のトラックも急停車して車列は立ち往生した。

「撤退する」

ミハイルの命令を聞いて観測手は観測機器と衛星電話を片づけはじめた。機関銃手はPK機関銃を構えて撤退の援護射撃の準備をする。ミハイルはSV-98を背中に背負い、ドラグノフ狙撃銃に持ち替えた。ドラグノフはSV-98ほどの精密さはないが、セミオート式であり連射ができるのが強みだった。

その間にもトラック隊から兵士たちが次々と降りてきて狙撃班が隠れる丘に向かってくる。機関銃手がPKを浴びせて、ミハイルは指揮官を狙う撃つ。

中国兵の足並みが乱れたところで撤退が始まった。観測手が先頭になってまず退く。機関銃手がそれに続き、最後にミハイルが森の中に消えた。

集合地点では既に捕縛した將軍を引き連れたコンドラチェフらの本隊が集まっていた。1人の死傷者も出すことなく任務を終えた彼らだが、それで安心して気を緩めるといふことはなく、今も円陣防御を敷いて敵襲に備えて周囲を警戒している。

その時、周りを監視していた隊員の1人が何者かの気配に気がついた。その隊員は分隊内無線機の発信ボタンを押した。

「集合地点より3時方向、300メートルに居るのはニンファか？」

すぐに無線機から聞きなれた仲間の声が聞こえた。

<ダー^{イエス}。ニンファとは呼ばないで欲しいのですが>

そこへコンドラチェフが割り込んだ。

<追っては？>

<撤きました。今、出て行きます>

すると茂みの中に3つの人影が現れた。ミハイルたち狙撃班である。これでザスローン部隊の潜入班が全員揃ったわけだ。

「よし。脱出地点に向かう」

14人の人影は迎えのヘリコプターがやってくる平地に向けて歩き出した。

Ka-60ヘリコプターは再び中国の領空を侵犯した。ロシア空軍が国境線各地で挑発行動を行い、中国防空部隊の目を誤魔化している間に超低空飛行で山岳地帯を駆け抜けていく。

やがて山中に開けた場所を見つけた。そこが脱出地点である。Ka-60が降下して地面に近づくと、木々の中からザスローン隊員たちがゾロゾロと姿を現れた。

Ka-60のラフディングギアが地面に触れる。しかし触れただけで完全に着陸したわけではない。すぐに離陸できるようにローターは回り続けていて、地面にはほとんど力がかかっていない。ようするに高度ゼロでホバリングしているような状態なのだ。

ザスローン隊員たちは白將軍を連れて次々とKa-60に乗り込んだ。指揮官であるコンドラチエフが最後に乗り込み、パイロットの肩を叩いて離陸を指示した。

国境よりロシア側に100キロの上空に巨大なレドームを載せた大型機が飛んでいた。早期警戒管制機メンステイのNATOコードネームで知られるロシア版AWACS、A-50である。

A-50の本来の任務は防空支援であるが、今は副次的な任務が与えられていた。それはSVRの秘密作戦の支援であり、この時にはA-50のクルーに混じって通信中継の為にSVR要員が乗りこんでいた。

作戦の詳細が空軍の乗組員たちに知らされることは無かったが、その表情の変化から作戦は首尾よく進んでいるのだと知った。レー

ダー画面を見ても特殊作戦に参加しているヘリコプターを示す輝点が北上していて、帰途にあることを示している。

「ん？」

オペレーターの1人がヘリに向かって接近する別の輝点を見つけた。速度からして、おそらく戦闘機のようなものである。

「迎撃を受けているぞ」

Ka-60のキャビンに乗るザスローン隊員たちは突然の急降下に驚いた。

「何事だ？」

コンドラチェフの問いに対してヘリコプターのパイロットは冷静さを保とうとしていたが、その努力はあまり報われていなかった。

「中国の戦闘機だ」

Ka-60は谷の底すれすれを木々や建物を避けつつ高速で飛行した。これならば地面からのレーダー反射に紛れて戦闘機の追跡をかわす事ができるだろう。だが赤外線センサーを使われれば分からない。そして中国には優れた赤外線センサーを搭載した戦闘機が存在する。母国ロシアが輸出したSu-27フランカーとその派生型である。

そして、このときKa-60はその最悪の相手に捉えられていた。それを示すようにKa-60の警戒センサーが警告を発した。

「レーザー検知！捕捉された！」

敵の発する熱を捉える赤外線センサーはレーダーと違い距離を測定できないという弱点を抱えていた。それを補うためにSu-27にはレーザー測距装置が搭載されている。

「敵はSu-27だ」

その情報は上空のA-50に直ちに伝えられた。A-50のレーダーシステムはヘリコプターに襲い掛かるうとする2機の戦闘機を捉えていた。SVRの要員はその光景を見て青ざめていた。

一方、空軍のオペレーターたちは冷静であった。空軍はこの作戦にあわせて不測のトラブル対処の為に火消し部隊を待機させていた。オペレーターたちはただちにその部隊へと通じる回線に無線の周波数を合わせた。

A-50からさらにロシア側に50キロの空域で2機の戦闘機が飛んでいた。

2機の戦闘機が所属するのはモスクワ近郊の防空部隊で、そこから8機の戦闘機が派遣されており、交替しながら常時2機の上空待機態勢を続けていた。

< 出番だ。以降の指示はAWACSから受ける >

地上の司令部から指令を受けると2機の戦闘機は翼を翻して、針路を南に向けた。それからアフターバーナーを噴かして国境線に向けて急加速した。

2機の戦闘機は従来までの機体と比べると平べったい胴体をしている。翼も御馴染みの後退翼からデルタ翼に近い三角形になっていて、2つの垂尾翼は外側に傾いていた。任務中にも関わらず翼の下にはミサイルの姿はなく、それらの装備は機体内に格納されていることが想像される。そういった、いかにもステルス機という印象を見る者に与える機体であった。

その戦闘機の正式名称をSu-41というが、それは空軍への制式採用に伴ない新たに与えられた名前である。それ以前には開発元のスホイ社の試作番号であるT-50か、空軍の開発計画の名である“戦術空軍向け将来戦闘複合体”の略称であるPAK-FAがある。

その機体の呼び名であった。

一三三・脱出（後書き）

というわけでロシア空軍次期主力戦闘機PAK-FA登場です。
機体番号は創作ですが、悪い線ではないと思います。

二四・ロシア版ステルスの実力

中国のパイロットは確かに国籍不明のヘリコプターの尻尾を掴んでいたが、完全に捕捉するには至っていなかった。

ヘリコプターは谷間に逃げ込み突破しようとしている。超低空を低速で進んでいるので、レーダーでは地形や地上の障害物に紛れて探知することができない。赤外線センサーの方は探知することができるが、Su-27とヘリコプターの速度差が大きすぎてすぐに飛び越してしまう。谷間を飛ぶヘリコプターをSu-27の射界に収められるのはほんの僅かな時間だけなのである。

一般に低速なヘリコプターは戦闘機に対して脆弱な存在と見られることが多い。確かに何の警戒もなしに比較的高い高度を飛ぶヘリコプターを狩るのは決して難しいことではない。

しかしヘリコプターには急激な速度変化でも固定翼機のように失速せず、さらにホバリング能力まである。それを生かして地形に沿って超低空飛行。地形追隨飛行もしくは匍匐飛行などと呼ぶ。すれば戦闘機のレーダーで見えるのは困難である。最悪の場合、地上にある木々や建物の陰に隠れるという裏技まで使えるのである。

地形追隨飛行をするヘリコプターは戦闘機パイロットにとって墜としづらい敵なのだ。

中国空軍のSu-27は谷の上空を何度も往復して、ヘリコプターを襲撃する機会を伺っていた。結果として彼らはヘリコプターに気をとられてより危険な敵の接近に気づけなかった。

2機のSu-41はA-50の指示に従いつつレーダーの監視が緩い部分を書いて超低空飛行。当然ながらKa-60とは比べ物にならない高い高度であるが、で中国領空に侵入した。

勘違いをされることが多いが、ステルスはレーダーから見えず

なるのではなく見えにくくする技術に過ぎない。だから敵の使うレーダーシステムについて熟知した上で、その弱点を突くように行動しなければステルス効果を最大限に発揮することはできないのである。

幸いロシア軍は中ソ対立が本格化した1960年代の昔から中国を重大な仮想敵国として位置づけており、中国軍の防空システムに対する情報については多くの含蓄があった。

A-50のオペレーターたちは中国軍のレーダー監視を緩いルートを使って中国空軍のSu-27の背後にまわるように指示した。襲われる中国空軍パイロットは友軍から攻撃されたと思うかもしれない。

Su-41は山々の稜線を掠めるように飛びながら目標を目指した。敵に探知される恐れがあるレーダーに頼らず目視と赤外線センサーに頼ってである。

索敵についてもSu-41自身のセンサーによるものだと赤外線センサー頼りであったが、そちらはA-50AWACSの支援を得られるのでそれほど難しくなかった。コクピットのキャノピーの隅に設置されているIRSTセンサーは断続的であるが、中国空軍機らしき熱源を捉えた。

Su-41のパイロットはステルス戦闘機乗りとして最後まで自機レーダーを使わず、自らの痕跡を晒すことなく任務をやり遂げるつもりであった。2機のSu-41は中国空軍のSu-27の背後につくとIRSTセンサーと連動するレーザー測距装置を作動させて2機の中国空軍機のうち1機との距離を測定した。2機はデータリンクで繋がっていて観測データはリアルタイムで互いに報告される。それぞれ自機の観測データと照合して三角測量の原理により目標との正確な距離を測定することができるのだ。

これで攻撃に必要なデータは揃った。先任のパイロットが敵の1機目に第一撃を仕掛けて僚機がそれを援護すると事前に決めていたので、先任パイロットは迷わずに操縦桿のミサイル発射ボタンに指

をかけた。

兵装はR-77アクティブレイダーホーミング空対空ミサイルを選択する。西側ではAA-12アッダーというコードネーム、もしくはアムラームスキーという渾名で知られるこのミサイルは近距離なら自らのレーダーで敵を捜索して追尾する能力を持つ。

「発射！」

機体下部の兵装ハッチが開き、そこに格納されていたR-77が機内から飛び出る。空中に放たれたR-77は発射前にインプットされた敵機に関する情報を基に弾頭部に備えられたレーダーを起動させて、自ら敵機を探し始めた。ほぼ最適な状況で発射されたミサイルは緒元通りの性能を発揮して敵機を発見した。

それとほぼ同時に敵機のESMがR-77のレーダー波を察知して警報を発したようだ。標的のSu-27は急降下して攻撃をかわそうとした。だがロシアの最新のテクノロジを詰め込まれたR-77から逃れるには、気づくのが遅すぎた。

R-77はSu-27の回避機動にもECMによる電波妨害にも惑わされず敵の尻尾を追いつづけた。その距離は急速に縮まり、発射から40秒後に命中した。ロシアのパイロットは四散するSu-27の姿をその目で見る事ができた。

目標の撃墜を確認すると、もう1機のSu-27の行方を追った。僚機からもA-50からも警告が送られてこないところを見ると先任パイロットの乗るSu-41を狙っているわけではないのは確かだよつだ。

敵の行方を教えてくれたのは僚機からの無線であった。

< 現在、敵機を追尾中！援護してください！ >

先任パイロットが僚機の機影を追うと、その先に急旋回を繰り返して逃走するSu-27の姿を見つけた。必死に逃れようとしているが、無理であろう。Su-41はただステルス性だけが取り得の戦闘機ではないのだ。高機動で知られるSu-27に勝るとも劣らない機動力を発揮して逃走する敵機に食いついている。

僚機の後ろについて援護の態勢をとった先任パイロットは僚機の機体下部の兵装庫が開いてR-73赤外線追尾式ミサイルの弾頭が機外へ突き出るのを見た。今ごろ僚機のパイロットはヘルメットに備えられたヘッド・マウント・ディスプレイ越しに敵機を捉えてミサイルをロックしようとしている筈だ。

するとミサイルが発射された。Su-27は相変わらず左に急旋回を続けており、追尾するSu-41の中心線上から大きく外れて機首から左側50度の方向に居るとい位置関係を継続していた。かつての戦闘機ならこの位置関係でミサイルを発射することはできなかった。

戦闘機が空中戦で攻撃可能な範囲は案外小さい。機関砲については当然ながら銃口の向く方向しか攻撃できないし、ミサイル類も装備するセンサーの搜索範囲の関係から機首正面の限られた範囲しか攻撃できないの普通であつたからだ。しかしSu-41の搭載するミサイルは普通ではなかつた。

兵装ラックから解き放たれたミサイルは通常なら戦闘機の進行方向に沿つてまっすぐ飛んでいく筈である。しかしR-73は横に飛び出した。左側方向50度、Su-27を直指して一直線に飛んでいったのである。

R-73、NATOコードネームはAA-11アーチャー。これこそ冷戦末期に開発されたソ連空軍の切り札であつた。従来のミサイルより広範囲を搜索できる新型センサーを装備してパイロットのヘッド・マウント・ディスプレイと連動させることで機体の中心線上から大きく外れた敵機を追尾・攻撃する能力、すなわちオフボアサイト能力を最初に得たミサイルというのがその正体である。

先任パイロットは僚機の勝利を確信した。Su-41がステルスだけの戦闘機ではないようにR-73もオフボアサイトだけのミサイルではない。翼ではなく直接ジェット噴射の方向を変えて方向転換をする推力偏向ノズルを使った機動力は戦闘機の比ではない。

Su-27は何度も急旋回を繰り返してS字を描きながら逃れよ

うとするが、R-73は執拗に食いついた。急旋回をするときのR-73の航跡はL字を描いていた。フレアをばら撒いても惑わされること無く、R-73はSu-27に突っ込んだ。

前任パイロットは爆発して四散するSu-27の姿を想像したが、現実にはならなかった。R-73に直撃されたSu-27は空を飛びつづけている。

<不発だったみたいです。止めを刺しますか？>

「いや。脅威は排除した。それにどうせ長くはもたない。長居は無用だ。退避するぞ」

逃走するSu-27であるが、不発とはいえ超音速で飛ぶミサイルの直撃を受けて無事なわけがなく、次第に壊れていき部品を空中にばら撒いていた。

2機のSu-41は来た時と同じようにA-50の指示を受けてレーダーに探知されづらい超低空を飛び、ロシア領空を目指した。

2機は無事に国境を超えて勝利に沸く基地に着陸した。そこで情報将校から件のSu-27からパイロットが脱出して機体は墜落したことを知らされた。無線傍受班で脱出したパイロットの緊急信号を傍受したのだという。

2人のロシア空軍パイロットは脱出した中国人の無事を祈った。敵とはいえ同じ空中に生きる者である。それが当然の礼儀であり、パイロットのルールであった。

Su-41の帰還から遅れて20分後にKa-60も基地に着陸した。Su-41のように勝利を祝う出迎えは居なかったが、ザスロン隊員達は任務を完遂した満足感に浸っていた。

ただ1人、白將軍はKa-60のキャビンの中でうずくまり、啞然としていた。それからSVRの情報員2人に連れられていった。

かくして高麗と中国を結ぶラインは断ち切れた。

二四・ロシア版ステルスの実力（後書き）

ようやく山場が1つ終わりました。

“ステルスの実力”というより“ミサイルの実力”みたいな内容になってしまいました。もっと臨場感が出るような書き方ができればいいのですが。それにしてもA A - 11アーチャ、調べれば調べるほど凶悪なミサイルですね。

二五・その頃、日本では

国会議事堂

衆議院の安保委員会が野党の審議拒否により停滞しているとはいえ、別に国は防衛問題だけを扱っているわけでもなく国会は他にも様々な問題について審議をしている。だから今日も安保委員会以外の常任委員会は平常運転をしていて、閣僚たちは自らに割り当てられた部屋で委員会が始まるのを待っていた。

「総理」

菅井官房長官が烏丸首相の部屋の戸を叩いた。

「入ってください」

烏丸が返事をする戸が開き、菅井官房長官、そしてそれに続いて中山防衛大臣が姿を現した。

「何事だね？」

総理の問いに答えたのは防衛大臣であった。

「情報本部が中国軍の不審な通信を傍受しました」

中山は情報本部が傍受した通信文を日本語に翻訳したものを総理に手渡した。烏丸は中に目を通すと怪訝な表情をした。

「つまり、これはどういうことなんだ？」

「どうやらロシアと中国の国境付近で小規模な戦闘があり、その地区を担当する人民解放軍の将軍が行方不明になっているということです」

「それは今の有事となにか関係あるのかね？」

総理の疑問に中山は一瞬言葉を詰まらせた。

「結論を言えば、まだ判断はできません。件の将軍は統一以前より北朝鮮との強い繋がりで知られた人物で、統一以後も高麗政府と関係を維持していた可能性があります。まだ、どのような影響があるかは断言できませんが、注視していく必要があるかと」

それで中山の報告は終わった。次は菅井の出番だ。

「総理。事態收拾後の方針ですが」

「やっぱりそうなるかあ」

社会民主党が野党と連携している以上、平常な政権運営は不可能である。野党が不信任を提出すれば確実に可決する状況なのだ。さすがに有事が続く間はあからさまな行動はしないだろうが、事態收拾後になんらかの行動に出てくるのは明らかである。

現内閣の支持率は下がる一方である。マスコミ曰く理由は総理の指導力不足だそうで、野党が一方的に審議拒否をしているにも関わらず防衛出動が承認されないのは烏丸総理の責任なのだという。

民主党を中心に野党は総理の辞任を求めて止まないし、マスコミも堂々とは言わないが暗に烏丸の辞任、そして政権交代を主張している。もちろん、実際に彼らの言うとおりに辞めたら、“無責任だ！”と批判されるのもお約束である。

しかしながら国家の指導者として何らかの形で責任をとらなければならぬのも事実だ。そして、野党を納得させて有事を円滑に処理するためにも、その方針を提示すべきであるし、その時が来たというのが菅井の判断であった。

「個人的には辞任するのが筋だと思うが、君たちは困るだろうか？」

総辞職をすれば民主党内閣の成立は確実で、自由民権党は野党となる。そしてここにいる全員が民主党は日本を背負っていけるとは思っていないかった。

「解散して打って出るしかないが、君たちは勝てるのかな？」

「現状では難しいでしょうな。でも、しないわけにはいきません」

「そして、それを宣言しろということだね」

菅井は頷いた。

「ただし具体的な時期は明言すべきではありませんな。あくまで事態收拾後に。この有事を終わらせた後で無いと、わが国の政治は大変なことになります」

言い終えたところで時間が着た。これから彼らは予算委員会に出席しなければならない。

福岡市 油山

開戦初日に桜井と黒部、それに荻原たち民間人たちが決死の脱出行をした油山は、平時には森林に溢れている市民の憩いの場として機能していた。中腹には展望台もあり、夜景の名所として知られている。

展望が良いということは市内の様子を探るには丁度良いということとで、偵察隊の拠点が築かれるのも必然であった。

ワトソン少尉率いる偵察班が市内を一望できる油山の中腹に観測拠点を設けてから丸二日が経った。彼らは高性能望遠装置と衛星電話を持ち込んでいて、市内の高麗軍の様子を上層部に伝えていた。市内の高麗部隊の配置をあらかじめ通報し終えた彼らが目下のところ注目しているのは博多港であった。

高麗軍の福岡占領以来、博多港は高麗軍にとって重要な補給拠点となっている。毎日、高麗から補給物資を積んだ貨物船が入港するのである。今のところ日本側はそれに対して碌な妨害をしていなかった。

理由はいくつもある。航空自衛隊が現在の自軍勢力圏の防空を第一とし、戦力温存のために攻勢を控えているので対馬海峡上空の航空優勢は高麗側が握っていた。それ故に海上自衛隊も待機を余儀なくされていたのだ。

また対馬海峡には多くの中立国船舶が航行していたことも日本側の補給遮断攻撃を躊躇させていた。第3国を巻き込むことになれば外交上不利になりかねない。

しかし、そうした状況は好転する気配があった。前者については政府が防衛出動の国会承認に向けて動いている。それが通れば守勢にまわっていた部隊も積極的な作戦ができるようになる。後者についても開戦から時間が経ち、対馬海峡から中立国船舶が姿を消しつ

つあった。戦場であろうとかまわず突っ込んでくる無謀な船が無いことも無かったが、それは極少数であった。

そして攻撃が始まればワトソンら偵察班の情報が威力を発揮するに違いない。彼らは博多港に入港して軍事物資を降ろしている船の船名と特徴を記録し、それを降ろされた物資の内容とともに報告していたのである。

「どうやら単なる補充ではなく増援部隊が到着したみたいですね」
望遠装置で博多港に停泊するカーフェリーを監視していたヒューイットが呟いた。彼の目には埠頭に渡されたランプから次々と戦車が降りてくるのが映っていた。それも見慣れたK1A1ではない。より大きな戦車である。

「これでK2が丸々1個大隊上陸したことになる。間違いない」
マルキーニが戦車の数を記録したメモ用紙を見ながら言った。昨日から戦車部隊と機械化歩兵部隊が上陸を開始した。損失の補充としては多すぎる数字である。高麗軍は新たな部隊を日本に送り込んだのである。

「それも精鋭部隊だ」
K2 フアクレニコ 黒豹は高麗の最新国産戦車である。重量は55トンで主砲は55口径120ミリ滑腔砲を装備する。データリンクやアクティブ式ミサイル防御システムなどの最新の機材を搭載されたハイテク戦車だ。

さらにK21歩兵戦闘車の姿も確認できた。40ミリ機関砲と対戦車ミサイルを装備する強力な装甲車両である。

どちらも強力な分だけ高価であり、高麗軍内でも装備する部隊は限られる。どれも精鋭部隊である。

こうした新部隊の出現はただちに上層部へと報告された。

博多湾の補給船団を監視する者はワトソンらの海兵隊偵察部隊だけではなかった。

海上自衛隊の潜水艦<こつりゆう>である。玄界灘の海底に潜み、博多港に出入りする船の動きに耳を澄ませていた。入港する船の数、時間を記録して、定時連絡の時間には潜望鏡深度に浮上して衛星回線経由で潜水艦隊司令部に報告するのである。

時折、高麗海軍の哨戒艦艇が頭上を航行して乗組員たちを緊張させることがあったが、発見されることはなく<こつりゆう>は恙無く任務を実行していた。そして、また定時連絡の時間が近づいていた。

「浮上用意。潜望鏡深度」

中曽根は発令所で指揮を執っていた。敵中での潜望鏡深度は大きな危険が伴うので、どんな時間でも関係なく当直士官ではなく艦長である中曽根が直接指揮をすることにしていた。

「前進微速。潜航舵、上げ舵」

ある程度速度を得ないと舵が利かないので、潜航や浮上の際にはモーターを回して舵が使える最低限の速力を出さなくてはならない。

「取り舵。回頭90度」

浮上中の回頭も毎度恒例の儀式となった。なぜわざわざ浮上中に回頭をするかと言うと、索敵のため、発見していない敵艦の感知をするためである。

勿論、<こつりゆう>のソナーマンはいかなる時にも耳を澄ませて敵の痕跡を追っているし、敵の存在を聞き逃すことはないと中曽根も信じている。が、いかなる者にも死角というものは存在する。潜水艦の場合は真後ろだ。スクリーンがあり、航行中には自艦の騒音しか聞こえない後方を聴くソナーは搭載されていない。水深のある海域を航行する場合には曳航式ソナーを艦尾から後ろに流すことで補うことができるが、浅瀬でほとんど着底しながら任務を遂行している状況ではあまり役に立たない。

故に回頭して横向きになり、後方にソナーを向けて安全を確認す

るのである。よくソ連の潜水艦が航行中に突然急旋回を繰り返して追尾するアメリカ潜水艦を驚かせて“クレイジーワン”などと呼ばれたが、それもやはり後方の安全確認のためで、<こうりゆう>も同じ事をしているのである。

「ソナー感！潜水艦が接近！」

「機関停止！深度保て」

ソナーが高麗の潜水艦を探知し、<こうりゆう>の全てが止まった。モーターは停止し、乗組員たちは沈黙して静寂を保とうとする。「目標は我々に気づいたか？」

中曽根がソナーマンに尋ねるが、答えはなかなか返ってこない。暫くしてようやく返事が聞こえてきた。

「目標は針路、速度ともに変更なし。博多湾に向かっています。まもなく横を通り過ぎます」

どうやら気づかれずに済んだようである。無事にやり過ごせそうだと中曽根は判断した。

「目標は本艦に気づかず通り過ぎました。我が艦に尻を向けて航行中」

つまり高麗潜水艦はスクリーをこちらに向けて航行しているという事だ。自らのスクリー音が邪魔して高麗艦は<こうりゆう>を探知できない状態にある。

「よし、今だ。潜望鏡針路に浮上する」

中曽根は司令部との連絡を優先した。高麗潜水艦を撃沈することもできたが、今や敵の根拠地となってしまう博多港のすぐ外で戦闘をして発見されるリスクは負うつもりは無かった。

「前進微速！」

再びモーターが回転を始め、<こうりゆう>の船体は上昇していく。そして潜望鏡深度にいたらアンテナを海面上に出し、司令部の通信を受信して偵察の報告を送信し、また海底に戻る。そうなる筈であった。だが予定はソナーマンの声によって崩れた。

「高麗艦が回頭しています！」

「機関停止！」

<こつりゆう>が再び沈黙した。高麗潜水艦の艦長も<こつりゆう>と同じように真後ろの安全を確かめなくなったようだ。

「気づかれたか？」

中曽根はまたやり過ぎたことを期待した。

「ダメです。目標は機関停止。無音航行に入りました」

相手も<こつりゆう>と同じように敵艦を探知し、自艦が探知されないように身を潜めたのである。

二五・その頃、日本では（後書き）

世紀末の帝國に引き続き、こちらでも海戦パートです
いままでいいとこなしの海自の活躍をお楽しみください

二六・膠着の玄界灘

玄界灘 高麗海軍潜水艦<チャン・ボコ>

対馬沖で海上自衛隊第2護衛隊群に痛撃を与え、この日韓戦争における最初の戦果をあげた潜水艦<チャン・ボコ>は陸軍の占領下にある博多港に補給の為、入港しようとしていた。

ドイツの傑作潜水艦タイプ209の韓国ヴァージョンであるチャン・ボコ級の一番艦である<チャン・ボコ>は就役から20年以上の歳月が経っているが、その分だけ改良が行き届き機械的な信頼性は高く、優秀な乗員の技量も相まって艦長は自艦に絶対的な自信を持っていた。

また艦長は潜水艦乗りに必要な大胆さと慎重さを兼ね備えた人物であり、入港の前に後方の安全確認をする必要があると感じた。

「回頭、取り舵」

自艦のスクリュウのためにソナーの死角となる後方の安全を確かめるもっとも簡単な手段は旋回することである。あくまで念のための行為であったが、それが<チャン・ボコ>の運命を変えることになった。

「ソナー感！後方にスクリュウ音！」

それを聞いた艦長は反射的に命じた。

「機関停止！無音航行」

艦長が冷静に物事を考えられるようになったのは電動モーターが停止した後であった。

「目標を探知しているか？」

「いいえ。失探しました」

ソナーマンの回答は別に不自然なことではなかった。敵に発見されると思ったら、機関を止めて無音航行に移行する。潜水艦乗りとしては当然のことだ。

「速力は？」

艦長が尋ねると今度は航海長が答えた。

「現在8ノットです」

モーターを停止しても、しばらくは惰性で進む。次第に速力は失われるが、今なら舵も聞く。

「回頭を継続。目標に艦首を向けるんだ」

行動を決めたら、次は手持ちの武器の確認である。次は水雷長に尋ねた。

「兵装はどうなっている？」

「魚雷管全門装填済みです。いつでも発射可能」

幸いくチャン・ボコ>の戦闘準備は万全であった。これで敵が動き出したら、いつでも魚雷を撃ちこむことができる。

しかし問題は相手が動かないことだ。無音航行をする最新の潜水艦をパッシブソナーだけで探知することは難しい。アクティブソナーを使えば見つかるかもしれないが、こちらの正確な位置を相手に教えることにもなりリスクが大きい。

こうなったら先に動いた方が負けで、それはおそらく相手も分かっていることだから我慢比べとなる。その場合は自衛隊の潜水艦に比べて小型な上に、航行を終えて入港しようとしていたくチャン・ボコ>は余裕がないわけではないものの戦う前から酸素もバッテリーも相当消耗してしまっているので不利だ。しかし、博多港は今や高麗軍の根拠地であり、すぐそこに味方の水上部隊がいる。この状況を把握しているとは思えないが、くチャン・ボコ>の入港は通知されているので現れなければ何らかの行動を起こす筈である。

「賭けるしかないな」

かくして玄界灘で潜水艦同士の神経戦が始まった。

国会議事堂 予算委員会

委員会は始めから紛糾した。

予算とは国の行う全ての仕事の根幹となるものである。政治とは予算の配分のことだと言っても差し支えない。それ故に予算委員会は国政について幅広く討論するのが慣例になっている。そして、この日の質疑は総理の責任追及に集中した。

最初に質問の席に立ったのは民主党の最高幹部の1人、かん なおと管尚人議員であった。

「総理。北九州有事への対応がまったく進んでおりません。今、現地にいる自衛隊の皆さんは大変厳しい状況にあります。今まさに有事に対して命をかけて対処しているにも関わらず、法的な裏づけがまったくない状況なのです」

テレビ栄えするようにポーズをとりながら烏丸に対する批判を続ける管を閣僚達は冷ややか目線で見ていた。中山防衛大臣は管議員が“戦闘”や“戦い”といった戦争を連想する表現や高麗を名指しする表現を避けているように感じるのが気になった。

「こうした事態を引き起こした責任は総理の指導力のなさに他なりません。自身の行為のために多くの国民を傷つけたその責任をどのように取るのか、この場で明らかにしていただきたい」

そもそも国会が政府に対して防衛出動の承認をすることができないのは民主党の審議拒否のためであるが、管はまるでそんな事実は存在しないかのように振舞った。民主党の議員たちはそんな管に拍手を送った。

閣僚達はこの場でそれを指摘することはできるが、それはあまり意味のないことだ。本人達はそんなことは百も承知で批判をしているのだろうし、テレビは報道の際に閣僚の民主党に対する批判は力ツトしてしまうだろうから国民にも伝わらない。この国の民主政治において真実とはその程度の存在なのだ。

管議員の批判演説が終わると壇上に烏丸総理が立った。烏丸はいくらか社交辞令的な挨拶をした後、本題に入った。

「お話を伺いますと管尚人議員は早急に自衛隊の防衛出動を承認すべきである、とお考えであると受け取りましたが、それならばなぜ

民生党は審議拒否をしているのでしょうか？確かにこの度の北九州有事に起きまして国民の皆様にも多大な被害が生じたことへの責任から免れることはできません。しかし、政府としてまず行うべきは、その被害の原因となつてゐる事態を早急に解決することであり、その為にまず必要なことは自衛隊に対して防衛出動を命じ、上陸した高麗軍部隊を排除することであり、もし民生党議員の皆さんが真に“国民生活が第一”とお考えであるならば、ただちに安保委員会に出席して防衛出動の発動を承認していただきたい！」

意味がないこととはいえ、言うべきことは言っておかなくてはならない。当然ながらその演説が民生党議員の心に響くということはなく、烏丸はブーイングの嵐に晒された。

再び壇上に立った管議員は再び烏丸批判を続けた。

「烏丸総理。繰り返し申し上げますが、このような事態を招いた原因は総理の指導力の無さにあります。それを棚に上げて我々に責任を転嫁するようなマネを見過ぎすわけにはまいりません」

民生党の議員達が再び拍手と声援を送る。

「総理。この場で自らの責任を明確にして、それを何時、いかなる形でとるのか明らかにしていただきたい」

あくまで責任の取り方を明確にすることを求める野党に対して烏丸は覚悟を決めた。菅井に目配せして、相手が頷くのと再び壇上に立った。

「当然ながら、政府として今回の事態に対する責任を免れるということはありません。私は事態が收拾され次第、国会を解散して国民に審判を仰ぐ決意であります」

突然の解散宣言に委員会の室内は静まり返った。

玄界灘 海上自衛隊潜水艦くこうりゅう

膠着状態に陥ってから数時間が経った。お互いに決め手に欠け、

手が出せない状況である。退避しようにも下手に動けば敵に探知され一方的に攻撃されかねない。

「血が沸き肉踊る大海戦つて風にはいかないんだな」

中曽根艦長は発令所の自らの席に立つて呟いた。

「しかし、何時までも続けるわけにはいきませんか？」

隣に立つ副長が指摘した。酸素もバッテリーもまだ余裕はあるが、敵の根拠地を前ににらみ合いというのは気持ちの良いものではない。

「まあ見つかつちまつた以上は任務失敗。中止して退避だな」

こんな無様な様を晒してしまつた以上は昇進の道は断たれたよ、と艦長は心の中で付け足した。

「問題はどうか退避するかですね」

手っ取り早いのは高麗潜水艦を排除することだが、向こうがこちらに感づいている以上は下手に動けない。排除できても博多湾の高麗水上艦に察知される可能性が高く、その危険はできれば避けたかった。

というわけで、<こうりゆう>ができれば取りたい策はこのままこの場を立ち去ることであるが、問題はどうか見つからずに立ち去るかである。

「次に高麗の貨物船が出てきたら、その尻尾についてトンズらするか」

つまり高麗軍の物資を運ぶために出入りしている貨物船の航跡に隠れて逃げようというのである。大型船が通ると、その巨大なスクリーキャビテーションによりソナーが利かない場所が生じる。そこに隠れば高麗潜水艦の探知から逃れられるが、同時に自らのソナーも利かなくなる。

「危険ではありませんか？」

副長は乗り気ではなかつた。下手したら貨物船の船尾と衝突して、二度と浮上できなくなる。

「危険だが、俺はこの艦を信じている。お前達ならやれるさ」

中曽根艦長はあくまで楽観的だった。それを聞いて副長もいくら

か自信が出てきたようだ。

「分かりました。ソナー、湾内の動きに注意しろ」

すぐに博多港の状況が発令所にも届いた。しかし、それは中曽根艦長らが期待したものではなかった。

「湾内の複数の船舶が一斉に動き出しました」

「貨物船か？」

副長が尋ねると、しばしの沈黙の後にソナーマンの答えが返ってきた。

「いえ。ウルサン級です。2隻とも動き出しました。それに掃海艇が1隻、ウルサン級を先導しています。海底に向けてソナーを発信しながら湾外に針路をとっている模様です」

ソナーマンの報告を聞いて副長が言った。

「貨物船の露払いでしょうか？でもフリゲートが随伴するのは珍しいですね」

このようなことは何度かあった。貨物船の安全を守るために付近の海底を搜索するのだ。ただ高麗海軍は補給船舶に対して船団護衛を行うよりも中立船舶に紛れて隠れることを期待して単独行動させることが多かったので、フリゲートまで一緒に出てくることは無かった。

「貨物船に動きは？」

艦長がソナーマンに尋ねると、すぐに返事が返ってきた。

「いえ。まったく」

その返事が意味するのは、今の高麗艦隊の行動が日課となった補給維持の一環ではなく、新たな作戦行動であるということだ。そして、高麗軍が新たな活動を始める理由は1つしか思い浮かばなかった。

「高麗潜水艦を搜索しているのか？」

高麗艦は友軍相撃を防ぐためにも事前に博多港への入港を占領部隊に通知している筈である。そして、今はこうやってくこうりゆう>とにらみ合っている。当然ながら高麗軍は予定通りに潜水艦が現

れないことを不審に思うだろう。

「どうします?」

副長の声がまた強張っていた。海底付近ではソナー効率が悪いくともあり、これまでの掃海艇による先導搜索はやり過ぎしてきたが、3隻のソナーによって徹底的に探索されれば見つからない保障はない。仮に水上艦の方が<こうりゆう>を捉えられなくても、ソナーの反射を高麗艦が捉えて攻撃してくる恐れがある。もちろん反対に<こうりゆう>が高麗潜水艦を反射したソナー音波を捉えられる可能性もあるが、それで攻撃したら水上艦に自らの位置を晒すようなものだ。

「水上艦がこっちに来るまでに決着をつけないとな」

中曽根は覚悟を決めた。しかし、膠着状態を破る手立てが浮かばなかった。

「どうする?」

二六・膠着の玄界灘（後書き）

今日は6月25日です。朝鮮戦争開戦の日であるとともに、遅滞の章掲載開始の日でもあります。気がついたら2年経ってました。できれば今年中に終わらせたいのですが。

二七・福岡沖海戦

国会議事堂 予算委員会

烏丸総理の解散宣言に一瞬、騒然となった委員会室であるが、すぐに平静さを取り戻した。質問者の場所に立っていたのは依然として管議員が立っていた。

「総理。あなたは今、国会を解散するとおっしゃったが、具体的にそれは何時なのか？明言していただきたい」

一度席に戻っていた烏丸は再び壇上に立った。

「ですから、この度の北九州有事に関して收拾の目処が立ちましたら、国会を解散する決意であります」

それを聞いた管議員は首を横に振った。

「総理！あなたは私の質問にまったく答えていらつしやらない！私が訪ねているのは、解散をする具体的な日時であります」

口調が厳しくなる管議員に対して出席する閣僚は困惑した表情で互い目配せした。烏丸は同じ言葉を繰り返せざるをえなかった。

「ですから、この度の北九州有事に関して收拾の目処が立ちましたら、国会を解散すると申し上げました」

しかし管議員が納得する様子はない。

「総理は私の質問の意味を理解しておられないのでしょうか？私は解散の日時を尋ねているのであります。一国の首相が国会の場で宣言するわけですから、どうしても解釈できる曖昧な表現を用いることはあってはならないのです。総理の宣言に実効性を持たせるためにも、明確な日時を提示していただきたい」

管議員の主張に烏丸は耳を疑った。

「管議員。お言葉であります。現状では明確な日時を提示することはできません。この度の事変がいついつまでに收拾されると明確にできるわけでもありませんし、事変が続く最中に解散というわけにもいきませんから、明確な日時を提示するということはできません」

ん」

菅議員は顔色1つ変えず主張を違える気配は見えない。烏丸は1つ譲歩することにした。

「しかし、常識的に言えば事態が收拾される時点というのは、日本に上陸した高麗軍部隊が領土内から退去して自衛隊の防衛出動を解除できる段階になった時と言えるのではないのでしょうか？」

ここで烏丸が述べた“事態が收拾された時点”の定義は彼がこの場において即興で考えたものである。だから振り向いて菅井や中山の顔色を伺った。2人とも頷いて、烏丸の判断を肯定してくれた。

この定義に菅議員が納得してくれば1つ前進なのであるが、それは甘い期待であった。菅議員は総理に対する民主党議員のブーイングをバツグランドミュージックにして問い詰めるように言った。「ですから、はぐらかして話を逸らそうとするのはやめていただきたい。私がお尋ねしているのは、解散の具体的な日時であります！」

玄海灘 高麗海軍潜水艦<チャン・ボコ>

艦長は接近する友軍艦艇に艦長は勝利を確信した。後は水上艦艇に狩り立てられた自衛隊潜水艦を始末するだけである。

「魚雷発射用意！敵が動くと同時に仕掛けるのだ」

膠着状態に陥った今、先に動いた方が負けである。そして今は高麗海軍水上部隊が迫る以上、自衛隊潜水艦は動かざるをえない状況に追い込まれているのだ。

「それと水中電話の準備をするんだ。友軍相撃では話にならないからな」

潜水艦の識別はソナー頼りなので不正確になりがちである。だから自軍の潜水艦を敵と誤認したり、逆に自衛隊艦を敵と確定できず攻撃を戸惑う可能性がある。

しかし、そうした点を考慮しても<チャン・ボコ>の優位は崩れ

ない。自衛隊艦が状況を打開しようと動くの待つだけなのだ。

「ソナー感！自衛隊艦だと思われませう！」

ソナーマンが歓喜の声をあげた。

「スクリュー音です！方位は3 - 5 - 0！」

「魚雷発射用意！」

勝利を目前にして発令所は沸き立っていた。だが、次のソナーマンの声が艦内を凍りつかせた。

「目標より金属音！魚雷発射管扉を開ける音と思われませう！」

自衛隊の潜水艦は魚雷を発射しようとしていた。

「バカな。こちらの位置を知りえるとは思えんが！」

艦長には自衛隊潜水艦の艦長が攻撃を決断できた理由がまるで分からなかった。

「艦長！発射管扉開きますか？」

水雷長が必死になつて艦長に叫んでいたが、艦長の耳には届いていなかった。そして破滅の知らせがソナーマンよりもたらされた。

「ソナー感！高速スクリュー音！魚雷です！」

騒然とする艦内で艦長はようやく正気を取り戻した。

「攻撃中止！機関全速！回避行動！」

<チャン・ボコ>の巨大なモーターがうなり声をあげて動き出した。

「デゴイ射出！取り舵一杯！」

乗組員達は迫りくる魚雷から逃れようと必死に動いた。<チャン・ボコ>の船体は海の中を急激に動いたので、ソナーの効力は著しく低下した。それが彼らの命取りになった。

しばらくしてソナーが回復し、ソナーマンがそれに気づいたがいささか遅すぎた。

「艦長！発射された魚雷は明後日の方向に向かっています！」

海上自衛隊潜水艦<こうりゅう>

「2番、3番。発射！」

艦長が命じるとともに、水圧で発射管から魚雷が射出される。魚雷を発射した分だけ失われた重量を補いバランスを保つ為にツリムタンクへと水が注入される音が艦内に響く。

囷の魚雷を回避する為に高麗潜水艦は雑音をばら撒いてくれたので、<こつりゆう>は発射解析値を算出するのに十分なデータを手に入れた。発射された89式魚雷は後ろから伸ばす誘導用ワイヤーを通じて潜水艦から操作されているので敵を見逃すことはありえない。

「大手だ」

中曽根は1つの戦いに幸運にも勝利できた喜びを噛み締めていた。この戦いはチキンゲームだ。最初の魚雷は当てずっぽうで、よほどの幸運に恵まれなければ敵に命中することはなかっただろう。敵がそれに気づいていれば、逆に攻撃を仕掛けて<こつりゆう>は反撃の暇もなく玄海灘に沈んでいたに違いない。

「目標が再び増速！魚雷に気づいたようです！」

高麗海軍の潜水艦はようやく畏に気づいたらしい。だが魚雷は必殺のタイミングで放たれたのである。逃れられるわけがない。

「魚雷命中と同時に全速後退！爆発音に紛れて脱出する！」

高麗水上艦隊とはまだ距離がある。爆発を感知しても状況を把握できるまでいくらか時間がかかるだろう。逃げ出すことは十分に可能だ。

「魚雷、命中まで3、2、1！」

次の瞬間、玄海灘に巨大な水柱が連続して2つ立った。その爆音は<こつりゆう>の船体を震わせ、乗員にも衝撃が届いた。

「全速後退！」

魚雷の爆発により海水は攪拌されてソナー効力が極端に落ちた。

<こつりゆう>のソナーは高麗の水上艦隊を失探していたが、それは大きな問題ではなかった。この状況下で見つからないように逃げるなど至極簡単なことである。

玄海灘海上

予定の時間になっても<チャン・ボコ>が入港しないことに不審を抱いた博多港占領司令官は防衛部隊に搜索を命令した。

出撃したのはウルサン級フリゲート2隻と掃海艇1隻である。部隊司令官は自分が大変緊張していることに気づいた。もし日本の潜水艦が潜んでいて、<チャン・ボコ>を襲撃したのだとしたら。この小さな任務部隊ではあまりにも心細い。

ウルサン級の対潜装備は朝鮮半島の沿岸で旧北朝鮮の潜水艇に対抗する為に設けられたもので、攻撃兵器は短魚雷と爆雷のみだ。当然ながら日本の潜水艦が装備する魚雷の方が射程が長い。

その時、目の前で2つの水柱が連続して海面が飛び出した。それから巨大な爆発音が響く。

「減速しろ！対潜警戒、厳となせ！」

「ダメです。爆発により海水が攪拌されてソナー効力が落ちていきます！」

部隊司令官は青ざめた。これではなにもできないではないか。

それからソナーが効くようになるまで暫く時間がかかった。それまで高麗海軍の水兵達は異常な緊張感の中に居た。水中から何時、潜水艦が襲ってくるのか分からないのだ。しかもソナーが効かない以上、対処のしようがない。冷静に考えればソナーが効かないのは海中の潜水艦も同じ筈であるが、こういう場合には敵を過大評価しがちである。

しかし、攻撃はなかった。

ソナーが回復し、海中に潜水艦が沈んでいるのを把握するのに数時間。それが<チャン・ボコ>であることを確認するのに更に数時間。

その間に日本の潜水艦は安全圏まで逃げのびていた。

対馬海峡 自衛隊潜水艦<こつりゆう>

安全圏まで達すると<こつりゆう>は潜望鏡深度まで浮上して海面に通信アンテナを出し、博多港沖から脱出した経緯を報告した。

再び潜航して次の定期連絡時間が来るのを待つ間、艦内の士官室はまるで葬式みたいな空気になっていた。

「これは拙いよな」

艦長の中曽根は一番顔色が悪かった。なにしろ偵察行動中に敵に見つかり、任務を放棄せざるをえなかったのだ。勿論やむを得ないことであるから、それを理由に処分されるということはないだろうが、乗組員全員の出世に大きな影響が及ぶのは間違いない。

そして定期連絡の時間を迎えた。士官全員が見守る中、潜水艦隊司令部からの通信文がテレタイプによって印刷される。

「一言くらい叱責の言葉があった方が気は楽になるんだろうけどな」通信文には博多港沖の一件について一言も触れておらず、ただ次に<こつりゆう>に対する新たな命令が書かれているだけであった。「まあ、こんな秘密通信をつかってわざわざ説教するなんて冷静に考えればありませんけどね」

水雷長が命令だけの通信文に安堵しつつ、苦笑して言った。

「で、次に向かう場所は…」

中曽根は問題の部分を指でなぞった。そこには“潜水母艦と合流せよ”とだけ書かれていた。

二七・福岡沖海戦（後書き）

というわけで海自の日韓大戦における最初の白星ですが…
やべえ、めっちゃ味気ないorz

（追伸）

投稿した時にタイトルが“福岡沖開戦”になっていたので、いきなり修正するはめにorz

二八・明日への一步

横須賀 潜水艦隊司令部

潜水艦隊司令部は海上自衛隊の中でも最も機密度の高いエリアで、作戦立案の詳細に携わるのは片手で数えられるだけの人間に過ぎない。そして今、司令部のその一室にその全員が集まっていた。

「頭が痛いな」

司令官は<こつりゆう>からの報告を片手にため息をついた。

海上自衛隊潜水艦隊は<こつりゆう>の偵察情報を基に九州沿岸での新たな作戦を計画していた。しかし、<こつりゆう>が高麗軍に発見されて敵潜水艦と交戦してしまったために計画の実行は危うくなつた。

「情報本部からの報告です」

司令官の傍らに立つ幕僚長が新たな書類を司令官に手渡した。

「予想通り、高麗軍は対馬海峡の対潜活動を活発化させております。保有するP-3対潜哨戒機を総動員しているようです」

高麗軍は旧韓国海軍の対潜哨戒機をそのまま受け継いでいる。P-3Cが8機に中古のP-3Bが同数。日本の対潜哨戒機部隊と比べて質量ともに大きく劣るとはいえ、対馬海峡のような狭い海域に戦力を集中させるなら無視できない脅威となる。

司令官は自衛隊の潜水艦部隊に自信を持っていて高麗軍の対潜網を突破して任務を遂行することができるかと信じてはいたが、しかし相手が警戒を強化したところへとわざわざ部下を送り込むことには乗り気になれなかった。

「なんとか高麗軍の対潜部隊を分散させる手はないだろうか？」

司令部の面々は考えた。そして、1人の幕僚が案を思いついて、それを説明した。

「うむ。法的にはどうなのだろうか？」

司令官が尋ねると、その幕僚が答えた。

「政府の法解釈では自衛権の範囲に含まれると解釈できる余地はありませんが、グレーゾーンですね。実行には政府の承諾を得る必要があると思います」

「よし。その線でいこう」

方針が決まれば、あとは実行する艦の選定である。しかし、付近の潜水艦はそれぞれ別の任務についているし、新たに戦場となっている海域に向かっていている潜水艦は“九州沿岸での新たな作戦”に投入されることが決まっについて、その為の装備が既に積み込まれている。

「こうなったらくこうりゆうくにやってもらうか。責任をとってもらわないとな」

料亭

陽は落ちて夜になっていた。その日の予算委員会は平行線を辿ったまま終わり、その後菅井は三日前に訪れたあの料亭に足を運んでいた。そして個室に案内されると、そこには先客が2人居た。日本労働党党首である片山満と三日前にこの場で会談をした民生党右派のリーダー格の議員である。

2人の姿を見て菅井は笑顔を浮かべた。反対に彼を迎えた2人は顔色が暗い。政敵である菅井に主導されている現状に不満を抱いているようだ。しかし、そんな不満くらい我慢できる2人だと菅井は信じていた。

「それでどうなった？」

菅井が尋ねると2人も頷いた。最初に口を開いたのは片山だ。

「党中央委員会の了解は取り付けたよ。渋々だけどな」
それに民生党の議員が続く。

「こつちも票をまとめた。過半数はとれる筈だ」

「これで前進だな」

菅井は心底から安堵した。

「全ては日本を守る為だ。主義主張は違ってもそこは変わらないはずだ。明日は頼むぞ」

「当たり前です」

民生党の議員はそれだけ言つと、そそくさと料亭を立ち去つた。後には菅井と片山が残つた。

「あいつもなかなか骨があるな。ただの青二才と思つていたが」

菅井が立ち去つた議員への評価を述べた。

「なんて名前だっけな？前なんだっけ？」

それを聞く片山の方は相変わらず渋い顔だつた。菅井は話し終えるのを待つて切り出した。

「菅井さん。もう一度言うが。党の中央の方針は確かに防衛出動容認で固まつたが、あくまで渋々だ。状況が変われば簡単にひっくり返る」

「とどうと？」

「我々が容認できるのは“日本の国内で、日本に侵入した敵部隊に対する戦闘”だけだ。自衛隊がそれを超える行動をとるというのなら、分かっているな？」

菅井は黙り込んで返事をしなかつた。そんな様子を見ながら片山は話を続けた。

「でもまあ、防衛出動の承認については筋を通すよ」

それを聞くと、菅井はようやく口を開いた。

「それで十分だよ。そつちこそな。あんまり原則に囚われて大切なことを見失うなよ。まあ原則に囚われない労働党なんぞ労働党では無いか」

ニヤリと笑う菅井に片山もようやく笑顔を見せた。

「言ってる、言ってる。それじゃ、俺は帰るよ」

片山が出て行って、個室に1人残つた菅井は懐から携帯電話を取り出した。

首相官邸

国会というのは大変疲れるところだということを知っていたつもりであったが、今日は特にしんどかった。執務室の自分の机に腰を下ろした烏丸であったが、目の前に置かれていた書類の中身がまるで頭に入ってこなかった。

その時、机の上に置かれた電話が鳴った。受話器をとると秘書官の声がした。

『官房長官からお電話です。お繋ぎしますか？』

「頼む」

すぐに菅井官房長官の声が聞こえてきた。

『総理。やりましたよ。これで防衛出動を国会に承認させる目処は立ちました』

「それは良かった」

それからいくらか言葉を交わすと電話を切った。それから一息ついた。烏丸は徐々に明るい話題を聞いた気がした。

椅子の背もたれに身体を預けて烏丸は天井を見上げた。それでなにかあるわけでもなかったが、ほかに何をする気にもなれなかったのだ。

すると執務室の戸を誰かが叩いた。

「入れ」

扉が開き、その向こうから自衛隊の制服を着た男が3人、入ってきた。2人は烏丸の知った人物であった。1人は統合幕僚長である神谷陸将、もう1人は海上幕僚長の笹山海将だ。代表して神谷が事情を説明した。

「総理。夜分に申し訳ございませんが、現在計画中の作戦について指示を仰いだほうがよろしいかと考えまして」

「計画中の作戦？」

「詳しくは潜水艦隊司令官から」

神谷から指名された潜水艦隊司令官はまず博多港沖で起きた海戦について説明した。それから、その結果生じる影響について、そしてその影響を抑えるために必要な条件を説明した。

「それでどうするのだろうか？」

烏丸の問いに潜水艦隊司令官は核心部分について話し始めた。彼が計画した作戦についてである。それを聞くと烏丸は顔色が変わった。

「ちょっと待ってくれ。それは、その、自衛権の行使からの逸脱になるんじゃないか？」

烏丸がそう尋ねると、3人の自衛官は黙り込んで互いに目配せした。その顔には議論を先に進めることへの躊躇が感じられる。最初に沈黙を破ったのは笹山だった。

「内局と意見を交換しましたが、はっきり言いましてグレーゾーンです」

神谷は内局から取り寄せた国会議事録の写しを烏丸の前に置いた。「これは昭和31年2月29日、当時の鳩山内閣の船田防衛庁長官が国会で行った答弁です」

烏丸は写しを手にとって、内容に目を通した。当時の船田防衛庁長官は“ミサイル攻撃などが予想されるときに、他に適当な手段が無い場合に限って敵基地への攻撃を行うことは自衛権の範囲内”とする一方で、“侵略国の基地を攻撃するのが防衛上便宜であるという理由だけで、安易に敵基地に攻撃を行うことは自衛権の範囲外”としていた。

烏丸の様子を伺いながら潜水艦隊司令官が自分の意見を述べた。

「海上自衛隊の司令官としては部下の安全のためには是非とも実施したい作戦ではありますが、しかし日本の国防上絶対に必要であり、かつ他に手段がないのであるかと問われれば、そうであるとは断言できません」

神谷が続いた。

「これは高度に政治的な問題を含んだ作戦です。総理の判断を仰ぎ

たいと思います」

さらに篠山が付け加えた。

「実行すれば潜水艦部隊の安全を守るだけでなく、高麗に対する政治的な圧力にもなります。実行する価値のある作戦だと思います」

3人の意見を聞き、烏丸がため息をついた。

「まったく難しい問題を持ち込むんだな」

それを聞いた3人の将官は揃って頭を下げた。烏丸は言葉を続けた。

「だが、それがシビリアンコントロールってもんだな。よし、ちょっと待ってくれ」

烏丸は将官たちに背を向けて思案した。また振り向いて将官たちと対面する。

「いくつか確認したいことがある。民間人に被害が及ぶ可能性は？」

それには潜水艦隊司令官が答えた。

「確実なことは言えませんが、目標は軍事基地です。また攻撃そのものの直接の被害もそれほど多くはありません。あくまで高麗の対潜部隊の分散という間接的な効果を狙ったものでありますから。ですからその可能性は極めて小さいと思います」

「もう1つ確認したい。それによって自衛隊の隊員の命が救えると君は言うのだな」

3人の将官は力強く頷いた。

「では、作戦の実行を許可しよう」

将官たちは再び頭を深く下げてから、執務室を出て行った。

日付が変わり、7月が始まった。運命の日が始まるうとしていた。

二八・明日への一歩（後書き）

三話と八話を修正。一部キャラクターの名前を変更しました。

二九・運命が動く日

7月1日 国会議事堂 衆議院安全保障委員会

安保委員会の周りにはマスコミが溢れかえり、大騒ぎになっていた。民生党の指導部は今日も審議拒否すると息巻いていたにも関わらず、民生党の安保委員会に属する一部議員が委員会の開会を主張して自由民権党や日本労働党の議員達とともに現れたのである。その数は委員会の開会に必要な出席議員数、つまり定数の半分を1人上回っていた。

幸いなことに安全保障委員会の委員長は自由民権党の議員で、彼は晴れやかな笑顔で開会を宣言した。

このような事態を民生党首脳部は予期していなかったらしく、ほとんど対応ができなかった。できたことは離反に参加しなかった主流派の民生党議員のうち安保委員会に属する議員を送り込むことだけであった。重要な決断が民生党主流派抜きで行われるのは拙い。

かくして午前が開かれた安全保障委員会は所属する議員がほぼ全員出席することになった。ただ選挙区に戻っていた民生党の議員が1人欠席となった。

開いてしまえば、もはや防衛出動の承認を止める手段はなかった。民生党の作戦はあくまでも採決を遅らせることである。しかし、採決まで持ち込まれてしまえば民生党といえども防衛出動に反対はできない、筈である。閣僚として出席していた菅井はそう考えていたが、いまいち自信が持てなかった。

形式的に与野党双方の議員の何人かが意見を述べた。自由民権党と離反した民生党の議員は防衛出動の承認を早急に採決することが第一であると述べた。日本労働党の議員の意見陳述は外交的手段の活用を必要性を訴えて政府に注文を付けたが、自衛隊の防衛出動はやむを得ないという見解を述べて終わった。最後に民生党主流派と社会民主党の議員の出番となった。彼らは政府の対応を批判する意

見を述べたが事前に準備をしていなかった為にその内容は些か精細さが欠けていた。社会民主党の議員は明確に自衛隊の防衛出動に反対の姿勢を示したが、民主党の議員の方は防衛出動そのものに賛成なのか反対なのかはつきりさせずに終わった。

「これより採決に入ります」

各党の代表者が意見を言い終わると委員長が高らかに宣言した。

「内閣総理大臣により自衛隊に対する防衛出動命令の承認並びに内閣提出の北九州有事対処基本方針案について採決いたします。本案に賛成の諸君の起立を求めます」

いよいよ運命のときである。菅井はじっと議員達の動きを見守った。

次の瞬間、多数の議員が立ち上がった。顔ぶれを見ると、自由民権党は全員立ち上がっているが、日本労働党は1人座ったままだ。社会民主党の議員は全員座っている。そして民主党の議員のほとんどが立ち上がっている。

「起立多数。よって本案は原案のとおり可決すべきものと決しました」

委員長が宣言した。自衛隊の防衛出動が開戦から一週間経過してようやく安全保障委員会で承認された。後は両院本会議での採決を待つばかりであるが、安保委員会を通過した以上は承認を得たも同然であった。

中南海 中国共産党本部執務室

安全保障委員会の様子はテレビ中継されており、その放送は様々なルートで各国政府高官にも視聴されていた。当然ながら高麗寄りの姿勢を示す中国の中央政府にもだ。

中南海は紫禁城の西にある2つの湖のことであり、転じてその湖

の周辺に集まる中華人民共和国の中枢部を表す。この時、湖の畔にある共産党本部の一室に指導部の主要なメンバーが集まっていた。「日本は高麗に屈するつもりは無いということがはっきりしたな」薄暗い執務室で通訳を交えて国会の中継を見ていた中国の指導者層の1人が言った。

「つまりどういうことだ？」

メンバーの長老とも言うべき老人が尋ねた。

「つまり高麗の勝利は無くなったということですが、軍服の男が答えた。」

「もはや高麗の約束した取り分も期待できないな」

「白将軍が行方をくらました時点で既にそうである。もはや我々には高麗と十分な連携をとることができないのだ」

「残念だが、この度の計画は修正が必要になったようだな」

話は1つの方向に向かっていた。

「安保理ではアメリカが高麗軍の即時撤退を求める決議案の採択を求めているが」

「いまさら反対する理由はない。人民解放軍は叛乱軍の相手です。杯だ。今、アメリカと対決する利点はなにもない」

「軍の意見を述べますと、台湾に対する臨戦態勢を続けている部隊をそろそろ叛乱軍討伐に復帰させる許可を頂きたい。前線の兵力が薄くなった隙を突いて、叛乱軍が攻勢を強めています」

「こうなった以上、高麗の現政権もそう長く持たないだろう。次に備えるべきだ」

かくして高麗の孤立化が決定的になった。

ニューヨーク 国連安全保障理事会

アメリカはまだ19日の夜だったが、国連本部の動きは慌しくなった。

事の発端は日本の国会安全保障委員会が自衛隊の防衛出動を承認したというニュースが流れたことだ。それに引き続き中国大使がアメリカ大使に会談を申し込んだ。どのような会話が交わされたかは定かではないが、その会談の後に両大使は議長であるアルゼンチン大使に停戦決議案の採択を求めた。

かくして国連決議1265が採択された。ほぼ全ての加盟国が賛成票を投じたが、中国だけは高麗に対する義理立てのつもりか棄権した。その内容は以下の通りである。

1つ、高麗連邦軍はただちに日本の領域内から撤退すべし。(なお“日本の領域”に竹島が含まれるか否かについては一切触れられていない)

2つ、撤退を確認次第、対馬を非武装地帯に指定し、国連軍が駐留する。対馬海峡を非武装海域に指定し、日本及び高麗の軍艦は国連に事前の許可を得ずに同海域を航行してはならない。

3つ、同決議を高麗が受託しない場合は、国連は加盟国に対してあらゆる手段を用いて決議内容を強制する権利を付与する。

台湾海峡 空母<ジョージ・ワシントン>

原子力空母<ジョージ・ワシントン>を中心とする第70任務部隊は相変わらず台湾への臨戦態勢をとりつづける中国軍への警戒のために台湾海峡に張りついていた。しかし、状況が変わりつつあることを任務部隊の将兵達は肌で感じる事ができた。

最初の兆候を察知したのは情報部門であった。彼らは台湾の対岸に集結している中国軍の通信を傍受していたのだが、中国軍の通信の量が国連決議の採択された時間を境に極端に減ったのである。通信の量だけでなく沿岸に集結している部隊の数そのものも減っているようであった。

それに連動して空母任務部隊に接近する中国軍機に対するスクラ

ンブルもめつきり減ったし、逆に中国沿岸に艦載機が接近しても熱烈な歓迎を受けなくなった。それまでは沿岸に配備された様々なリーダーが艦載機に照射されて迎撃機も群がってきたが、今は申し訳程度の対応しかしてこないのだ。

そして任務部隊司令部は第7艦隊司令官よりの新たな命令を受電した。任務部隊司令官のスチュアート少将はただちに艦橋へと向かい、ジョージ・ワシントン艦長であるアダムス大佐に口頭で命令を伝達した。

第七艦隊旗艦
「艦長。ブルーリッジより命令だ」

「一体何事です？中国沿岸を核攻撃でもしますか？」

侵略を受けている同盟国を無視して台湾海峡に張りついている現状に対するものか、不満げな口調で冗談を言うアダムス大佐にスチュアート少将は笑顔で応じた。

「いや。至急、台湾海峡を離脱して北上せよ、との命令だ」

それを聞いたアダムスの目つきが変わった。それは獲物を前にした狩人の目だった。

「いよいよ本物の戦争の時間ってわけですか」

青瓦台

高麗連邦共和国の指導部の雰囲気はまるで葬式のようにであった。

開戦初日の浮かれ気分はどこへやらである。その中で情報院長のキム・ユリョンだけはタバコを口にして冷静な顔色をしていた。

「情報院長。ここは禁煙だぞ」

大統領に指摘されたキム・ユリョンでは無言で頷くと、タバコを懐から出した携帯灰皿に押し込んだ。それから大統領が集まった閣僚達に向けて宣言した。

「事態は急激に悪化している」

大統領の目線は計画を主導した外交通商部長と国防部長に向けら

れ、その言葉は詰問するような口調になっていた。

「日本は我々の要求を拒絶し、中国は裏切り、国連決議が我々に不利な形で採択された。どう対処する？」

最初に案を述べたのは金幽霊であった。

「決議を受け入れるべきでしょう。決議が採択された以上、自衛隊も本格的に反撃してくるでしょうし、アメリカ軍も本格的に介入してくる筈です。軍に勝ち目がありませんか？」

問われたイ・セチャン国防部長は黙り込んだままだった。そしてユリヨンは構わずに話を続けた。

「今なら軍の主力を無傷に本国に戻せます。我々はその武力を背景に日本と交渉ができます。彼らは我々がイザとなれば強行手段を辞さないことを今回のことでも知らずとも知ったわけですから、日本もなにかしら譲歩をせざるをえないでしょう」

「どうなんだ？」

大統領がユリヨンの言葉を受けて、セチャンに意見を求めた。

「首都師団の旅団も揚陸を完了し、物資の集積も終わりました。攻勢の準備は整っています」

「また攻撃を行うべきだと？」

「はい。アメリカ軍が本格的に介入してくるまではまだ時間があります。その前に自衛隊に痛撃を与えれば、更なる譲歩を引き出せるはずです」

国防部長には引き下がるつもりはなかった。

「まだ戦力があるからこそ、引き下がるべきなんです。全てを失ってしまえば、なにもできなくなる」

ユリヨンはあくまでも停戦勧告の受け入れを訴えた。

「九州の我が陸軍部隊はほぼ無傷です。海軍も空軍も健在です。このまま何もせずに負けると言うのでしょうか！」

セチャンも引き下がる。

大統領はしばし考えた後、決断した。

「最後の総攻撃に賭ける！」

三〇・第三次攻勢

7月2日

海空自衛隊が巡航ミサイル攻撃の対処に忙殺され、また海外ではザスローンによる特殊作戦が実行されている間にも陸上自衛隊は部隊の移動、集結を進めていた。

最初に到着した第14旅団は西部方面隊の戦略予備部隊に指定され待機していたが、高麗軍の飯塚攻撃を経て前線強化の為、防衛線の一角を担うようになった。周防灘に面する九州東海岸の街、行橋市まで前進して陸上自衛隊の構築した防衛線の最東端を強化したのである。現地に展開した中央即応連隊を配属され一般の師団や旅団と同様に3個普通化連隊態勢に強化された第14旅団であるが、即応予備自衛官主体の第50普通科連隊の能力に不安があつた。

次に到着した第10師団は高麗軍の第二次攻勢が終わるのを待つて飯塚まで前進し、第1空挺団から同地の防備を引き継いだ。これによって第1空挺団は不慣れな陣地防衛の任務から解放されて、西部方面隊直轄の戦略予備部隊となり本来の任務である空挺侵攻作戦に備えていた。

空挺団に配属されていた第41普通科連隊戦闘団は飯塚から山地を挟んだ東側にある糸田町ならびに田川市の一帯に布陣した。第二次攻勢の教訓から飯塚東側の防備を強化する必要が認められたからだ。ただし10式戦車装備の戦車中隊は第10師団に移管されることになった。

第14旅団及び第10師団は船舶で輸送されたが第12旅団は航空で運ばれた。航空自衛隊の保有するC-1、C-130、そして新鋭のC-2輸送機によるピストン輸送で熊本まで運ばれて西部方面隊直轄の戦略予備部隊となった。第12旅団は戦車などの重装備を減らした代わりにヘリコプターを用いた空中機動作戦に対応した部隊として知られる。

そして陸上自衛隊の切り札である第7師団も着実に九州へと展開していた。今、北海道から南下している最後の船団が到着したら、第7師団配下の全部隊の展開が終了する。既に九州へと上陸を完了した部隊は来るべき攻勢作戦に備えつつ西部方面隊の戦略予備部隊として待機している。

陸上自衛隊はようやく一息つける程度の余裕のある戦力を九州に持ち込むことができた。あとは東北からの第6師団の展開を終えれば陸上自衛隊の戦力移転第一次計画が完了する。

第6師団が到着したら第4師団残存部隊が守っている背振山地の防備を引き継がせる予定である。背振山地を守る部隊のうち、第19普通科連隊は唐津湾沿岸を守る第16普通科連隊戦闘団と合流して海岸線の防備を強化するとともに西から福岡進攻作戦に備える。そして西部方面普通科連隊は第4師団への配属を解かれて西部方面隊直轄に戻る。

不測の事態に備えて待機している西部方面隊直轄の戦略予備部隊もだいぶ厚くなった。第1空挺団、第12旅団、第7師団である。これなら情勢がどのように変化しても対応できるという自信を西部方面隊は持つことができた。このうち第12旅団についてはその機動性を生かし、第6師団到着後にフリーになる西部方面普通科連隊とあわせて対馬奪還作戦に投入することを計画している。しかし、ある理由からそれが実現するかは不透明であった。

なお陸上幕僚監部では第二次戦力増強計画を進めていて、北部方面隊の第2師団、方面特科隊と中部方面隊の第3師団がその対象になっていた。

陸上自衛隊 北熊本駐屯地

北熊本駐屯地は現在、戦場へと出払ってしまった本来の主に代わって第12旅団が拠点として使っていた。戦争中であるものの待機

状態にある第12旅団の自衛官達は訓練や体力練成、それに武器の整備に多くの時間を費やしていた。一方、司令部では西部方面総監部からの命令により対馬奪還の作戦計画の研究を行っていた。

「問題はどれだけヘリコプターが使えるかですね」

師団司令部の幕僚の1人が指摘し、旅団が頷いて同意した。

前述したように第12旅団はヘリコプターを駆使した空中機動作戦に対応した部隊という触れ込みになっていたが、それはある種のまやかしであった。確かに戦車部隊の廃止など重装備の削減は行われたが、彼らの足となるべきヘリコプター部隊の方の整備がまったく進んでいないのだ。他の師団や旅団に比べてヘリコプターやそれを用いた訓練が充実してはいるが、十分とは言えない。実質的には第12旅団は戦車の無い軽歩兵旅団に過ぎないのである。

自前の移動手段が足りない以上、どこから借りなくてはならないのであるが、なにしろ今は戦争の真つ最中である。ヘリコプターは余ってはいない。作戦時にどれだけのヘリコプターが使えるかは未知数なのだ。今回は離島奪還というヘリコプターなしでは成り立たない作戦である以上、どれだけのヘリコプターが使えるか分からなくては作戦の立てようがない。

「分かった。自前のヘリコプター部隊のみと、一個連隊を輸送可能なヘリコプターが配属された場合の二通りで作戦を検討してくれ」
旅団長が命じるが、幕僚は顔を顰めた。

「しかし第12ヘリコプター隊のヘリコプターでさえどれだけ使えるか……」

第12旅団には直属の第12ヘリコプター隊があり、他の旅団に比べれば一応は充実した装備を持っているが、それも前線での任務に借り出されてしまって手元にはない。第12旅団というより陸自全体でヘリコプターが足りていないのである。

「まったく！なにが動的防衛力だ！」

幕僚が怒鳴った。“機動力の高いコンパクトな防衛力”なるコンセプトを掲げて陸上自衛隊の“改革”が進められたが、その中身は

陸戦に不可欠な火砲や戦車が削減される一方で機動力向上に必要な輸送手段の増強がほとんど行われず、実質的にはただの軍縮であった。

旅団長は淀んだ空気をなんとかしようと重い、司令部の片隅に置かれたテレビの電源を入れた。しかし、その行為は彼の意図とは逆方向の作用が働いた。

<はつきり言いまして陸上自衛隊の近代化への抵抗は犯罪的ですね>
テレビを点けた瞬間、そこに映ったのは有名な。そして自衛隊内でもっとも評判が悪い 軍事評論家であった。

<陸上自衛隊の装備というのは新しいものもあるんですが、全体的に旧式が中心なんです。海上自衛隊や航空自衛隊と比べてもこの傾向ははつきりしている。ようするに怠慢なんですね。旧日本陸軍の性格をそのまま引き継いでいる>

その瞬間、鈍い音が司令部の中に響いた。音の源の方を向くと、幕僚の手の中で鉛筆が折れていた。

「なにが怠慢だ！なにが抵抗だ！」

陸上自衛隊の装備体系が全体的に古いのは別に好き好んでそうなったわけではない。冷戦終結以後、海空自衛隊の近代化が優先され陸上自衛隊が常に後回しにされてきた。現状はその結果に過ぎないのだ。

「その癖に批判はこっち優先か」

実際、テレビは高麗軍の対馬海峡突破を許した海上自衛隊や航空自衛隊よりも陸上自衛隊に批判が集中していた。今まさに敵軍と対峙している陸上自衛隊に海空自衛隊より注目が集まるのは仕方が無い面もあるが、司令部の面々はそれだけが理由ではないと感じていた。

「まあ、ある意味、旧陸軍を引き継いでいるな」

旅団長がため息をつきながら言った。

「俺達は所詮、スケープゴートってことですか？」

「そういうことだ」

巷で語られる陸軍悪玉論にはそういう側面もある。だから陸軍の悪行や無能さは誇張して伝えられ、逆に海軍のそれは覆い隠される。故に太平洋戦争開戦の直接のきっかけとなった仏領インドシナ進駐やマレー作戦の策源地となった海南島がどうして日本軍の策源地になったのかを語られることは少ないし、陸軍機が海軍機に比べて幾らか防弾を重視していたという事実もあまり知られない。南方における白兵戦に固執する無能な陸軍について語る際に、物資や兵器・弾薬が戦場に到着する前に多くが沈んでいる事実に触れることも少ない。空軍独立について史実では海軍より陸軍の方が熱心であったにも関わらず、なぜか仮想戦記では陸軍が抵抗勢力にされるというのもよくあることだ。

「陸軍が強盗なら、海軍は巾着切りだ！」って言ったのは石原莞爾だったか」

「旅団長、巾着切りって？」

「スリの一種さ。財布に切り込みを入れて、中身だけ持っていくんだよ」

そこで司令部内の全員がため息をついた。現状を嘆いても仕方が無い。問題はこれからのことに如何に備えるかである。

すると司令部のドアが外から叩かれた。その向こうから伝令の声が聞こえてきた。

「緊急です」

「入れ！」

旅団長が命じると息を切らした伝令が入ってきた。

「高麗軍が前線に対して大規模な砲撃を実施中。全面攻勢と思われるます」

それを聞くと司令部の面々の顔色が変わった。まっさきに動いたのは旅団長だった。

「旅団の全部隊を待機させるんだ。いつでも出撃できるようにしろ！」

幕僚達がそそくさと動き始めた。それから伝令に向かって命じた。

「新たな情報が入り次第、教えるんだ」

背振山地 第19普通科連隊陣地

「塹壕に潜れ！塹壕に入るんだ！」

砲弾が空気を割いて落下するヒュルヒュルという音が近づいてくる。隊員たちがすばやく手近な陣地の中へと潜り込む。

次の瞬間、155ミリ高性能榴弾が次々と炸裂した。木々が砕け、折れて塹壕の上に倒れる。土が巻き上げられ、大地を揺さぶる。

よく準備された塹壕陣地によって自衛隊員たちの被害は最小限に食い止められたが、それでも無傷というわけにはいかない。ある壕は直撃を受けて、そこに身を潜めていた2人の身体は一瞬に四散した。ある隊員は直撃を受けて破裂した木の破片が身体に突き刺さった。ある者は倒れた木の下敷きになり、ある者は土の中に埋もれた。砲撃は10分間続いたが、その下に居た者には永遠に感じられた。そして終わった。

「無事か！返事をしろ！」

半分埋まったタコツボ陣地からなんとか抜け出した古谷が声を張り上げた。

「桜井、無事です」

「砺波です。無事です」

「矢部、大丈夫です」

続々と返事が返ってきた。返事をしない者もあつた。しかし、それを悲しんでいる暇はない。中隊本部から通信が入った。“前哨陣地が南下する高麗部隊を確認！”

「敵が来るぞ！応戦の準備をしろ！」

三一・激突

都内

衆議院に続き参議院でも自衛隊の防衛出動が承認され、自衛隊は自らの戦闘行動についてようやく法的な根拠を得たのである。

国会議事堂の外ではマスコミが議員を掴まえてインタビューをしようとして待ち構えていた。多くの議員が掴まり、その中には民生党の管議員の姿もあった。彼はインタビューに笑顔で答えていた。

「災いが続くとき、昔なら年号を変えるところだが、今必要なのは政権交代ではないか」

管議員が力説する最中、無数の携帯電話が一斉に鳴り出した。議員のものもあれば、マスコミ関係者のものもある。メールで届いたものもあれば、電話で知らされたものもある。しかし内容は全て一致していた。

“高麗軍が九州で再攻勢”

九州

高麗軍の砲撃は全前線に渡って行われた。しかし主攻は大宰府防衛線に向けられていた。激しい砲撃に続いて強烈な攻撃により自衛隊の防衛線を粉碎しようというのだ。

しかし大宰府防衛線は自衛隊側がもつとも防御に力を入れている防衛ラインである。いくら高麗軍は増援を得た機甲部隊を持つと言っても正面から突っ込んで突破できるものではない。というわけで高麗軍は大宰府防衛線を側面から攻撃して戦線を瓦解させる作戦にでた。

大宰府防衛線の西の要、天拝山。高麗軍の攻撃はそこに向けられた。ここを迂回して防衛線を側面から攻撃しようというのである。

そのためには山そのものを確保する必要があった。

機械化歩兵中隊が配属された1個戦車大隊が国道三号線に集結して自衛隊の注意を引きつつ、別働隊が天拝山西側の牛頸ダムから天拝山と、その南へと浸透攻撃を仕掛けるのである。

別働隊は装甲車から降りた歩兵部隊で、その規模は2個大隊に達していた。そのうち1個中隊が天拝山山頂に向かい、残り主力が南下していった。

天拝山山頂

山頂には特科隊の観測所も兼ねた防御陣地が築かれていて、普通科1個小隊が守備にしていた。そこに激しい砲撃の嵐が降り注いだのである。第42普通科連隊の守備隊員と第8特科連隊から配属された観測員は塹壕陣地の掩蓋の下に隠れて砲撃を凌いだ。いくらかの器材が被害を受けたが、頑丈な陣地に守られて人員の損失はなかった。

しばらくすると砲撃が止んだ。普通科隊員の1人が陣地から恐る恐る顔を出して下を覗くと、陣地に向かって山を駆け上ってくる高麗兵の姿が見えた。

「敵襲！ 迎え撃て！」

指揮官の号令で普通科隊員達は慌てて掩蓋の中から飛び出し、それぞれの銃器を構えて配置についた。

「撃ち方はじめ！」

89式小銃が、ミニミが一斉に火を吹き、高麗軍の突撃を阻止すべく弾幕を張る。弾の消費量を気にせず、89式もフルオートで銃弾を敵に送り込む。何人かの高麗兵が倒れ、残りは木や岩、地面の窪みなどに慌てて姿を隠す。

一方、観測員は猛烈な射撃を浴びせる普通科隊員の傍らで射撃指揮所に目標の情報を口頭で伝えていた。すぐに特科連隊のFH-70や普通科連隊の迫撃砲が高麗兵に撃ち込まれた。

もちろん高麗側も黙ってやられたりはいしない。弾幕射撃を阻止すべく迫撃砲が自衛隊の陣地に撃ち込まれる。また砲兵隊も自衛隊の特科部隊に対して対砲兵戦を仕掛けた。

両者の砲兵部隊が天拝山陣地の上を飛び越して弾を撃ちあうようになる、陣地を巡る攻防戦はこう着状態に陥った。

一方、天拝山を迂回した高麗軍の主力部隊は牛頸ダムを経由して県道137号線へと躍り出た。県道137号線を東へと進めば、大宰府防衛線の背後へと至るのである。勿論、第42普通科連隊もこういう事態を見越して警戒部隊を配置していたが、それはごく少数であり瞬く間に突破された。

対峙している高麗軍部隊から激しい射撃を受け、さらに後方への浸透を許した第42普通科連隊は混乱状態に陥っていた。そこへ正面から高麗軍機甲部隊が突破を図ってきたのである。

大宰府防衛線における第42普通科連隊の防衛線は西鉄天神大牟田線の都府楼前駅からJR鹿児島本線の都府楼南駅を経て天拝山を結ぶラインに敷かれていた。重点は県道31号線正面に置かれていた。

九州自動車道との交差点の近く、県道31号線に面する丘に築かれた陣地には第一中隊及び第二中隊を基幹とする増強二個中隊が配置されていた。

「畜生。どうなっているんだ？」

小学校の裏に設けられた指揮所で一帯の防御戦の指揮を任されていたのは2つの中隊の指揮官のうち経験の長い第一中隊長で、第二中隊長が前線で指揮を執っていた。第一中隊長は頭を抱えていた。連隊本部はだいぶ混乱しているようで、具体的な指示が来ない。

その時、通信機の前に陣取っていた隊員が声をあげた。

「隊長！前哨陣地が敵の先頭を捉えました」
「迎え撃つぞ！警報を出せ！」

県道31号線に面する防衛線には第8戦車大隊の1個小隊、4輜の90式戦車が配属されていた。北海道の戦車部隊の大幅縮小という喜ばしくない理由により九州にまわされてきた90式戦車は第8師団の虎の子的な存在であった。

4輜の戦車は陣地に籠り砲塔部分のみを地上に露出し、さらにもの上から嚴重に擬装が施されていたので、簡単には見つけることはできない。実際、高麗軍縦隊の先頭を進む戦車中隊は彼らの存在に気がつかなかった。

高麗軍はまずK200装甲車を装備する機械化歩兵小隊を配属したK1A1戦車中隊を先に進ませて安全を確認してから大隊主力を進ませるようだ。殿は先頭の戦車中隊に歩兵小隊を貸した代わりに、戦車小隊が配属された歩兵中隊である。自衛隊は敵先遣隊を攻撃せず、後に続く本隊に攻撃を集中することにした。

敵先遣隊をやり過ごして高麗戦車大隊本隊が姿を現すと、隠蔽されていた戦車と普通科の対戦車兵器が一斉に射撃を始めた。

最も目立つのは90式戦車の120ミリ主砲だ。自衛隊が使う弾が旧式なこともあって陳腐化している感のあるラインメタル44口径120ミリ滑腔砲であるが、至近距離での射撃だったこともあり高麗軍のK1A1戦車の砲塔を見事に貫いた。

一方、対戦車ミサイル群も負けてはいない。中隊対戦車小隊の87式対戦車誘導弾に加えて、陣地には第42普通科連隊対戦車隊に配備された新型の中距離多目的誘導弾が配属されていた。これらのミサイルはK1A1戦車に対して絶大な威力を発揮し、見事に数輜の戦車を撃破した。

高麗軍戦車大隊は進撃を中断し、主力の戦車隊は障害物に身を隠しつつ砲口を自衛隊の陣地に向けた。一方、殿の歩兵中隊は自衛隊

陣地のずつと手前で停止し、装甲車を降りて陣地を側面から攻撃しようとして動き出した。

前線で部隊を指揮する第二中隊長は敵高麗軍を撃退できると自信を持った。

小学校裏の指揮所で指揮を執る第一中隊長はそれほど楽観的にはなれなかった。最初の計画ではこの陣地で敵を止めて、その隙に都府楼南駅付近に展開する第42普通科連隊に配属された戦車中隊の主力が高麗軍を側面から攻撃して蹴散らす手はずになっていた。しかし戦車中隊は動かなかった。

連隊本部は迂回攻撃を仕掛けてきた高麗軍歩兵の攻撃から退避していて連絡がとれず、しかも退避する前に戦車中隊の方は迂回してきた高麗軍歩兵部隊への対処を優先するように命じていたからだ。

指揮系統がズタズタになり、部隊は混乱の中にあつた。

最初の一撃で打撃を受けた高麗軍であつたが、打撃から立ち直り自衛隊に対して反撃をはじめていた。県道からK1A1戦車が支援射撃を加えつつ、高麗歩兵隊が陣地の後方、側面に回りこんで攻撃を仕掛けてきたのである。高麗歩兵隊は後方から増援を受けて、自衛隊を数で圧倒し、次第に陣地を包囲しようとしていた。砲兵隊の激しい砲撃に戦車の攻撃、自衛隊側は次第に圧倒され、90式戦車が一輛撃破されてしまった。

増援が得られないことを悟った第一中隊長は陣地の放棄を決定した。だが、高麗軍の迂回攻撃により既に退路は塞がれていた。

大宰府防衛線に綻びが生じていた。

新田原基地

高麗軍の再攻勢とともに空中での戦いも再び激しさを増していた。付近の航空基地からは戦闘機がひっきりなしに飛び立ち、高麗空軍もしくは高麗陸軍に対して攻撃を仕掛けていた。

そんな中でこれまで3機の高麗機を撃墜した野々宮純一は出撃できずにいた。

「なにもこんな時に配置転換なんてあんまりじゃないですか!」

この時、彼は部隊から一旦離れて沖縄に飛ぶように命じられていた。その命令そのものは以前から出ていたもので高麗軍の攻勢と重なったのは偶然だったが、野々宮は命令を実行すべき時ではないと主張していた。

「私が敵機3機を撃墜したのだから休んでいいとおっしゃるなら、大きなお世話です。私は前線で戦いたいです」

「言っておくが君に休暇を与えるつもりではない」

声を荒げる野々宮に上官が冷静な口調で言った。

「パイロットのローテーションが苦しいのは事実だが、君の抜けた穴は埋められる。君には特別な技能を生かして、今後行われるであろう反攻作戦の切り札になってもらう」

上官の言葉の意味が野々宮にはよく分からなかった。

「どういう意味です。確かに私は3機の敵機を撃墜しましたが、それは単に他の者よりチャンスに恵まれたからであって、自分に特別な技能があるとは思っていません。勿論、自分の操縦技術に自信はありますが・・・」

それを聞いた上官は首を横に振った。

「違うのだ野々宮三佐。君には第304飛行隊の中では君だけ、空自全体でも数名しか有していない特別な技能がある」

少しの沈黙を挟んで上官は続けた。

「君は第6航空団時代にF-15改IIの試験運用に関わっていたね」

三一・激突（後書き）

そういえば9月は日韓大戦を更新していなかったんですね。

追加（10/29）

感想欄での指摘に基づき、防衛線の指揮官の表記を変更しました。

三二・阻止作戦

新田原基地

野々宮が沖繩行きを命じられた頃、新田原の滑走路からはF-2支援戦闘機の編隊が発進していた。主翼の下にはGPS誘導爆弾JDAMが吊るされていた。

編隊を組んだF-2部隊は新田原から一定の距離まで達すると、一気に高度を落として地面ギリギリまで急降下した。高麗軍のレーダー探知を避けるため、地形の影に隠れながら目標を目指すのである。当然ながら危険な飛行になる。

出撃したF-2には危険な飛行を助ける頼りになるシステムを搭載していた。それが機体下の空気取り入れ口の側面に取り付けられたJ/A A Q - 2前方赤外線監視装置である。機体前方の地上の様子を明瞭な赤外線映像で捉え、低空飛行や目標搜索において大きな力を発揮するのだ。

パイロット達はJ/A A Q - 2の捉えた赤外線画像を頼りに山々の間を縫うように飛び、目標を指して北上していた。

第12普通科連隊陣地線

大宰府防衛線の第二線である第12普通科連隊の防衛線は筑豊本線の線路を基準に築かれていた。筑豊本線は飯塚方面から鹿児島本線との合流点まで隘路を横切るように線路が敷かれていて、そこを超えると平地が広がり機甲部隊が相手では防御が難しくなる。

第12普通科連隊は隷下の4個中隊にそれぞれの担当地区を割り当てていて、第一中隊は鹿児島本線以西を、第二中隊は鹿児島本線の東側から市内を縦断する宝満川の間を、第三中隊は宝満川以東を担当し、第四中隊は予備として後方に配置されていたが、第42普

通科連隊の陣地が突破されたという報を受けて第12普通科連隊本部は第四中隊に第一中隊の増援にまわるように命じた。高麗軍が突破した県道17号線をそのまま南下すると第一中隊の前に出るからだ。

増援として派遣された第四中隊は第一中隊が守る県道17号線沿いのさらに西側、森林の中に配置された。これは天拝山の迂回攻撃の報告を受けて、高麗軍が再び迂回、浸透攻撃を行うことを恐れたからである。

天拝山麓 筑紫野インターチェンジ周辺

防衛線を突破したのは高麗軍第11師団第9旅団である。さらにその後ろに第13旅団が続いた。この2個旅団が開けた穴を最後に上陸した増援部隊が進み、戦果を拡張する計画である。

上陸した増援部隊とは30日に海兵隊が捉えたK2戦車とK21歩兵戦闘車を装備する部隊で、その規模は1個旅団に達していた。それこそが韓国軍の最精鋭部隊である首都師団機甲旅団である。彼らは最強の矛として自衛隊に大打撃を与える瞬間を待っていたのだ。さて第42普通科連隊の防衛陣地を突破した機甲大隊は筑紫野インターチェンジの近くで迂回攻撃を仕掛けた歩兵部隊と合流した。

一方、後続する第13旅団は1個大隊が都府楼南駅周辺に布陣して待機している自衛隊部隊、第42普通科連隊第3中隊と配属戦車中隊主力を攻撃した。連隊本部と連絡がとれない状況で攻撃を受けた部隊は後退して鷺田川を渡り、川の北側を守る第24普通科連隊と合流しようとしていた。

さらに第13旅団の別の大隊は県道112号線を南下して、JRの天拝山駅や西鉄の朝倉街道駅周辺を占領して、その先で県道112号線と交差する国道3号線を封鎖した。つまり第8師団の第24普通科連隊と第43普通科連隊の退路を遮断したのである。

そして第13旅団の最後の大隊と第9旅団は第12普通科連隊の敷いた最後の陣地を突破すべく準備を進めていた。しかし高麗軍の司令官には1つ、気がかりがあった。それは天拝山の自衛隊陣地を未だに手中に収めていないことである。

天拝山山頂自衛隊陣地

高麗軍が最初に突撃してきたときのように撃ちまくることを自衛隊員達はもうしていなかった。包囲され後方連絡線を断たれた今、手元にある弾薬が使える弾薬の全てだった。

「弾薬を節用するんだ！」

小隊長と小隊長が事ある事に部下にそう命じ、小隊の小銃手達は射撃の際には単射か三点射を使った。機関銃手すらミニミニ機関銃を撃つ際には引き金を引く時はほんの一瞬だけ引くようにしていた。

「まもなく近接航空支援が来ます」

配属されている空自の観測員が無線機を片手に言った。味方の特科隊は陣地を突破した高麗軍や高麗砲兵隊との戦闘で忙しく、小さな陣地まで手が回らない。そんな中で上層部から与えられたのが航空支援である。

「評定を！」

特科の観測班が観測機器とGPSを使って山の中腹に陣取って山頂奪取の機を伺っている高麗軍の座標を確認した。それを空自の連絡員が上空の戦闘機に伝達するのである。

「間違つてこここの座標を送るなよ」

セルビアの中国大使館のような“正確な”誤爆を受けることになりかねない。

上空 F-2 支援戦闘機

F-2の編隊は上空で分かれて、それぞれの目標に向かった。天拝山陣地の援護に向かったのは2機だった。

高麗軍のレーダーによる探知を防ぐ為にAAQ-2の赤外線画像を頼りに山沿いを低空で飛行していた。まだ視認はできないが目標は近い。2人のパイロットはFCSを対地攻撃モードにし、搭載するJDAMに目標の座標を入力した。

するとAAQ-2の捉えた画像を映す液晶ディスプレイに山の姿が浮かび出た。2機のF-2は山頂の西側を掠めるコースに機種を向けると、パイロットは操縦桿の兵装発射ボタンを押した。

2機のF-2はそのまま山頂の横を通り過ぎた。これで彼らの任務は終わった。あとは基地に戻るだけである。

投下された2発のJDAM爆弾の方はF-2の機体に遅れて天拝山に到達することになった。空中を滑空しながら指定された座標に向けてGPSに従って針路を修正しながら向かっていく。そして山頂の自衛隊陣地と撃ち合いをしている高麗軍の中に突入した。

500ポンド爆弾の強力な炸薬がど真ん中で爆発し、高麗の兵士達が吹き飛んだ。自衛隊の陣地の上にも千切れた肉体の一部らしきものが降ってきたが、隊員達は今更動じなかった。

「これで一息つけるな」

「警戒は怠るなよ」

高麗軍の攻勢は一旦弱まり、戦線は静まり返った。しかし、それは次なる戦いの前触れ、嵐の前の静けさに過ぎなかった。九州は正午を迎えていた。

五島列島沖 海上自衛隊潜水艦<そつりゅう>

3隻の潜水艦が北に向かっていた。彼女達は海上自衛隊潜水艦隊が“九州沿岸での新たな作戦”のために送り込んだ刺客である。送り込まれたのは<そうりゅう>、<はくりゅう>、<まきしお>で、前2者はAIP機関と高度な戦闘システムを搭載する新世代艦である。

<そうりゅう>はその新世代艦の第一番艦で、就役期間が長く乗員達もそのシステムを熟練していた。だから<そうりゅう>のソナーがそれを捉えられたのは必然だった。

「ソナー感！潜水艦と思われる」

ソナーマンの報告と同時に艦内の会話が途絶えた。

「無音航行」

発令所で艦長が命じたが、それは既に実行されていた。速度も落とされ、乗員達の緊張感が高まる中でソナーマンが更なる報告が届く。

「目標は3隻、音紋から高麗海軍の孫元一級ソン・ウォンイルと思われる」

孫元一級、韓国海軍の初代参謀総長の名を受け継いだその艦はドイツの214型潜水艦を導入したもので、<そうりゅう>と同様にAIPシステムを装備する最新の潜水艦であった。

「こちらに気づいているのか？」

艦長は冷静な表情を保ったつもりであったが、声には動揺が感じられた。もし3隻の敵艦に襲われたら<そうりゅう>とも言えどもただではすまない。他の艦と共同作戦中とは言え、僚艦はすぐに支援を行えるような位置にはいない。

「いえ。こちらには気づいていないようです。全速で南下しています」

ソナーマンの報告を聞いて艦長は安堵した。見つからないのであれば、いくらでもやりようがある。こちらから先制攻撃を仕掛けることも可能だ。

「攻撃しますか？」

副長が尋ねた。<そうりゅう>には高度な戦闘システムを搭載し

ているから、3隻に向けて同時に魚雷攻撃を行い反撃の暇も与えることなく撃沈することも可能であろう。だが、艦長は首を横に振った。

「いや、やめておこう」

<そうりゆう>には別の任務がある。そちらの遂行が優先だし、それに攻撃に使える魚雷は限られている。任務遂行の為に特別な装備を載せる必要があり、その分だけ魚雷を降ろしているのだ。今の<そうりゆう>には自衛の為に最低限必要な魚雷しか搭載していない。

やがて高麗海軍の潜水艦は何処かへと消えた。

「潜望鏡深度に浮上。アンテナ上げる！司令部に通信を送るんだ」

かくして高麗海軍潜水艦南下の一報が潜水艦隊司令部にもたらされた。

三二・阻止作戦（後書き）

海上自衛隊の出番も近い・・・等

追加（10/29）

感想欄にて文章を繰り返している部分があるとの指摘を受けまして、修正しました。

三三・前進あるのみ

五島列島の南西 海上自衛隊第1護衛隊群

ストライカー旅団の装備を運ぶ船団の護衛を命令された第1護衛隊群はその任務をつつがなくこなしていた。今のところ敵との接触は無かったが、隊員たちの士気は任務らしい任務を与えられたことで高まっていた。

海上自衛隊の護衛隊群は2つのグループから編制されるが、この時は護衛艦<ひゅうが>を中心とする対潜能力が高いDDHグループが船団の前進を待ち伏せしている可能性のある高麗潜水艦を警戒する。そして防空能力の高い<きりしま>を中心とするDDGグループは船団の北側側面に展開して高麗軍のミサイル攻撃を警戒している。

群司令官の水無月は<ひゅうが>のCICで各地から集まる情報をまとめた戦況図とにらみ合いをしながら、状況が変化する時に備えていた。

「戦力が続々と集結しつつあるな」

水無月が注目していたのはトカラ列島に沿って北上してくる新たな船団だった。船団はアメリカ軍のものでTF75という任務部隊番号が与えられる。

「デイエゴガルシアからようこそ」

インド洋最大のアメリカ軍の拠点であるデイエゴガルシア。そこには中東で非常事態が発生したときに備えて重旅団戦闘団HCBTの装備と物資が一個旅団分、海上集積船に載せられて待機している。北上してくる船団とはその海上集積船と護衛なのだ。

その時、水無月のもとへ首席幕僚の藤堂1佐が駆けてきた。

「護衛艦隊司令部より緊急電です」

そう言って電文を印刷したものを手渡した。そこには<そうりゅう>が捉えた高麗の潜水艦の情報が書かれていた。

「よし警戒をより厳重にしないとな」

第12普通科連隊陣地

県道に面する陣地は激しい砲撃を受けていた。攻撃の準備として高麗軍は上陸したほぼ全ての砲兵隊を動員し、その半分を県道沿いに設けられた陣地に向けていた。第12普通科連隊の第一中隊と第四中隊は高麗軍の激しい砲撃を前に、陣地の中に籠るしかなかった。砲兵隊の残りの半分は自衛隊のほかの陣地に向けられていた。激しい砲撃で各地の部隊を動けなくさせて、攻撃の穂先が向けられる第12普通科連隊陣地に増援を送らせなくしようというのだ。見当はずれな場所に落ちた砲弾も多かったが、陸上自衛隊側の機動を制限する効果はあった。さらに副次的な効果として広範囲にわたる砲撃のより各所で火災が発生し、日本側にそれへの対処を負わせたのである。

激しい砲撃に発煙弾が混じるようになった。突撃する部隊を自衛隊から目隠ししようというのだ。

砲撃が収まり、塹壕に籠った自衛隊員たちが掩蓋から顔を出したのとはほぼ同時に、白煙の向こうからK1A1戦車が現れた。それと同時に高麗の歩兵隊が装甲車を降りて、自衛隊の陣地に向かって突撃してくる。

自衛隊側は重火器を構え、阻止射撃を加えるが、そこへK1A1戦車が砲撃を加えてくる。勿論、自衛隊もだまってやられるわけではない。嚴重に隠匿されていた各種の対戦車兵器が次々と姿を現してK1A1部隊に攻撃を仕掛ける。

両者の放つ曳光弾が交差し、爆発音が絶えることなく鳴り響く。激しい火力の応酬に両者多くの死傷者が出ていた。しかし消耗戦になると兵力が劣る自衛隊側がどうしても不利になる。陣地に籠っているという利点も、戦車を含めた装甲部隊の火力の前に相殺されて

しまつ。

遂に高麗歩兵隊が自衛隊陣地の一角を突破した。

「後退！後退するんだ！」

かくして高麗軍は大宰府防衛線の最後のラインを突破した。

熊本 西部方面総監部

西部方面総監は戦況図を見ながら悪化する状況に呻いていた。

「戦略予備の部隊は動かせるんだよな」

幕僚たちは頷いた。

「よし。問題はやつらがどこに向かうかだ」

「おそらく鳥栖、久留米方面かと」

幕僚の一人が県道17号線を指で辿った。その先には九州自動車道の鳥栖ジャンクションがある。そこから西には長崎自動車道が、東には大分自動車道が伸びている。また国道もそれに併行して存在している。さらに南へ進めば筑後川を渡り久留米に出る。

鳥栖、久留米の一带を占領すれば九州の東西の連絡線を1つ断ち切り、西に進めば背振山地に布陣する第4師団主力の後方を脅かすことになる。妥当な戦略である。

「よし。第12旅団を進出させる。対戦車ヘリコプター隊の援護をつけて、筑後川を背後に陣を敷かせるんだ」

総監の命を受け、それを実行すべく部下たちが動き始めた。

「ところで、その他の戦線の様子はどうか？」

情報担当の幕僚がただちに報告をした。

「第24普通科連隊及び第43普通科連隊は激しい砲撃を受けていますが、彼らの正面では高麗軍は攻勢に出いていません。第4師団正面にも激しい砲撃が浴びせられ、第19普通科連隊が高麗海兵隊と思われる部隊による攻撃を受けています」

背振山地 第19普通科連隊陣地

こちらでも高麗軍と自衛隊が激しい砲火を交わしていた。河を間に挟んで両者は睨み合い、銃撃を加えていた。

自衛隊員たちは塹壕から小銃や機関銃を出して高麗軍に向けて連射している。そんな塹壕と塹壕の間に高麗軍の軽迫撃砲弾が落下して爆発する。河の向こうの道路では新たなK1A1戦車の残骸が燃えていて、その陰に高麗海兵隊員が身を隠しながら自衛隊に撃ち返している。そして別の戦車が陣地に砲撃を行っている。

桜井雄一は両者がフルオートで激しい撃ち合いをする中でほとんど引き金を引かずにいた。64式狙撃銃はそういう射撃をする銃ではない。桜井は銃弾が飛び交う中で冷静に敵の指揮官や通信兵の発見に努めていた。そしてそれらしき者を見つけたら、ただちに狙撃をした。こうして彼は敵を1人ずつ確実に減らしていった。

ふいに桜井の視界が真っ白になった。高麗軍が砲撃に発煙弾を混ぜたようだ。

「敵が撤退していくぞ！」

誰かの叫び声が聞こえた。彼の言葉を裏付けるように銃撃が次第に収まっていった。発煙弾は高麗軍が撤退する自軍を援護するため撃ってきたのだ。

散発的に砲撃は続いていたが、とりあえずは敵の襲撃を撃退した。激しい砲撃で陣地は滅茶苦茶になっていた。そして隊員たちは虚脱して、戦場は静まり返っていた。

「全員、集まれ！集合するんだ！」

そんな中で古谷3尉の声が響いた。

「次の陣地に移動する！荷物をまとめるんだ！」

命令が出たことで隊員たちはキビキビと動き出した。荷物をまとめ整理すると小隊ごとに輸送隊から派遣されたトラックに乗り込み、後方に築かれた次の陣地へと向かう。移動を待つ隊員たちは残る陣

地にトラップを仕掛けていく。さらに施設科 より一般的な軍事用語で言えば工兵 が川に架かる橋に爆薬を仕掛けた。

桜井らの所属する第19普通科連隊第一中隊は新たな陣地に向かう一方で、第一中隊の背後に控えていた第二中隊が高麗兵と相対することになる。彼らは第一中隊が次の陣地を整えるまで時間を稼ぐのである。

一時間後、高麗海兵隊が再び攻撃を仕掛けてきた。国道385号線を南下し、頑固に抵抗を続ける陣地に向かう。規模は戦車小隊と戦車橋を装備する工兵が配属された1個歩兵大隊だ。そのうち1個中隊が自衛隊の防衛線の手前で部隊主力から離れ、徒歩で川を渡る迂回し敵陣地を側面から攻撃しようというのである。

そして主力部隊も自衛隊陣地の正面まで到着しようとした。川の対岸に陣地があり、川越しに攻撃してくるのだ。そして、その陣地には再び高麗砲兵隊が激しい攻撃を加えている。砲撃が終わると同時に別働隊が自衛隊の陣地に側面攻撃を仕掛け、それに続いて本隊が突破する計画だ。

やがて砲撃が終わった。陣地の方から爆発音が轟く。

「敵と交戦しているのか？どうぞ」

大隊長が別働隊の指揮官に尋ねると、すぐに返事が返ってきた。

「いや。敵は撤退している。兵士が置き土産に引っかけたんだ。それを聞いた大隊長はただちに大隊主力に命じた。」

「前進せよ」

それから別働隊に新たな命令を発した。

「道に出るんだ。そこで合流する」

大隊主力は国道をまっすぐ進んだ。その先はU字カーブになっていて、橋を渡って自衛隊の陣地の背後に出る。そこで別働隊と合流するのだ。射撃を浴びることなく難なく進み、ついに橋の前に出た。しかし、進撃はそこで止まった。橋を落とされていたのである。

だが高麗軍にとってそれは想定内の範囲内だった。だからこそK1 A V L B戦車橋を随伴されているのだ。K1 A V L BはK1戦車の派生型の1つで、車体の上に60tまでの重量に耐えられる仮設橋の橋桁を載せ、それをアームで塹壕や川に架けて味方部隊の進撃路を確保するのだ。

それに先立ち歩兵隊が徒歩で川を渡り、対岸の安全を確かめる必要がある。というわけで歩兵達が川の前に立った。その時、対岸から銃撃が彼らを襲った。

対岸にも道路が続いていて、橋を渡ったところで急カーブになっている。道路はそのまま先ほどまで高麗海兵隊を苦しめていた自衛隊の陣地の背後に繋がるのであるが、そのカーブの側面は塀になっていて、銃撃はその上からだった。

それと同時に対岸の別働隊からも緊急の無線連絡があった。

<道路に出ましたが、反対側の林の中から銃撃を受けています>

桜井ら第一中隊の背後に築かれた第二中隊の陣地である。

三四・攻勢は続く

ダム湖南 国道385号線沿いの第一中隊陣地

南畑ダムの細長いダム湖の南端、その湖岸の線に沿うようにカーブを描いて国道385号線が通っている。自衛隊が陣地を築いたのはし字カーブの山側で、道路を見下ろすように兵士を配置している。第一中隊はカーブの正面で敵を迎え撃つ計画である。

さらに最初の防衛線から第一中隊の正面に至るまで国道385号線は湖岸に沿って敷かれている。反対側は崖になっていて逃げる場所がない。ここを狙わない手は無いと、ダム湖の対岸には第三中隊から派遣された分遣隊が布陣し、迫撃砲や対戦車ミサイルで対岸の国道を狙っている。そして、その側面攻撃を突破した先に第一中隊が待っているというわけだ。

桜井たちは新たな陣地に配置につき、武器を構えていた。すると爆発音とともに第一中隊の前の陣地があった付近から噴煙が上がった。

「敵とぶつかったな」

古谷の呟きを聞いて皆の目が前の陣地の方向に注がれた。立ち上る噴煙は次々と増えていった。

ダム北側の陣地

第一中隊が後退した後、この陣地を守っていたのは第二中隊だった。彼らは高麗軍主力を落とした橋の対岸で足止めしていたが、高麗軍の迂回部隊は既に第一中隊の陣地を占拠していた。迂回部隊は国道385号線を挟んで反対側の第二中隊と銃撃戦を展開していた。銃撃戦は高所に陣取る自衛隊側が優勢だった。高麗兵は道路の脇に伏せて銃撃に耐えなくてはいけなかった。89式小銃やミニミ機

関銃の放つ銃弾がアスファルトやガードレールに当たり火花を散らす。

すると空からヒュルヒュルというなにかが風を切るような音が聞こえてきた。

「砲撃だ！」

その叫び声と同時に自衛隊員たちが陣地の中に引込む。

道路の反対側でも高麗の兵士達が地面に伏せて砲撃が終わるのを待っていた。至近距離で対峙しているので、いつ高麗兵の陣取る場所に砲弾が飛び込んでくるかもしれない。実際、砲弾の破片が高麗兵の上にも降ってきている。

そんな中でも高麗の中隊指揮官は部隊を掌握していた。

「第2小隊に迂回して進撃路を探すように伝えるんだ」

中隊長の命令を聞いた第2小隊は匍匐で後方に下がっていった。それから自衛隊の築いた陣地を辿って別の進撃路を探すのである。

一方、自衛隊の陣地を攻撃していた味方の砲兵は次第に散発的になった。対砲兵戦を開始した自衛隊特科部隊への応戦を始めたので、味方部隊への支援がまばらになったのである。

高麗軍の攻撃は味方特科部隊の反撃でだいぶ軽減されたが、第19普通科連隊第二中隊の危機は終わっていないかった。敵の分遣隊が道路正面を迂回して山側を渡り、第二中隊の陣取る陣地の側面や後方を脅かし始めたのだ。

第一中隊の陣地への配置を終えたとの連絡を受けた第二中隊長は後退を決意した。しかし敵軍が肉薄している状況では難しい。そこで第二中隊長は後退の時間を稼ぐために攻撃に打って出ることにした。

中隊長は連隊直轄の重迫撃砲中隊と特科隊に支援を要請し、さら

に指揮下にある軽迫撃砲小隊にも弾薬残量を気にせず撃ちまくるよう命じた。

それらの火砲が道路を挟んで反対側の高麗軍に向けて一斉に放たれた。数十の砲弾が一斉に爆発して木々を吹き飛ばし、地面を耕す。激しい砲撃に高麗兵は釘付けにされたが、長くは続かなかった。数分後には砲撃は終わった。

「突撃！」

砲撃が終わると同時に第二中隊が一斉に陣地を飛び出し、道路を渡った。砲撃のショックから抜け出せない高麗軍は即応できず、道を渡る自衛隊員たちへの阻止射撃はまばらだった。高麗軍部隊は瓦解して、次々と後退していった。

「撃ち方止め！撃ち方止め！」

中隊長がそう命じた頃には、戦場には高麗兵の死体だけが残されていた。自衛隊の銃撃が終わると、あとは沈黙だけが残った。勿論、戦場に倒れたのは高麗兵ばかりではない。

「戦死7、負傷9です」

隊員達の点呼を終え、結果が中隊長に報告されたまた16名の隊員が失われたのだ。

「よし。撤収する」

中隊長は隊員たちに陣地の後方に待機しているトラックに乗り込むように命じた。高麗軍はすぐに反撃を仕掛けてくる筈だ。急がなくてはならない。

ダム湖南 第一中隊の陣地

桜井たちが戦場を観察していると、高麗軍の砲火に追い立てられるようにトラックの車列が前の陣地からこちらに向かってくる。

「援護射撃用意！」

第一中隊の隊員たちが一斉に小銃を構え、第二中隊を追いすが

敵兵が居れば掃討する準備をした。桜井も狙撃銃を構える。

結論を言えば第二中隊の援護は不要だった。高麗軍は落ちた橋を架けなおす最中であり、車両で逃げる部隊を追撃する手段はなかった。ダム湖の縁の一本道を走っているので高麗の砲兵に狙われればひとたまりも無かったが、高麗兵はダム湖を俯瞰できる観測点を持つておらず、砲撃の照準は甘くほとんど被害を与えなかった。

無事に撤収した第二中隊は第一中隊の陣地の左翼について、山中を迂回してくるかもしれない高麗軍歩兵部隊に備えることになった。

久留米市中央公園 第12旅団司令部

第12旅団は増援のヘリコプターを得て、ようやく1個普通科連隊の空輸能力を得ることができた。今はそのヘリコプター部隊を総動員して筑後川周辺に部隊を動かしており、司令部は川原に近い久留米の中央公園に置かれた。

旅団司令部はただちに北方へ偵察班をいくつも出して、南下しているだろう高麗軍の居場所を探っていた。そして、偵察隊が鳥栖市内に終結しつつある高麗軍を発見した。高麗軍は公園や競技場、学校などの市内各地に待機し、更なる攻勢に備えているようだ。そして高麗軍が占拠した施設の中には陸上自衛隊鳥栖分屯地も入っていた。

「早く取り戻したいな」

旅団長は心底からそう思っていた。

「問題はどちらへ向かうかだ。南か、西か」

高麗軍には国道34号線ないし県道31号線を西へ進み、陸上自衛隊第4師団の後方を遮断するか、もしくは南へ向かった筑後川を渡るか。それに対して幕僚の1人が意見を述べた。

「敵はこちらの存在にも気づいている筈です。我々を無視して西に進み、側面を晒すようなマネをするとは思えません」

「そつだな。では迎え撃つとするか…」
自衛隊側の方針は決まった。

鳥栖市民公園 高麗連邦陸軍第9旅団司令部

一方、南下してきた高麗陸軍第9旅団司令部は鳥栖の市民公園に陣を敷いた。旅団の部隊が集結を終えた時、日は西に沈みつつあった。午前中に攻撃を開始してから、丸々半日戦い続けたことになる。第9旅団は既に筑後川周辺に陸上自衛隊が展開しつつあることを把握していた。それが彼らが突破すべき最後の防衛線である。それさえ突破すれば後は機甲旅団の仕事だ。無傷の彼らが九州を蹂躪し、自衛隊に徹底的な敗北を与えるのだ。その為に目の前の最後の防衛線を突破しなくてはならない。

「仕掛けるぞ」
司令官の決断に参謀達が頷いた。そして詳細な計画の立案に入った。

「砲兵隊の方はどうだ？」
旅団長が尋ねると作戦参謀は首を横に振った。

「砲兵隊は師団砲兵及び野戦重砲兵とも砲弾をかなり消耗し、大規模な砲兵戦を再度行うのは難しいかと」

高麗軍は第二次攻勢に際して大規模な砲兵戦を行ったが、如何せん海を超えての侵攻であり、大量に砲弾を消費する砲兵戦を長く行い続けることは無理があった。高麗砲兵は日本に陸揚げし備蓄していた砲弾の多くを使い尽くしていたのである。

「どうしたものかな…」
旅団長は司令部のテントを出て、空を見上げた。まもなく日が落ちようとしていて、空はだんだん暗くなっていた。
「夜襲をかける。敵が態勢を整える前に迅速に叩くしかない」

三四・攻勢は続く（後書き）

大学の書店でジャック・ライアンシリーズ最新作「デッド・オア・アライブ」ゲット。前作で最後だと思い込んでいたので、思わぬサプライズ。

F XにはF-35が選ばれたという報道がありました。他の候補はF-18Eは迎撃機向きじゃないし、タイフーンはレーダーがまだにフェイズドアレイじゃない在来型ですし、それに両者ともどう足掻いても第4・5世代ジェット機に過ぎないわけですから、大々的に軍拡を進める中国に対抗するには第5世代であるF-35を選ぶのは当然でしょう。アヴィオニクスも3機種の中では最も進んでいるようですし。

問題は納入時期ですね。F-4退役に間に合うか。フェイズドアレイレーダー装備のF-15Eを中継ぎに導入して、F-15後継にF-35を導入というのがベスト、というのがF-22導入が不可能になった後の私の考えなのですが。

三五・夜戦（前書き）

というわけで、今年の更新第一号は日韓大戦です。読者の皆様、今更ですが、あけましておめでとつございます。そして今年もよろしくおねがいます。

三五・夜戦

熊本 西部方面總監部

日が沈み、漆黒の闇が空を覆おうとしている頃、陸上自衛隊の対高麗作戦の中枢に客人達がやって来た。座間基地からやって来たアメリカ陸軍第1軍団前線司令部である。

指揮官である中將が訪問したとき、總監は指揮所で部隊の配置を駒で確認していた。總監は突然の来訪者に驚いていた。

「来るのは先遣隊だと聞いていましたか？」

「指揮官が先頭に立たなくては。それに派手なセレモニーのために時間を無駄にしたくないので」

アメリカ陸軍の中將は事情を説明すると、地図の上に置かれた駒の配置を確かめた。

「これが現況ですか？」

總監が頷いた。その状況に第1軍団の司令官が呻いた。事前に報告は聞いていたとはいえ、状況は思った以上に悪い。

「防御線を突破されたと聞きましたが：大丈夫なのですか？」

「現在、第12旅団が新たな防御線を敷いています。第7師団先遣隊も行動を開始しました。それに突破された部隊も再編成中です」

總監は追い詰められているにしては楽観的な表情だった。

「それで、そちらの方は？」

今度はアメリカ陸軍の中將が配下の部隊について説明をする番であつた。

「今動かせる陸軍部隊は佐世保の第25師団第3旅団だけです。それに海兵隊の遠征旅団も1つ。こちらの方は直接の指揮下にあるわけではありませんが」

「^{IBCCT}歩兵旅団戦闘団1個に海兵旅団1個ですか。十分な戦力とは言えません」

「一両日中にはそれに2個旅団が加わります」

アメリカ軍の中将は一呼吸置いてから、一言付け加えた。

「装備を上陸させることができればの話ですが」

彼の懸念はその点だった。どちらとも海路輸送中でストライカー^{SUBC}旅団の装備は海上自衛隊、重旅団^{HBCCT}戦闘団の装備はアメリカ海軍の護衛にそれぞれ託されている。彼の指揮する旅団は優れた部隊であるが、海の上では荷物に過ぎないのである。

「なるほど」

総監はそう一言口にしてから、アメリカ陸軍の中将の手を握った。

「わが国のために派兵していただき本当にありがとうございます」

「同盟国として当然のことです。さあジェネラル。共に反撃の作戦を練りましょう」

鳥栖市

漆黒の闇の中を高麗軍の戦車が赤外線暗視装置を頼りに進んでいた。現代のテクノロジーは闇夜を克服しつつあるが、それでも完全ではない。高麗軍はそこを突くことを選んだ。

高麗軍は国道3号線と県道17号線の二手に分かれて南下していた。先頭には偵察部隊が進む。しばらくは市街地を通るので、建物の影に対戦車兵器などを持って隠れているかもしれない自衛隊普通科隊員が一番の脅威だ。徒歩の斥候隊が安全を確認しながら進む。

すると市街地を抜けた。道路の左右には田畑が広がっている。そこで部隊の先頭は歩兵斥候隊から戦車と装甲車から成る機甲偵察隊に引き継がれた。視界が広がる場所では優れたセンサーを持つ装甲戦闘車両の方が有利だ。

しばらく進むとまた建物が並んでいる地区に入る。筑後川から分かれた宝満川の周りに家々が建っている。宝満川を渡って進めば筑後川にぶつかり、そこを渡れば久留米である。高麗軍は建物の入り組んだ場所に入るにあたり、再び歩兵を前に出した。

家々の様子を伺い奇襲に備える高麗歩兵。そして彼らの予想通り、自衛隊はそこに待ち伏せをしていた。

国道3号線に面する川の土手に2丁の12・7ミリ機関銃M2を中心とした陣地が築かれていた。ミニミ機関銃と89式小銃も銃口を道路に向けている。暗視装置で国道を監視していた隊員が片手を挙げた。敵が接近していることを示す合図である。

銃の安全装置が外され、隊員達は引き金に指をかける。そして高麗の歩兵達が彼らの銃口の前にまで達した。

「撃て！」

隠れていた銃器が一齐に火を噴く。曳光弾が美しい光の筋を見せたが、その先に居た人間にはなんの救いにもならなかった。高麗歩兵の何人かが倒れ、別の兵士達が応戦する。

機関銃や小銃が火を噴くと同時に建物の間や、さらに家々の立ち並ぶ外側の田畑の中など各地に配置された対戦車ミサイルが一齐に放たれた。高麗軍は自衛隊のキルゾーンの中に飛び込んだのだ。使われたのは87式対戦車誘導弾と01式軽対戦車誘導弾で、縦隊に並んでいる戦車と装甲車の群れに飛び込んだ。閃光が闇夜の中で一際輝き、数輦の戦車が爆発する。

勿論、高麗側も黙ってやられるわけではない。特に開けた場所であるならば野戦では高性能なセンサーを装備する戦闘装甲車輛の方が有利である。赤外線センサーで自衛隊の陣地を見つけると、そこへ砲撃を撃ち込む。曳光弾が空中で交差し、激しい銃撃戦が繰り広げられる。対戦車ミサイルが飛び交い、砲弾が打ち込まれる。

戦いは県道17号線の側でも始まった。闇の中を閃光が飛び交い傍目には美しい光景であったが、その中で戦う兵士達には凄まじい破壊が襲い掛かっていた。

激しい爆音に紛れて甲高い風切り音が聞こえてきた。A H - 1 S 対戦車ヘリコプターが西から迫ってきていたのだ。暗視装置を頼りに筑後川に沿って超低空飛行で進んできたヘリコプター隊は畑の上に出て、一気に南下する高麗軍に迫った。

F L I R が戦車の影を捉えると、T O W ミサイルの照準を合わせた。

「発射！」

横一列に並んだ8機のA H - 1 S の編隊からそれぞれ一発ずつT O W ミサイルが発射された。ロケット噴射の閃光を残してT O W ミサイルは高麗軍の機甲縦隊に突っ込んでいく。

高麗側も一方的にやられるつもりはない。高麗軍部隊には2輦の自走対空機関砲が随伴していた。30ミリ機関砲を2門装備するK 30 <飛虎>である。リーダーでA H - 1 S を捉えると、砲身をその方向に向け、すぐに射撃を開始した。

よく対戦車ミサイルの方が射程が長いのだから対空機関砲は一方的に撃破される、とよく言われるが、それは兵器が戦場で使われる際に射程ギリギリから発射されることなど滅多にないという事実を無視した主張である。対空ミサイルによる攻撃を避けるために超低空飛行をしていたA H - 1 S は、機関砲の射程内まで入っていかざるを得なかったのだ。

激しい曳光弾の閃光の筋がA H - 1 S に襲い掛かる。機関砲の照準を向けられた1機はミサイルの誘導を中止して、回避行動をとらざるを得なかった。T O W は発射母機が目標を照準し続け、母機と繋がった有線回線を通じて誘導するミサイルだ。回避のために急激な運動をするA H - 1 S が目標を照準をし続けることはできないし、なによりヘリとミサイルを繋ぐワイヤーは回避行動の邪魔になる。ワイヤーが切断されて誘導を失ったミサイルは明後日の方向に飛んでいった。

一方、もう1輦に狙われたA H - 1 S は誘導を止めなかった。その目標は彼を狙う自走機関砲である。命がけのチキンレースだった。

そして、どちらも諦めが悪かった。TOWが<飛虎>に命中し、機関砲弾がAH-1Sのローターを吹き飛ばしたのはほぼ同時だった。<飛虎>は炎に包まれ、AH-1Sの機体は激しく地面に叩きつけられた。

なかなか奮戦した<飛虎>であったが、たつたの2輦で、しかも途中で片方が失われた状況で編隊で攻撃を仕掛けてきたAH-1Sに対抗するには無理があった。誘導を途中で諦めた1発と<飛虎>に命中したものを除いた残り6発のうち、5発が狙い通りの目標に命中した。

さらに激しい対空戦は残り1輦の<飛虎>をひどく目立たせることになった。それを見た地上の普通科隊員は手にしていた01式軽対戦車誘導弾の照準を<飛虎>に合わせた。発射ボタンを押すと、ミサイルが空中に放たれ<飛虎>目掛けて飛んでいく。赤外線画像認識システムで射手の誘導に頼らずに自ら目標を追い続ける01式から<飛虎>が逃げる術は無かった。ミサイルが<飛虎>の車体に吸い込まれ、次の瞬間には爆発して薄い装甲を粉碎した。

重大な脅威を排除したことに01式を発射した隊員は小躍りして喜んだ。しかし、彼は発射後に射手の誘導を必要としない01式の“撃ちっ放し”能力を生かすことができなかった。彼は戦場に自身を晒しすぎたのだ。

地上と空中からの激しいミサイル攻撃を生き延びたK1A1の赤外線センサーは友軍の対空砲を撃破した敵歩兵の姿を捉えていた。砲手は迷うことなく照準を合わせて主砲同軸機銃の引き金を引いた。120ミリ戦車砲弾を数キロ先の敵戦車に命中させる為の精密な照準装置と連動した7.62ミリ機関銃が発射した弾丸は僅かに数発だったが、自らの戦果に酔っていた1人の歩兵の頭部を吹き飛ばすには十分だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2521h/>

日韓大戦 第二部 遅滞の章

2012年1月5日00時46分発行